
コック × スミス

高橋逸平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コック×スミス

【Nコード】

N50530

【作者名】

高橋逸平

【あらすじ】

ある日、鍛冶師見習いの少年はふらりと立ち寄った村で、料理人と名乗る一人の少女と出会った。

しかしその娘の作る料理は激マズで……！？

プロローグ

——ついに手に入れた。

険しい山道を歩くその青年は、一人ほくそ笑んだ。

左手に携えたソレに目を落とす。

追い求めていたシリーズの中ではあまり上等なものではないが、それでも人間が作り上げたものの中では最高レベルのものだ。

これで目標に近づける。

そう思っただけで、笑いが漏れ出るのを止められなくなってしま
う。

だが、

「まずは、実験が必要だ……」

青年はつぶやく。

まずはこの作品に近づく事が肝要だ。

そのためには、複製品を作り出し、経過を見る必要がある。

そして複製品を持たせる被験体も最低でも十人は必要だ。

「子供を誘拐するか……？」

しかし、すぐにかぶりを振る。

子供を誘拐するのは簡単だが、被験体としては肉体がもろすぎる。

それに、リスクが高い。

自警団ぐらいなら難なく追い返せるが、騎士団に動かれたらこちら
も無事ではすまないだろう。

浮浪者を誘拐するという手もあるが、それだと街に行く必要があ
る。浮浪者とはいえ、誘拐の現場を押さえられてはやはり面倒だ。

つまり誘拐するなら、居なくなっても本当に困らない人間でなけ
ればならないのだ。

そこまで考えた瞬間、男は立ち止まった。

「俺は……なにを考えているんだ……」

駆け巡っていた邪悪な思想に、吐き気がした。

胃の中からあふれ出そうになるのを感じ、右手で口を押さえる。べしゃっ。

吐き出してもいないのに、口元に生暖かい液体の感触がした。あわてて手を離すと、手が赤黒く染まっていた。

血だ。

だがそれは、自分の口から出たものではなかった。

「あ……ああ……」

この血が誰のものか思い出し、青年はこみあげていたものをすべてぶちまけた。

喉が痛みを訴え、今度こそ自分の血が混ざり始めても、吐き続ける。

胃の中をすべてもどすと、おぼつかない足取りで小川を探し出し、血と吐しゃ物を洗いながした。

手を擦り合わせるたびに、透明だった清流が、まるで赤の顔料を流し込んだかのように帯を引いて流れていく。

「なんでだ……っ！　なんで俺は……！」

血がなくなっても青年は手と顔を洗い続けた。

ちらりと傍らに横たわる刀に目を落とす。

自分が旅立つきっかけであり、何年も探していたもの。

それを手に入れるために、絶対にやってはいけない事をしてしまった。

「俺はっ！　人を……っ！」

嗚咽が漏れる。

良心の呵責に押しつぶれそうになる。

青年は肩をぶるぶると震わせ、うつむき何度も後悔した。何度も、何度も、何度も。

数十分もの間、心の中で謝り続けた。

そして、

「まあ、こんなもんでいいだろ」

につこりと笑いながら顔を上げた。

その顔には、今までの後悔の色など微塵もなく、子供が見せる無邪気な笑顔のように晴れ晴れとしている。

——くよくよしても仕方がない。俺が殺したあの男のためにも、俺は目標を果たそう。

なんの疑いもなく、そう心に決めると、刀を抱え軽い足取りで山道へと向けて歩き始めた。

と、そのとき。

シュカカツ！

青年の眼前を、銀色の光が駆け抜け、乾いた音が響く。

目を向けると、太い木の幹に二本の矢が突き刺さっているのが見えた。

「ちっ、外したか」

「こりゃ、賭けは引き分けだな」

そうばやきながら、少し離れた木の陰から二人の男が姿を現した。無精ひげの生えた顎に、鋭く濁った目。

頭にバンダナを巻き、厚ぼったい服に身を包み、腰には剣を下げている。

典型的な盗賊だ。

「ちようどいいな」

思わず笑みをこぼす。

今日はツイている。

この刀だけでなく、被験体まで手に入るのだ。

この盗賊共なら、それなりに人数はいるだろうし、何より居なくなっても問題が起こる可能性はかなり低い。

「てめえ、何笑ってんだ？」

盗賊の一人が弓から剣に武器を持ち替え、青年の鼻先に切っ先を突きつける。

「恐怖で頭がおかしくなったのか？」

「安心しな。命までは盗らねえよ。ま、金目のもんは全部頂くがなとゆーわけで、その手の刀あ下に放りな」

不快な笑みを浮かべながら、盗賊は青年の左手に納まっている刀を指差す。

青年は笑みを絶やさず、

「わかった」

と短く答えると、言われたとおり刀を地面に落とす。

へへつと、盗賊の一人が笑い急いで刀に手を伸ばす。

「わかりやあいん——」

言葉を続ける前に、青年の膝が、屈んだ男の顔にめり込んだ。

そして青年は流れるような動作で、突きつけられた剣の刃を右手で握る。

「何を——」

「魔精加工」

反応する前に、青年はつぶやいた。

瞬間。

刃から太い針が飛び出し、盗賊たちの肩や足を貫いた。

「あ、あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああつ——」

あまりの激痛に、醜い悲鳴を上げる。

「黙ってくれ」

あまりに耳触りな悲鳴に、嫌悪の表情を浮かべる。

盗賊の一人の腹を思いつきり蹴りつけると、左手で頭をつかんだ。

盗賊の顔は、痛みと恐怖にゆがみ、醜さに拍車が掛かっていた。

「た、たす……」

「ああ。助けてやるよ」

当たり前じゃないか、と青年は声を掛ける。

なぜなら大事な被験体であり、道案内を頼まなければならないのだから。

「ただし条件がある」

「じよ、条件……？」

「ああ、簡単なことだ。とってもね………」

そっというや否や、右手に握った剣の刃から再び針を生み出し、もう一人の盗賊の右手を串刺しにする。

青年の刀に手を伸ばしていたのだ。

再び響く叫び声に青年は顔をしかめる。

「全く……何も学ばないな。いいか？ 次は無いからな」

「は、はひっ！」

コクコクと首を動かす。

従順な態度に青年は満足し、針を引つ込め、二人を解放した。

地面に転がった刀を拾い上げ、二人が立ちあがるのを見届けると、まるで世間話でもするかのような陽気な声で、

「お前らのアジトに案内してくれ」

と告げたのだった。

第1話：修理屋じゃなくて鍛冶師です

「壊れた鍋とかは無いですか？」

突如酒場に現れたその少年は、カウンターに座るなり、そんなことを店主に向かって言った。

年の頃なら十五か一六歳ぐらいだろうか。

少し逆立った短めの黒髪に、あどけなさの残る顔には、ブラウンの瞳。細いのがつしりとした体、黒光りする革製の服を身に纏い、足にも漆黒のブーツを履いている。

その風貌を見て店主はすぐに少年の正体を察した。

「お、修理屋か。今日は運がいいな。鍋が二つに、椅子が二席、あとは食器系を直してほしいんだが、代金はいくらだい？」

店主から水を受け取ると、少年は苦笑しながら首を横に振った。

「修理屋じゃなくて鍛冶師ですよ。あ、お金は結構です。その代わり、ご飯を一品をタダにしていたけるとうれしいですね。もちろんマスターがおごりたい分だけで構いませんよ」

この酒場のある村のように小さな村には、修理屋や鍛冶屋というものがないことが多い。

そのため、物が壊れたら自分で直すか、新しい物を店や行商人から買うしかないく、結構な値もする。

こういった旅の鍛冶師が来ると、新しい物を買うより大変安上がりで助かるのだ。

少年の言葉に、

「そりゃあ、かまわねえが……鍋とか色々あるし……ホントにそれだけいいのかい？」

もうしわけねえ、といった表情で店主は尋ねた。

いくら安上がりと言っても、結構な量がある。

この店が出せる最高値の料理でも、これから少年が行う労働には見合っていない。

それでも少年は首を振った。

「もちろん。修行中の身ですから、大金を貰うわけにはいきませんよ」

その言葉に、聞き耳を立てていたのか店中から声上がる。

「マスター、ラッキーじゃねえか！」

「ずるいぞマスター！」

「おい、兄ちゃん！　ウチの鍋も結構古いんだ！　見てくれねえかな？」

「そうだそうだー！　ウチもタダでやってくれ！」

「坊やあ、ウチの亭主の顔も修理してくれないかしらあ」

「おい、お前らっ！　兄ちゃんに失礼じゃねえか！　あと、メリッサんとこの旦那は手遅れだ！」

好き勝手言う客に向かつて、がははと笑いながら叱責する店主。

しかし少年は気分を害することなく、

「いえいえ、構いませんよ。さすがに皆さんからは代金をいただきますが……そうですね、明日の朝から一家につき銅貨一枚で引き受けましょう。金属限定で、量は関係ありません。……ただし刃物とは扱いませんけどね」

そう笑顔で言った。

途端に喝采が巻き上がる。

現金な奴らだ、と店主は苦笑しながら、

「まあ、兄ちゃんがそう言うならいいが……。よし！　ウチの常連さんたちが世話になるんだ！　腕によりをかけた料理をもう一品追加してやるよ！」

「それはありがたい。あ、先に修理の方からやっていいですか？　一働きした後のほうがご飯は美味しいですからね」

腕まくりを始めた店主を、少年は慌てて止めた。

言葉の通りだし、満腹状態になると集中力が散漫になるからだ。そんな馬鹿みたいな理由で失敗するわけにはいかない。

店主も、それもそうだな、と言って修理する品の前に置いていく。

あつという間に、築かれたガラクタの山に、少年は目を白黒させた。

「うわぁ……ほんとに結構な量だ。とくにこの鍋、穴空いたりとかへこんだりとか、凄いことになってますね」

「ああそれかい？ こないだ来た傭兵共がケンカを始めやがってなあ。追い出すために防御したり攻撃したりとかしてたらそんな風になったんだ」

迷惑な話だぜ、と口を尖らせる。

そんな店主を尻目に「あの時はスカツとしたなあ」とか「俺なんか三発も入れてやったぜ」とか客達が楽しそうにジョッキを口に運ぶ。

どうやら、オタマや食器が壊れているのは客達の仕業らしい。

こりゃぁ大仕事だ、と少年は苦笑すると、黒い皮の手袋を取り出し手にはめる。

この手袋が無いとちよつと大変なのだ。

「では……はじめますか」

そう言つて、少年は鍋の穴に手を置くと、意識を集中させる。

「魔精加工」

少年はつぶやく。

すると、少年の手から淡く光り始めた。

——？分解？。

穴をふさぐため、マナに干渉し鍋の一部を一時的に分解する。

——？再構築？。

続いて分解された鉄を再構築させて、穴をなくす。

簡単なように見えて結構集中力がいる繊細な作業なのである。

——？再構築完了？。

全ての工程をほぼ一瞬で終了させると、少年の手から光が消えた。それと同時に、ふうっと口から息が漏れる。

「おおつ。何度か旅の修理——鍛冶師に頼んだことはあるが……兄ちゃんはムチャクチャ早いな」

「ああ、すげえ！」

そんな店主達の賞賛の言葉を浴び、少年は照れくさそうに頬を掻く。

「そ、そうですか？ 僕の国だと大体これぐらいが標準時間ですよ」

「お、とゆうことは……その髪といい顔立ちといい、やっぱり兄ちゃんジャパング出身かい？」

「よくご存知ですね」

客の一人の言葉に、少し驚いた。

まさか自分の祖国が、こんな大陸の北西部の小さな村まで知られているとは思わなかったのだ。

ジャパングとは優秀な鍛冶師を輩出している極東の島国である。

鍛冶師の跡継ぎや弟子達は十二歳になると、修行の旅に出て現地の鍛冶屋でバイトをしたり、鍛冶屋が無い村で格安で修理を行ったりするのだ。

「兄ちゃんたちが思ってる以上にジャパングってのは結構有名だぜ？ それに最近になってこっちの地方まで修行に来るようになったからな。今の？魔精加工？ってやつだろ？ なんかマナとか言うのを操って何でも直せるって言う」

少年は頷いた。

物質に大きな力を加えることで変形させ目標の形にする事を、塑性加工という。

その塑性加工の中にも、『鍛造加工』や『押出し加工』といった

技術がある。

たとえば、鍛冶師が熱した鉄を叩いて武器などを作ったりするのは『鍛造加工』と呼ばれている。

少年がつぶやいた『魔精加工』も、そのいくつかある技術の一つである。

万物に存在するマナと言われる魔法の源ともいえる力に干渉し、物質を分解・構築・変形させるのだ。

一部の鍛冶師しか使えない技術だが、少年はそれを難なく使いこなす事ができた。

「ええ。でも、相性っていうのがありますから、何でも言うわけにはいけませんね。僕の場合は金属系と石とかですね。後は、木も多少はいけますが、小さな穴を消したりとか、木片をくつつけるぐらいが限界なんですよ」

「なるほどねえ。じゃあさ、たとえばあの脚が折れた椅子をさ——」
そう言っ、ギャラリーが壊れた者を次々と手渡していく。

まるで「これ消してみてよ」と言われる手品師のような気分になりながら、少年は一つまた一つとガラクタたちを蘇らせる作業を続けるのだった。

第2話：赤っ！（前書き）

修正しました。

クツクの口調が少し変わってます。

第2話：赤っ！

一〇分後、全ての修理が完了し、玉のように光る汗をぬぐう少年の前に、キンキンに冷えたビールが差し出された。

「はいよ、こいつはサービスだ！ ジャパンはたしか十四で元服とかいう成人扱いになるんだったよな？」

「良くご存知ですね。ありがたく頂きます」

ニツコリと微笑みながら、ビールを受け取ると一気に飲み干す。不思議な高揚感と、喉を襲うビール特有の感覚に涙が出そうになる。

ビールは——酒は苦手なのだ。

しかし、折角サービスとして出してくれたのだ。好意を無駄にするわけにはいかない。

が、そんな少年の気持ちがいいほどの飲みっぷりを見た客達は、「お、兄ちゃんいけるクチだねえ！ どうだい？ こっちに来て一緒に飲まねえか？」

「そうそう、お姉さんがお酌してあげるわぁ」

なんて事を言いはじめる始末だ。

少年は、慌てて

「い、いえっ、だいじょうぶです！ そ、それに、明日は皆さんのお宅に修理に伺いますので！ 修理の最中にゲロゲロされたら困るでしょう？」

と両手をぶんぶん振る。

これ以上飲まされたら、確実に吐く！

基本的に人の好意はありがたく受け取る性分の少年だったが、今回ばかりは全力でお断りする。

しかし、すぐに失態を犯したと思い至る。

こういう酒場の人間に嫌われるのは得策ではないのだ。あっという間に悪い噂が村中に駆け巡る可能性もある。

そうなれば、明日からの資金調達に悪い影響を及ぼしかねない。
気分を害していないだろうかと少し不安に思う。

そんな少年の不安を他所に、

「たしかにそりゃあ困る！ ま、困るのは掃除するカミさんだけだな！」

「お前んちは、汚れてるからあんまりかわんねえだろうがっ！」

「ははは！ 違えねえ！」

と言って、一同は陽気に笑っている。

どうやら全然気にしていないようである。

店内の様子を見て少年は、ほっと胸を撫で下ろす。

「片付けも終わったことだし、早速メシを作らせて貰うぜっ！」

鍋やら食器やらを片付けた店主が、陽気に笑う。

「さあ、兄ちゃん！ 何が喰いたい？ 三品ぐらいまでならなんでもいいぜ。食材さえあれば、メニューに無い料理だってオツケーだ！ もちろん、レシピを知ってる料理にかぎるかな！」

「な、何でも？ そうですねえ……」

腕まくりをする店主の豪快さに感心しながら、メニューに目を落とす。

刺身とかが食べたいのだがさすがにムリだろう。

前の村で「刺身がいい」といったら「生魚なんて喰うのか!？」

と思いつきドン引きされたことを思い出す。

味噌汁も材料的にムリだろう。

『当店のオススメ・ゲロ魚の鍋照り』とかいう得体の知れない魚の料理に挑戦してみるのもいいかもしれない。

と、少年がそんなことを悶々と悩んでいたその瞬間だった。

「たのもうっ！」

扉を思いつき開くけたたましい音と共に、鈴を転がすような可愛らしい声が店内に響き渡った。

皆一様に、入り口に立つシルエットに視線を集中させる。

シルエットの主は小柄な少女だった。

一番最初に思ったことは皆同じである。

「赤っ！！」

長年合唱の練習でもしていたかのようにハーモニーを奏でる。

そう、少女はとにかく、赤かったのだ。

目の覚めるような深紅の長い髪を後ろで軽くまとめ、目はルビーのように光り輝いている。

服装も、とにかく赤い。

炎のような赤いコートを羽織り、目を凝らしてみるとコートの隙間から赤いインナーが顔をのぞかせている。

赤。赤。赤。

全身黒ずくめの少年とは対照的に、全身赤ずくめにした少女は、まるでこの色が自分のテーマカラーだとも言いたげである。

そのくせ、整った顔や雪のように白い肌が、紅白のコントラストを生み出し、少女を何か神秘的な存在に思わせる。

その美しい姿に、客はもちろん少年も目を奪われた。

「げ」

皆と同様に呆気にとられていたはずの店主から声が漏れる。

その声に引き戻された少年が店主の方に振り向いてみると、店主は彫りの深い渋めの顔を、より一層渋くしている。

自分もいつかは渋い顔になりたいものだ、と思いながら少年はひそひそと声を掛ける。

「マスター？　どうかした？」

「兄ちゃん、あれ見てくんない」

そう言って入り口で仁王立ちする少女を指し示す。

言われて再び少女を観察してみる。

あまりの赤さに目が少し痛くなるが、その細い腰に掛けられているものに気がつく。

包丁だ。しかも二本。

その瞬間、少年もこの少女が何者なのかが分かった。
それは――

「私は、旅の料理人クック！ この店の店主に料理勝負を挑む！」

クックと名乗る少女が、大声で全てを代弁する。

料理人とはもちろん誰もが知っている料理人である。

ジャパングの鍛冶師と同様に、料理人たちは旅をする人が多い。

未知の食材を求めたり、自分の腕を磨いたり、新しい調理方法を学んだりと色々得る物があるからだ。

しかし、その反面、料理人を見た途端店主のように苦虫をつぶしたような顔をする人も多い。

腕試し目的で旅をする料理人が、料理勝負を吹っかけてくるからだ。別に断ればいいじゃないかと言うやつはとにかく甘い。断れば、料理人によつては「この店主はヘタレだぜー」とか言つて廻る奴がいるのだ。そんなことをされれば店の評判は確実に下がる。

受けたら受けたで面倒である。各地を転々とする料理人たちは基本的に腕がいい。勝つたらいいが、負けたら「他所者に負けた」と、やはり店の評判は悪くなる。

はつきり言つて料理人側に有利な点が多い。

が、もちろん挑まれる側にも有利な点はある。

「お嬢ちゃん、審査するのはもちろんここにいるお客さんたちでいいんだろ？」

これである。

料理勝負をする以上、審査をする審査員と言うものが必要になってくる。大抵の場合審査員は地元の人間が努めることが多い。もちろん審査は公平にやつてもらふようにするが、その舌は風土料理に染まっている。

つまり、地元の慣れ親しんだ味になびく場合が多いのだ（そこをひっくり返すのが料理人の腕の見せ所なのだ）。

冷や汗をかきながら、問いかける店主に、

「無論そのつもりよ。その舌、私色に染めてあげるわ」

クックは不敵な笑みを浮かべながら自信満々に言い放つと、カウンターめがけて一直線に店内を横断する。そんな少女の立ち振る舞いに、

「おもしれえ！ 嬢ちゃん頑張んなー！」

「親父い！ 村の威信にかけて負けるんじゃないよ！」

と所々で歓声が上がる。

そんな店内を尻目に、少年は、

「いいの、マスター？」

「まあ、勝率は高くないが何度か料理人との勝負に勝ってるんでね。兄ちゃん、タダ飯が一品増えたと思えばいいんじゃないか」

店主の方も、クックほどではないにしろ自信はまあまあといった感じ。

少年がそんな感想をつけていると、クックがカウンターまでやってきた。

店主はクックを厨房に入れると機材の使い方の説明し始めた。

「——でな、ここをこうすると」

「へえ……火力調整まで出来るの？」

「最近街で流行り始めたのを取り付けたんだ」

「ということはこちらの地方は大体コレを使っているということね」

「んー、まあそうだな。あー、そうだお嬢ちゃん。勝負内容はどうする？」

「ん、そうね……ねえ、少年」

「え？ 僕？」

不意に声を掛けられ、少年はきよとした。

そんな少年の間の抜けた顔を、クックの大きな可愛らしい瞳が凝視する。

遠目でも思ったことだったが、とにかく可愛い。

見つめられた少年はそんな事を思い、少しだけ動悸が速くなるの

を感じた。

「少年。名前は？」

「えっと、タクミだけど……」

「じゃあタクミ。あなたは何か食べたい？」

どうやら鍛冶師の少年・タクミに内容を決めさせるようだ。

その言葉に、タクミはメニューに目を走らせる。

いきなり何が食べたいと言われてもすぐには思いつかないのである。

その時、一つの料理に目が止まる。

先ほどの『ゲロ魚の鍋照り』だ。

腹も減ってきたしさっさと決めてしまおう。

「じゃあ、魚料理で」

そう告げると、店主とクックは「応ッ！」と短く応えて準備に取り掛かる。

戦いの火蓋が切って落とされたのだ。

後にタクミは語る。

ここで自分の人生が変わったのだと。

第3話：いざ勝負

「ねえ、クックさん」

カウンター越しに、リュックから自分の調理器具を取り出し始めたクックを見て、タクミは声をかける。

「クックでいい。何か用？」

「用って言うか、その鍋なんだけど」

「鍋？ ん、これは」

取り出した鍋に目を落としたクックは顔をしかめた。

万能鍋として名高いナカック二国製の黒い鍋の底に、大きな亀裂が走っている。

これでは油などが漏れ出してしまふ。

「仕方ない……店主、鍋を一つ貸していただけ？」

「ん？ ああ、壊れちまつてるな。いいぜ、好きな使いな！」

敵相手に気前良く鍋を貸す店主に周りから拍手喝采が巻き起こる。そんな周りを横目に、タクミはクックに耳打ちする。

「もしよかったら、直すよ？ 使い慣れた鍋の方がいいだろ？」

相手が多分同世代と言うこともあり、敬語では無く素の口調で話しかける。

「それはありがたいけど……そんなことできるの？」

クックは眉をひそめた。

先ほどの華麗な修理光景を見ていないのだから仕方の無いことだろう。

タクミはそんな態度に慣れているのか、

「出来るよ。ま、見てて」

そう言つて、そつと鍋の亀裂に手を当てと、一気になぞる。

すると、手の通つた後には亀裂は跡形も無くなっていた。

あまりの早業に眼を丸くしてクックは感嘆の声を漏らす。

「おお、すごい。錬金術師——いや、その格好は鍛冶師ね？」

「見習いだけだね」

「見習いとはいえ、素晴らしい。……なるほど、鍛冶師、ね……」
急にトーンを下げ、じいっとタクミを見つめるクック。

先ほどと同様の可愛い目だと、視線が交わる。
瞬間。

タクミの背に冷たいものが走る。

第六感が「お前、やっちゃったな」とでも言っているかのようだ。
「ぼ、僕の顔に何かついてる？」

おそろおそろ問かけると、クックはふいつと目を逸らした。

「いや、なんでもない。勘定は最高の魚料理でいいかしら？」

横目でタクミを見ながら、ニヒルに笑う。

その様子を見て、タクミも口を笑みを浮かべる。

「もちろん。期待してるよ」

そう答えると、すでに調理を開始している店主に目を向ける。

可愛いクックとの会話が少し名残惜しいが、ゲロ魚という得体の知らない魚が気になるのだ。

この村は内陸部だからおそらく、川や湖などに生息する魚なのだろう。

店主はちょうど捌きに掛かっているらしく、まな板には大きな魚が店主の手から逃れようと暴れまわっている。

「あれが、ゲロ魚？」

タクミは眉をひそめる。

まな板の上でもがき苦しむ魚は、一見コイのように見える。ゲロ的な要素は一切見えない。

もしかしたら『ゲロ』っていう湖とかで捕れたのかもしれない、故郷にも似たような温泉地あるし。

などとタクミが名前の由来について考えていると、店主は包丁の背で魚の頭を叩き失神させ、手際よく鱗を落とし始める。

鱗を落とし終わると、エラの付け根に包丁を入れエラを取り除き、エラの舌から一気に腹部に包丁を走らせる。

その時、タクミはゲロ魚の由来を理解した。

「ひいっ！ 気持ちわるっ！」

思わず、声が裏返る。

ゲロ魚の腹部から出てきた内臓・ワタが破れ、中身が飛び出してきたのだ。

ドロドロに溶けた小魚や、虫が次々とワタからあふれ出し、それこそゲロのような勢いでまな板に広がる。

しかも、良く見るとまだ少し動いていたりするものもある。

各地を転々としているタクミはもちろん野ウサギなどの狩りで捌いたりしているが、さすがに胃など内臓の中を見ることは避けていたので、思いっきり引く。

ドン引きするタクミを見て、店主は、

「ははっ！ 兄ちゃんにはちよつと衝撃的だったかな？ ゲロ魚のワタは破れやすくてね。ま、捌くときの見た目はアレだが、味は絶品だぜ！」

と会心の笑みを浮かべ、作業を続行する。

正直、今の光景がちらつについて美味しく食べられるかは微妙だが、こうなることを予想しなかった自分が悪い。

タクミが自己嫌悪に陥りながら反省していると、店内に歓声が巻き起こる。

「うおおおおおっ！ お嬢ちゃんすげえ！」

「料理人つてのは伊達じゃないな！」

慌ててタクミもクツクの方に顔を動かす。

ちょうど魚の捌きに入っていたクツクは、店主と同じ工程を、魚と包丁をクルクルと華麗に動かしながらあっという間に完了させたかと思うと、一口大に切っていく。

その早業たるや、店主の腕を遙かに凌駕している。

しかも、いつの間に切ったのか、ボールの中には大量の切られた野菜が山のように盛り上がっている。おそらく先ほどの歓声はこの野菜を切ったときに起きた物だろう。

食材を全て切り終えたのか、クックは包丁を洗いシュツとタオルで拭いて腰の鞆に戻す。

それを見て、思わずタクミはクックの腰にあるもう片方の、黒くて少し柄の長い包丁を指差した。

「あれ？ そっちの包丁は使わないの？」

「ん？ ああ、これは護身用兼火起こし用なの」
その言葉に、一同は首をかしげる。

護身用というのは百歩譲って、分からないでもない（料理人としてどうかと思うが）。

では、火起こし用とは一体どういうことなのだろう？

そう思ったが、一応真剣勝負の最中なので必要以上に声を掛けるのは控えることにした。

そんな一同を他所に、クックは鍋に油を引き火にかける。

十分に熱されたところを見計らい、魚、野菜とどんどん鍋に放り込んでいく。

たちまちバチバチというすさまじい音を発し始め、時折炎が立ち上ったりする。

その光景に、タクミは目を奪われた。

額に汗を輝かせながら心底楽しんでいるといった笑顔を浮かべ、細腕で鍋を振り、炎を操るその姿は、髪や服の色と相まってまるで火の女神のように映る。

そんなクックの姿に魅入っていると、タクミの視線に気づいたクックが、どうかしたか？、といった目で見つめ返してきた。

「あ、いや……」

とだけ言っと思わず目を逸らす。

すこし顔が熱い気がするが、熱気のせいだろう。そうに違いない。視線を逸らした先には、そんなタクミの様子を見て含みのある笑いをする店主の姿があったのだった。

第4話：激突と結果。

しばらくして、二人の料理が完成した。

タクミを含めた審査員五人分と、対戦者が食べ合う分、合計六人分の料理を二人は短時間で完成させたのだ。

さすがは料理人、さすがは（たぶん）長年酒屋の店主を勤めただけのことはある。

早速適当に審査員を選出し、カウンターに座らせる。

「よし、まずは俺の料理からだ！」

ごつつい胸をさらに張って、店主がドンツとカウンターに料理を並べる。

「ホントは煮付けにしたかったんだが、時間の関係上照り焼きにした！ 本日のオススメ料理の『ゲロ魚の鍋照り』だ！」

自信満々に言い放つ店主。

皿の上には、こんがりと焼き上げられ、おそらく少し甘めであるうタレがたっぷりと塗られたなんとも美味そうなゲロ魚が、その存在感を訴えかけている。

立ち上るタレの香りが、胃を刺激する。

すこし、解体時の光景が脳裏をよぎるが、それでも食べてみたいと思う料理だ。

「では、いただきます！」

一秒も待てない、と言った風に皆我先にとゲロ魚料理攻略に掛かる。

その身を崩してみると湯気が立ち上がる。

その光景がより一層食欲を刺激する。

ナイフとフォークをうまく使い、切り分けた身を口まで運ぶ。

「うまいっ！」

自然と、言葉が重なる。

それほどまでに美味しいのだ。

しかも、後にタクミが聞いた話だとゲロ魚はかなり生臭さが残るらしく、余程の腕がある人間で無いと取り扱うことは無いのと言う。

恐るべし、店主。酒場なんて止めて料理屋開けばいいのに。

恐るべし、ゲロ魚。名前とか解体光景は最低だけど。

そんな事を考えながらも、皆食材を口に入れる時以外は、一切口を開かなくなる。

「たしかに……これは美味しい……」

対戦相手のクックも、感嘆の声を漏らしパクパクとゲロ魚を頬張るのだった。

一〇分ほどで、『ゲロ魚の鍋照り』を食べ終わると、次はクックの料理がカウンターに並べられた。

「次は、私の番ね」

こちらも自信満々らしく、腕を組んで余裕の笑みを浮かべている。その姿に、再び店内から歓声と拍手が上がる。

どうやら、先ほどの調理光景に魅入られたのはタクミだけではなかったらしく、既にファンクラブのような物が出来上がっている。

「ありがとう、ありがとう」

クックもまんざらでは無いらしく、顔を赤らめながら手を上げて声援に応える。

「こほん。私の料理は、川魚と野菜をナカック二風に辛めに炒めた物。名前は無いわ。すこしピリツとするだろうけど美味しいはずよ」にやりと不敵に笑うクック。

彼女の自信を裏づけするかのようには、食欲を誘い出す刺激的な香りが鼻を抜けて脳にまで届いてくる。

ほんのり焦げ目のついた野菜と魚は、とろみのあるあんに包まれている。

さっそく味を確かめようとすると、クックは皿を両手に抱え、審査員以外の客達にも配り始めた。

「俺達も食っちゃっていいのかい？」

「ええ、作り過ぎてしまったので。食べてくださる？」

「いや、それウチの食材なんだが……まあいいか……」

困ったように、頬をかく店主。太っ腹である。

が、そんな店主の言葉を無視して、

「さあ皆！ 存分に味わってちょうだい！」

と鈴のような声を店内に響き渡らせた。

その言葉に、店内から「女神サマァー！」とか「おつかあ以外の女の手料理なんて何十年ぶりだろう」とかそういった叫びが聞こえてくる。

嬉々として喜ぶ客達のテーブルの間を縫って、クックはカウンタ―に戻ると、そのまま空いていたタクミの横に腰掛けた。

「店主、すまないわね。皆の反応が面白くてつい食材を使いすぎてしまったわ」

「まあ、兄ちゃんの修理代として使ったと思えばいいだろ。実際それでもおつりが来る」

そう言って先ほどの困り顔とはうって変わって満面の笑みを見せる。

店主の笑顔に安堵し、軽く会釈をするとタクミの方に体を向けた。

「ところでタクミ」

「うん？」

「あとでタクミに用があるの。ああ、食べてからいいわ」

「そ、そう？ じゃあ後で」

じっと見つめられて、慌てて料理に向き直る。

仕事の時や無意識の時、慣れた相手、後は悪人相手ならどれだけ美人で可愛くても普通に話せるのだがそれ以外だとどうも上手く話せない。

そんなタクミの反応に、ムフフと店主は笑いながら、店内に良く通る声で、

「皆！ お嬢ちゃんが作った料理は、兄ちゃんの代金から出ると

思ってくれ！ 喰う前にちゃんと兄ちゃんにお礼を言いなっ！」
と手を叩きながら叫んだ。

今まさに喰わんとしていた一同は互いの顔を見合わせ、

『兄ちゃん、ありがとなー！』

と投げやりに声をそろえる。

「あ、いえ……どうぞ食べてください」

そんなタクミの言葉に、待つてましたとばかりに、フォークやスプーンを口に運ぶ。

タクミも一同の様子に苦笑しながら、フォークを魚にぶっさして口に――

『ストオオオオオッ！ 正気か！？』

第六感の叫びがタクミの手を止めた。

フォークに刺さった魚の切り身に目を移す。

口元で止められたその切り身からは、山椒の香りのするあんがポタポタと滴り、カウンターにどろりとした水溜りを作って行く。

どう見ても美味そうにしか見えない。

それでもタクミの第六感は危険を訴え続ける。

そして次の瞬間。

ガタンッ！

となりの男が後ろに倒れた。

続いて、他の客達も後ろに倒れたりテーブルに突っ伏していく。

「な、なんだ！？ どうしたっ！？」

「だ、大丈夫ですか！？」

青ざめる店主を尻目に、タクミは客の一人に駆け寄り、体を起こす。

男は口を押さえ、顔色をカメレオンのごとく七色に変化させてい

る。

そう、口を押さえて。

その仕草を見て、タクミと店主はクツクの言った、あるフレーズを思いだした。

——ナカツク二風に辛めに炒めた。

——すこしピリツとする。

まさか……と二人は、錆び付いた歯車のようにギギギとゆっくり首をクツクに向ける。

「いや、山椒などの分量は間違えて無いわよ」

そう言つて、調味料の入ったビンを振るクツク。

元々入っていた分量が分からないので、まったく説得力が無い。

二人で問い詰めようとしたその時、男は手をおろし、口を開き始めた。

「……ず……ず……」

「……ず……」

良く聞こえなかったので聞き返す。

もう一度男は口を動かす。

「……ずい……」

「……ずい……」

「……まっずいいいいいいいいいいッ……」

他の客達も、負の叫びのハーモニーを奏でる。

ある者は天——というかランプの光に手を伸ばし、ある者は水樽に顔をつっこみ、ある者は狂ったようにテーブルをかきむしっている。

「ま、まっずい？」

タクミの問いかけに男が食つてかかる。

「ああ！ まっずい、まっず過ぎるっ！ 香りと味が一致してないわ、魚はさっぱりしているくせになぜか野菜は生臭いわ、辛めとかピリ

ッとするとか言ってたのに蜂蜜のごとく甘いわ、あんはいつまでたっても舌にまとわりつくわ、なんか鼻からとびだしそうになるわとにかく、ま……ず……い……」

グルンと白目を剥くと、男はそのまま泡を吹いて倒れてしまった。「ちょ、ちょっとおじさん！？ おじさあああああん！」

とりあえず、その場の勢いで男を抱えて絶叫してみるタクミ。

それにしても、先ほどの第六感はこのことを指していたらしい。タクミは自分の感の鋭さに感心する。

ちなみに、この地獄絵図が展開されている酒場の主はと言えば、「おいおい、何言ってるんだよ。皆、悪ふざけが過ぎるぞ。こんなに美味しそうなんだからまずいわけ無いだろ」

と笑いながら、クツクの作った決して料理とはいえないであろう産業廃棄物にフォークを刺す。

「ちょ、マスター！？ あんた——」

何考えてるんだ！ と言う言葉も間に合わず、店主はそのままフォークを口に入れ——その場に崩れ落ちたのだった。

これは後に『女神の悪ふざけ事件』としてこの村に語り継がれることになるのだが、それはまた別の話である。

ちなみに、誰がどう考えても勝負に負けたクツクと言えば、悔しがる素振りも見せず、倒れた人たちを必死に診療所に運ぶタクミの背中を、ただじっと見つめていたのだった。

幕間 1

昔炭鉱だったその人工の洞窟は、現在盗賊たちのアジトとして利用されている。

いや、利用されていたと言った方が正しいかもしれない。

パチパチと薪を燃やしながら暗闇を照らすかがり火は、幾人もの影を映し出す。

ただ、ほとんどの影は卵のように丸くなっており、一つだけ長細い影が天井まで伸びていた。

「まあ、こんなもんか」

そう言って青年は刀を鞘に納めると、転がる男達の数を書え始めた。

「——六、七、八。もう少しほしいところだなあ」

嘆息する。

最低でも十は欲しかった。

実際のところ、被検体は四人もいれば十分なのだが、不測の事態に備えて十人はいると心強いのだ。

青年は、苦悶の表情でうずくまる盗賊団の首領の胸倉をつかみ、無理やり立たせた。

「おい、これで全員なのか？」

「……………」

反抗的な目をする首領の鳩尾に、拳をめり込ませる。

「……………もう一度聞く。これで、全員か？」

「……………い、いや……………あと三人……………村向ここの森に出かけてる……………」

「そうか」

満足の行く答えに、青年は手を離れた。

これで最低数以上の被検体は手に入れた。

次は根城の把握をしなければなるまい。

いざという時の逃げ道を知っておく必要があるのだ。

首領を案内役を選び、後の盗賊たちは剣を魔精加工で変形させた手錠と足枷で拘束し、逃げられないようにする。

「さあ、案内してくれ」

奥へと続く真つ暗な坑道を指差す。

いきなり現れた男にいいように扱われ、首領の額に青筋が浮き出るのが見えた。

「なんだ？ 不満なのか？」

「……っ！ べ、別に不満なんて……ねえよ……」

「ならいい。ただ、今日から俺がお前達の主になるんだ。言葉遣いには気をつけてくれ」

その言葉に、首領はその堀の深い顔を一層深くして詰め寄る。

「ああっ？ ふざけんじゃねえ！ 俺がここまで来るのに——」

言い終わらないうちに喉をわしづかみにされ、首領は口をコイのようにぱくつかせた。

凍て付くような鋭い目で、首領を見据えながら、

「態度にも気をつける………！」

と怒気を押し殺しながら言い放つ。

首領の顔から血の気が引く。

——溶かされる！

青年が剣を粘土のように手で弄んでいた光景を思い出す。

「す、すまねえ……！ お、俺が悪かった……」

「それでいいんだ。さっさと案内してくれ」

そう言って首から手を離すと、青年はランタンを押し付けた。

相変わらず不満の色を浮かべる首領を先頭に歩かせ、二人は真つ暗な坑道へと足を踏み入れた。

「小さいなあ」

一〇分ほど歩き回って、青年はつぶやいた。

鉱山だったにしては、このアジトの規模が恐ろしく小さいかった。

たった一〇分歩いただけで、もう残す部屋は二部屋になってしまったのだ。

「なんでも、金が出るとかいふ噂が立って当時の領主が掘り始めたらしい。何にも出なくて半年で打ち切ったらしいがな」

首領は苛立たしげに答えると、ぎいっと扉を開け部屋へ入り、青年もそれに続いた。

部屋といっても通路より広いだけの空間で、扉は盗賊たちが適当に拾ってきた板をくつつけたものだ。

中には簡素なつくりのテーブルとベッドがあり、床には酒瓶が何個も転り、壁には3つほどランタンが掛けてある。

「ここが俺の部屋だ。こんなところだが、他のヤツラの部屋よりましだろ？」

「そうだな。まあ俺にとっては、豚小屋と馬小屋ぐらいの違いにしか思えないけどな」

青年の馬鹿にしきった口調に、首領はぎりつと奥歯を噛み締める。だが、青年の恐ろしさを知っている以上、短気な行動をとるわけには行かない。

その時、部屋を見回していた青年がクルリと振りかえり、思い出したかのように尋ねかける。

「隣の部屋はなんだい？」

「隣？ ああ、最後の部屋か。元工房で、今は物置として使って――」

瞬間。

物凄い勢いで首を捕まれる。

「今、工房って言ったか」

青年の瞳がざらりと光る。

ゆらゆらと燃えるランタンの火の明かりによって、その目は抜き身のナイフのように鋭く感じられた。

「も、元工房が――」

「なんで、工房がこんなところにある」

「しらねえよ……！俺達がアジトに使い始めた五年前にはもうあったんだよ！」

「前にもここを根城にしていた奴がいた、ということか……」

つぶやき、手を離れた。

襟を正しながら軽く咳払いをする首領には目もくれず、青年は顎に手をあて思案する。

山奥や森に工房を作る鍛冶師はそれなりに存在する。

人間嫌いななど性格的な理由が大半だが、それとは別にある特別な理由のために山奥などに工房を作る場合がある。

魔剣を鍛造には最高の環境なのである。

魔剣と呼べるレベルの刀剣を生み出すには、魔精加工と鍛造加工を同時に行う魔精鍛造という手法が用いられる。

このとき、素材となる金属に常にマナを注がなければならぬため、周囲に人が居ない、かつマナに溢れている場所に工房を持たなければならぬのだ。

そして、そんな場所でもさらに不便な洞窟や鉱山に工房を作る理由といえば、

「龍脈——」

東洋でよく知られている風水では、力場、つまりマナの集中している土地や場所を龍脈とよんでいる。

龍脈のマナは総じて密度が濃く、質がいい。

そのため、打たれた魔剣は切れ味、能力共に高品質のものが出来る上がるのだ。

「く……くふふ……あはははははハハハハハハハハハハ！」

青年は笑った。

鍛冶道具を調達する手間を省けただけでなく、龍脈までついてきたのだ。

これですぐにでも行動に移せる。

そう思うだけで、青年の狂喜的な笑い声は高まっていく。

その笑い声に、首領は軽い戦慄を覚え後ずさりをする。

「な、なんだよ……たかが工房一つで……あんたも錬金術師なら工房なんて珍しくもなんともないだろ!？」

そんな叫びに、青年は笑い声をおさめ、首領に向き直った。

声こそ出ていないものの、その口元は殺人鬼のように猟奇的に歪み、目も血走っている。

「錬金術師？ この地方ではそう呼んでいるのか。俺は鍛冶師だ」スミス

「鍛冶師？」

「そう、鍛冶師のキリカだ」

青年はそう言つと、再び楽しそうに笑ったのだった。

第5話：視線

「まあ、若い娘に鼻の下伸ばしてた亭主にはいい薬よ」

昨晚の惨劇の感想を、被害者の奥さん達は口をそろえてこう言った。

既に太陽が昇っているのにもかかわらず、被害者達はベッドから起き上がることが出来ないらしい。

もちろんタクミは口をつけていないのでいつも通りの清々しい朝を迎えている。

「はあ、そうですか」

気の無い返事をしながら、修理代として銅貨一枚を受け取る。

「僕としてはクックにお咎めが無かったのが不思議で仕方ないですけどね」

苦笑するタクミ。

昨日の惨劇のあと、診療所に運ばれた人たちは謝るクックに笑って「まー、楽しんだしいいんじゃないかね？」と許してくれた。

よく許せるなあと思ったが、さつさと宿で寝たかったので口には出さなかった。

「まあ、毒を盛ったわけでもないからねえ……役人に突き出すほどでもないし、亭主たちがいいって言うてるんだからいいんじゃない？」

「寛大ですね……では、僕はこれで」

まだ三件はまわる予定があるので、と言って次の家に向かうとすると、呼び止められた。

「あ、タクミ君。朝ご飯はもう食べたかい？ もしまだだったらウチの亭主の分食べちゃって。どうせまだ起きれないだろうしねえ」

「え、いいんですか？ あー、でも……」

タクミは顎に手をあてて考える。

昼前にはこの村を出発して、早く山向こうの街に付きたいのだ。

大した時間ではないだろうが、他の家の修理の量もわからないので寄り道はよくない。

「あー、大変ありがたいんですけど、時間も――」
あまりのないので。

そう言いかけたタクミは不意に視線を感じ、後ろを振り向いた。そこには、どこかの家の子供達がタクミに向かって指を刺していたり、奥様方が手を振っていた。

タクミは首をかしげる。

一瞬だが、第六感が火事でも起こったかのようにカンカンと鐘を鳴らしたのだ。

「？」

「どうしたの？」

「あ、いえ。なんでもありません。では、時間もあまり無いのでここで失礼しますね」

そう言って今度こそ別れを告げる。

また来てねー、と腕を振るおばさんに、営業スマイルを貼り付け軽く手を振り返す。

ふと、タクミは空を見上げ呟いた。

「また来てね、か……」

どの村に行っても聞くこの言葉。

タクミはこの言葉を聞くたびに、

――次にこの村に来るのは何十年後だろう。

――そもそも、戻ってこれるのだろうか。

――なぜ、奥様方ばかりがその言葉を言うのだろう。男から言われたことは二、三回ぐらいいしか無いぞ。

とそう思う。

それにこの村にもアレの手がかりは無かった。

まあ、それはそれで自分にとってはいいことでもあり、悪い事でもあるが。

「うー、いかんいかん。アレは探さない」と

身震いすると、顔をパンパンと叩いて気合を入れなおす。

アレを思い出すとどうしても弱気になってしまう。

ここは一つ鼻歌でも歌って気分を切り替えよう、と考えていると

「——ッ!？」

まただ。

再び鳴り響く第六感の鐘の音に、タクミは勢いよく振り返る。

やはり危険を感じるような人物はいない。

ふっと体から力を抜く。

三週間前の『あの出来事』から、自分はいろいろと臆病になったらしい。

「今の僕を見たら、なんて言うかなアイツ……」

森向ここの街で待ち合わせをしている相方のことを思い出す。

半年前から別行動を取っているアイツは、ちよつと変わっているが、腕は立つし自分の良いブレーキ役だ。

アイツと別れなければ、『あの出来事』は起こらなかっただろう。

「早くアイツに会いたい……」

会えば、この不安は取り除かれる。

そう思いながら、タクミは次の修理へと足を向ける。

その後も、時折感じる視線に集中力を乱し、全ての修理を終え村を出る頃には昼を過ぎてしまっていた。

第6話：面倒な奴ら

「突然ですが、イライラがマックスです」

タクミは思わず独り言を言ってしまった。

葉を隠すなら森の中。人を隠すなら人の中。

まったくその通り。

葉っぱを隠すのにわざわざ宝石箱の中に突っ込むような馬鹿はいない。

もちろん隠れるためにわざわざ猿の群れに紛れ込むような人間は、まずいないだろう。

足音もまた然りである。

色々な人が行きかう大通りの喧騒なかに溶け込ませることで初めて、相手に足音を感じさせにくくすることが出来るのだ。

つまり、である。

こんな不完全な慣らししかされていない森の道を、パキツとかズルツとかガツチャガツチャと音を立てて歩けば、誰だって尾行されていることに気づく。

最初こそ、尾行されている気配にビクビクしていたタクミだったが、今ではイライラしている。

十回を越えた頃から数えるのを止めたタクミは、もう一度後ろを振り向いた。

枝の隙間から何条ものあたたかな光がさしこむ少し幻想的なその道には、誰もいなかった。

いや、正確には木の陰から赤い髪が見えている。

正直最初に振り返ったときから、チラチラ彼女のテーマカラーが見えているのだが、本人的には完璧に尾行していると思っただけ、突っ込むべきなのかと考えているうちにタイミングを逃してしまったのだ。

ただ、何回も繰り返すうちにどんどん雑になっていった結果、今

では、ナカツク二製の鉄鍋が完全に木の脇から顔をのぞかせている。ここまで来ると、もう見なかったことには出来ない。

もと来た道に戻って、

「何やってるんだよ、クツク」

タクミは鉄鍋、もとい彼女に向かって声を掛ける。

急に自分の名前を呼ばれ驚いたのか、鉄鍋は一瞬飛び上がると、そのまま道に墜落した。

ガアアアアン！

とけたたましい音を立てた鉄鍋を、慌てて赤髪の少女が拾い上げる。

タクミの言った通りクツクである。

クツクは鉄鍋をクルクルと回しながら傷やへこみが無いのを確認めると、ほっと胸を撫で下ろした。

「よかった、無事みたい」

「『無事みたい』じゃないよ」

「あ、タクミ。こんなところで奇遇じゃない」

「何言ってるんだよ。ちゃんと途中から気づいてたんだからな」

奇遇の一言で済ませようとするクツクに、タクミは軽く突っ込んだ。

実は最初っから気づいていたのだが、そこはタクミの優しさである。

嘘だ。

ただ「そんなはずは無い！ 私の尾行は完璧だ！」とか言っ、食って掛られるのを避けるためである。

「途中から気づいてた」と言っておけば、嘘っぱく聞こえなくなるので相手もそれなりに満足するのだ。

「嘘をつかないでほしいわ。最初から気づいていたんでしょ？」

目論見が外れた。

「あ、う、うん。実は最初から気づいていたんだ」

「そう……やっぱり気づいてたんだ……」

しょぼん、とうなだれるクック。

め、めんどくさっ！

と叫びそうになるも何とか踏みとどまる。

そこで、彼女の雰囲気、昨晚とは少し違っていることに気づいた。

昨日の印象では、もっと凜とした空気を纏っていたし、こんな風にわかりやすく感情を面に出すようなタイプではなかった。

「なんか……雰囲気とか違うかい？」

疑問が口をついて出た。

その言葉に、クックは顔をあげると、きょとんとした顔で、

「それはそうよ。昨日は料理勝負の最中だったじゃない」

「君は料理勝負だと雰囲気とか変えるの？」

「だって、料理人とはいえ私は女よ？ ナメられたくないじゃない

！……まあ、昔の癖が抜けてないってこともあるけど」

ぎゅっと拳を握る。

タクミはすぐに納得した。

料理人に限ったことではないが、彼女の言うとおり、女性だと軽く見られることが多い。

女商人とか女騎士にそれが顕著に現れるが、料理人も例外ではないらしい。

だからあんな中性的な雰囲気をかもし出していたのだろう。

ただ、顔が可愛いので『効果は抜群！』というわけではなかったが。

と昨日との違いについて理解すると、タクミはとりあえず話を本題に戻すことにした。

「なるほどねえ。それはそれとして、なんで尾行なんてしたんだよ。結構地味に怖かったんだぞ」

目を半眼にして、クックに問いかける。

尾行される理由なんてタクミには思い浮かばないのだ。

しかしクツクはタクミの問いかけに、頬をぷうつとふくらませ、
「あんたが約束をすっぱかしたからじゃない」

とつぶやき、深紅の瞳でにらみつけた。

「約束？ 約束なんて」

「したわよ。しかも昨日の晩っ！」

「晩？ 晩……………あっ」

思わず声を上げる。

たしかに酒場で、

『あとでタクミに用があるの。ああ、食べてからいいわ』

『そ、そう？ じゃあ後で』

と、軽い感じではあったが約束をした。

その後の惨劇のゴタゴタで完全に忘れてしまっていたのだ。

タクミは額を押さえた。

基本的に律儀な性格のタクミは、約束とかは極力守るようにしているのだ。

「ごめん……………忘れてた」

今度はタクミが落ち込んだ。

急にタクミが肩を落としたので、クツクは驚いた。

「い、いや、思い出してくればいいの。だからそんなに落ち込まないで、ね？……………面倒な奴ね（ぼそっ）」

面倒な奴に『面倒な奴』と言われ、タクミは一層落ち込んだ。

実際には二人とも面倒な人間なのだが、それを指摘する人間はこの薄暗い森の中には一人としていなかった。

「で、約束があつたのは思い出したけど、なんの用があつたの？」
ひとしきり落ち込みなんとか持ち直したタクミは、横を歩く小さな赤髪の少女に尋ねた。

相変わらずガツチャガツチャと音を立てて歩くクツクは、

「ん、それはね……」

と呟いたかと思うと、小走りしてタクミの数メートル前に飛び出し、まるで新品の服をお披露目するかのようになら、その場でくるりと一回転する。

ふわりと赤い髪が舞い、コートが炎のにヒラリと翻る。

微笑む彼女に眼を奪われそうになるが、リュックの中でガチャチャチャッ！ と物凄い音がしたので、現実引き戻される。

「タクミ！ 私はなに！？」

「自称料理人、正確には産業廃棄物生産仕事人のクック」
即答する。

「ちがあああああうっつ！！」

タクミがつけた的確な肩書きを、クックは顔を真っ赤にしながら全力で否定する。

「じゃあ、対・口を割らないスパイ用拷問料理専門研究家」

「それも違う！ さつきからなに！？ あんた、私の料理が毒物だとでも言いたいのか！？」

「なに言ってるんだよ。そんなこと思ってもいないよ」

「そ、そう。それにしても含みのある笑いを――」

「ただ、食べるにはそれ相応の訓練が必要ってだけさ」

「……………ぐすん」

あ、また落ち込んだ。

ちよつと言い過ぎたか、とはもう欠片も思わず、タクミは道端にしゃがみこむクックに声を掛ける。

「で、君が料理人（笑）なのは分かってるけど、結局なんの用？」

「なにか嘲笑のような物が混ざっていた気がするけど……まあいいわ」

納得のいかない表情で、クックは立ち上がり、今度は堅い黒皮の服で覆われたタクミの胸にトンツと手を置く。

「では、あなたはなに？」

すつと真顔になり、タクミを見据える。

紅玉のように輝く赤い瞳に見つめられ、タクミは少し頬を赤らめる。

「ぼ、僕は……鍛冶師……だけど」

「そう！ 鍛冶師！ さあ、もう私がなにを言いたいかわかったわね！」

「さすがに料理の腕は直せないよ？」

「だからそれも違う！ そもそも私の腕は完璧よ！」
自信満々に言い放つ。

どこからその自信が来るのかは全く分からなかった。

「違うのか……」

正解だと思っていたタクミは口に手を当て、頭をひねる。

整理すると、『私は料理人で、お前は鍛冶師』という情報しか出てこない。

用があると言うからには、職業で何らかの関連性があるのだ。

ん？ 関連性？

なにかが引つかかった。

あともう少しで応えにたどり着きそうなタクミ。

しかしクツクは、タクミが正解にたどり着くまで辛抱できなかったように、大声で叫んだ。

「タクミ、あんた私と来なさい！ とゆーか、私のものになりなさいっ！」

関連性が見えなくなった。

あまりのことにタクミがあっけに取られていると、クツクは自分の言ったことの重大さに気づき、顔を真っ赤にする。

ただでさえ全体的に赤いというのに、今では本当に赤一色になってしまっている。

「あ、いや、ち、ちがうの！ ちょっと、言い方を間違えただけっ！」

必死に手をばたつかせる。

「そ、そうだよね」

そういう反応をされると、タクミもどう対応していいのか分からなくなってしまう。

奇妙な沈黙が二人を包む。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」あのね」

沈黙に耐え切れなくなったクックが切り出した。

「うん？」

「私のものになりなさい、ていうのはね……『私の専属鍛冶師になつてくれない？』と言うことであって、その、決して、私の男になれとかそういうんじゃないの。わ、わかる？」

「う、うん、わかった。——って専属鍛冶師？」

思わず聞き逃してしまうところだった。

専属鍛冶師とは、個人や組織のためだけに働く鍛冶師である。

騎士団専属とか、宮廷料理人専属とかが有名である。

フリーや街の片隅で一般人を相手にするより、専属鍛冶師のほうが収入は良いし安定していることが多い。

それに専属鍛冶師に任命されると言う事は、鍛冶師としての腕を評価された事であり名誉な事なのだ。

が、しかし、

「ヤダ。というかムリ」

「なんで!？」

即答するタクミの胸倉をつかむクック。

ぐいっと斜め下に引き寄せられ、タクミはたたらをふんだ。

ちよつと顔を突きだせば口付け出来そうな距離に、クックの燃えるような赤い瞳と可愛らしい顔がある。

タクミは顔を赤らめ、目を逸らす。

「どうして？ 誰かの専属になっている、というわけではないんでしょう？」

なおも問い詰めるクック。

（たぶん今の状況を理解したら、また顔を真っ赤にするんだろうなあ）

そう思いつつ、タクミは目を逸らしたまま理由を告げた。

「だって僕、刃物は扱えないし」

クックの目が点になった。

それも仕方の無いことだろう。

どの分野を専門にしても、鍛冶師である以上刃物は必ず鍛造するものである。

ましてタクミは、実用性と芸術性を兼ね備えたカタナなる武器を多く輩出する鍛冶先進国のジャパング出身だ。

それなのに、「刃物扱えないし」なんていわれたら呆然とするのは当然の事だろう。

「ごめん。もう一回」

「刃物扱えないし」

「ワンモア。プリーズ」

「刃物ダメ！ ゼッタイ！」

「そこまで……」

つかんだ手を離し、ふらふらと後ずさる。

実際には『扱えない』のではなく『扱えなくなった』のだが、タクミはその事を伝えようとはしなかった。

扱えないということに、かわりないことだからだ。

「とゆうわけで、残念だけど他をあたってね」

そう言って、棒立ちしているクックの横を通り過ぎるタクミ。
だが、

「まちなさい！」

「ぐえっ！」

思いつきり襟をつかまれ、変な声が出る。

振り返ると、真剣な顔をしたクックが目映る。

「キープよ」

「はい？」

「あんたをキープしておく」

「えっと……」

「いつ他の鍛冶師に会えるかわかんないし、タクミも心変わりするかもしれないじゃない？ だからキープしておくの」

「キープって……リユックにでも詰め込んで連れまわすつもり？」

「そんなことしないわよ。私がタクミをストーキングすればいいだけの話だもの」

真顔ですごい事を言っただけだ。

つまりクックは、タクミが心変わりするか、代わりが見つかるまで旅についてくる、と言っているのだ。

タクミは頭を抱えた。

街で待ち合わせしているアイツも、似たような感じで旅についてきたのだ。

なぜ自分の周りにはストーカー宣言をする奴ばかりが現れるのだろっ、と頭を痛める。

こういう手合いは何を言っても絶対についてくるのだ。

「ふふふ……ストーキングわよお……」

と怪しい笑みを浮かべながら意気込むクックに呆れつつ、

「好きにしてくれ……」

と呻くのが精一杯なタクミなのだった。

第7話：ジャパングの秘密？（前書き）

どうも、久しぶりの投稿です。

一ヶ月以上もかかってすいませんでした！

実は、もう一つ謝らなければならぬことが……

1話から6話までの修正で、ヒロインの口調の変更とか、一部の人間の名前が変更されています。

ホント、すいませんでした

第7話：ジャパングの秘密？

夜になる前に森を抜けて街道に出る予定だった。

しかし、クックに絡まれたせいで、時間を大幅に消費してしまい、タクミは川原でキャンプを張ることにした。

なぜかクックも一緒である。

「まったく……、クックのせいでもう夕方じゃないか」

「別に私のペースに合わせる必要なんてないのに。私はただあんたをストーキングしているだけなんだから」

「こんな広い森の中において行くなんて、そんな事できるわけないだろ。あと、ストーキングはやめてくれないかな」

本当は『一人旅がちょっと怖い』とは言えず、とりあえずはぐらかしておく。

「優しいのが冷たいのか、わかんないわね」

そんなことを言い合いながら、二人は川に釣り糸を垂らした。

保存食は地味に高いので、タクミはなるべく道中で確保することになっているからだ。

「ふれはいはねー（釣れないわねー）」

「なぜ、干し肉を食べているのかな？　って、しかもそれ僕のじゃないか！」

「んぐ。ケチケチしないの。お礼に今日は私のサバイバル料理を食べさせてあげる」

「損しかしないじゃないか！　返しなさい！」

「なに？　あんた、私の唾液がベッタベタについた干し肉をそんなにしゃぶりたいの？　変態？　まあいいわ。ほら、あーん」

そう意地のわるい笑みを浮かべながら、クックは啜っていた茶色い干し肉を、タクミ眼前に突き出した。

先端部にはクックの歯形がくつきりとしており、クックの口まで唾液の糸がひいている。

タクミは顔を真っ赤にしながら、眼を逸らした。

「い、いけないよ、そんな汚いの！」

「か、返せと言ったり、いけないと言ったり、考えのまとまらないやつねー」

再び干し肉を口に戻したクックは顎を動かす。

自分でも少し恥ずかしかったのか、彼女の頬はほんのりと桃色が浮かび上がっていた。

（照れるならやらなければいいのに）

ため息をつく。

「知ってる？　ため息をつくとき幸せが逃げるって巷では噂になってるのよ」

「元凶がそれを言うか……。というか、それ迷信だよ」

「そうかもしれないけど、実際近くでため息つかれると、イラッとすることはあるわよね」

「だったら離ればいいのに……」

「いやよ。せつかく見つけた鍛冶師に逃げられたら困るじゃない」

そう言って、わざとか天然なのか、彼女はより一層タクミに近づいた。

ちよつと動くだけで触れそうな位置にクックが来たので、タクミの胸の鼓動が少し早くなる。

「ち、近いって……！　てゆーか、見習いの僕なんかより、街とかにいる鍛冶師の方に当たってよ。そっちの方が腕はいいんだし」

「ふっ、甘いわね。そんなのとづくに断られてるわよ」

なぜか誇らしげに胸を張るクック。

「それにね、タクミに目をつけたのには、ちゃんとした理由があるの」

「ちゃんとした理由？」

胡散臭そうに眉をひそめるタクミに、クックは傍らに置いておいた鉄鍋を指差した。

「たとえば、あれ。タクミは、一瞬であの鍋を直して見せた。もち

ろん、魔精加工は私だって何度か見たことはあるわ。でもね、私が今まで出会った街の鍛冶師たちにはそんなことは出来なかったの」

「そうなの？ でも、ジャパングの鍛冶師なら」

「確かに、鍛冶国家ジャパングの鍛冶師なら標準的な速さかもしれないわね」

「だったら、他のジャパングの鍛冶師を当たればいいじゃないか。僕なんてフツーもいいところだよ」

少し不機嫌そうに口を尖らせるタクミ。

ある事を除けば、はつきり言ってジャパング鍛冶師の中では普通だということをタクミは知っている。

いや、思い知らされたのだ。

そんなタクミのふて腐れた態度に、首をかしげながらも言葉を続ける。

「なに不機嫌になってるのよ。あんたさ……こんなところで、ジャパングの鍛冶師が何人も来ると思ってるの？」

その言葉に、そう言えばそうだ、とタクミは相槌をうった。

ジャパングは極東の地。

大陸東部ならいざ知らず、こんな大陸の北西部に来る鍛冶師はあまりいない。

「こんなところまで来るのは、余程仕事熱心な奴か、変人、あとは馬鹿だけだろうからね」

「そうそう——って仕事熱心ってなによ？」

少し気になる単語に、クックは問いかけた。

その問いかけに、タクミはきよとしたが、すぐに思い出したかのように口を開いた。

「そっか、他国の人は知らないんだっけ。修行の旅って実はしきたりなんかじゃないんだ。国からの勅命……みたいなものなんだよね」

「どういうこと？」

「一四歳になったら、『二〇になるまでこれ探して来い』っていう勅命書が送られてきてね。それに書かれている物を探す旅に出され

るんだ。ある程度旅費とかももらえるし、二〇になって帰国すると、探し物が見つからなくても給金が支払われる。だから仕事と言っても差し支えないだろ？」

「たしかにそうかも」

「たいていの見習い鍛冶師たちは国内に留まるし、国外へ出たとしても隣国のナカツク二ぐらいまで。ここまで来る鍛冶師は稀だろうね」

そういて肩をすくめる。

「だからこっちの地方ではあんまりあなたたちを見ないのね。でもクツクの目がキラリと光った。

「でも、ここまで来るって事はあんたも相当仕事熱心ってことよね。俄然あんたを私の専属鍛冶師にしたいわ！」

キラキラと紅玉のように輝く目を、目いっぱい開いてこちらを見つめてくる。

だがタクミは、首を振り、すこし乾いた笑いを見せた。

どこか辛そうで疲れたような、そんな笑いだ。

と、タクミの竿がブルブルと震えた。

その竿を、よっ、と振り上げ口を開いた。

「僕は馬鹿の部類だよ……それも大馬鹿野郎さ」

本日はじめての小魚を釣り上げたタクミのその声色は、とても寂しそうで自虐に満ちていた。

第8話：《妖刀》と、炎の料理人

陽もすっかり落ちた頃。

タクミは自分の軽率な行動に、心底後悔していた

何故、魚を三匹釣り上げただけで満足してしまったのか。

何故、「ちよっとキノコも取ってくる」と森に入ってしまったのか。

何故、もっと早く思い出さなかったのか。

タクミの脳裏をグルグルと駆け巡る。

しかし、どれだけ後悔し、どれだけ悩んだところで、現実を覆す事は誰にも出来ない。

一度目をつぶり、深呼吸をしてみる。

そして、たつぷりと時間をとって目を開ける。

そこには、

——満面の笑顔で鍋をかき混ぜるクツクの姿があった。

鍋の中では、美味しそうにしか見えない茶色いスープが、どす黒いオーラを発している（タクミ目線）。

そしてそれを楽しそうにかき混ぜる少女の姿は、まるであともう少しで秘薬が完成する魔女そのものだった（タクミ目線）。

「あ、ああ……僕は……なんて間違いを……」

その場に崩れ落ちる。

彼女を一人にしたのは間違いだったのだ。

あの時、森の中でも食料を獲ようなどとは考えず、ただゆったりと流れる時間に身を任せ、釣りに専念すべきだったのだ。

と、そんな風に後悔の念に押しつぶされそうになっているタクミにクツクが気づいた。

「あ、タクミ。遅かったじゃない」

「ただいま、クック……」

「？ 元気が無いわね。どうかした？」

「いや、別に……」

「そう？ ああ、そうだ。悪いけど、採ってきたキノコとかは明日の朝食分にまわそ。もしかしたら毒キノコが混じってるかもしれないし……いくらなんでも明るくないと選別は危険だしね」

そう言つて、楽しそうにオタマでかき混ぜる。

昨晚の料理勝負のときとは違って、ただ料理をするのが楽しくて仕方ない。

そんな風に見えた。

「ふんふんふーん♪ ふふふーん♪ ふふっ♪」

鼻歌まで歌い始めるテンションの高さだ。

だが、クックのテンションが高まるのとは反対に、タクミの明日への希望はどんどん暗くなっていく。

（あ、死ぬ）

タクミは悟った。

ちゃんとした設備や食材を使つても、昨晚は人が倒れた。

こんな川原で作れる料理が、昨晚の料理より美味しいとは到底思えなかったのだ。

そして、絶望に打ちひしがれている間に——それは完成した。

「さあっ！ ご飯の準備が出来たわ！」

「そっか……出来ちゃった、か……」

満開の桜のような笑みを浮かべる彼女の言葉に、タクミは観念したかのように、鍋の前へと腰を掛けた。

そんなタクミの様子に気づくことも無く、クックはリュックからお碗を取り出すと、スープをなみなみと注いだ。

「ほら、美味そうでしょ」

「う、うん」

気の無い返事をし、渡されたお碗の中身に目を落とす。

確かに見た目もさることながら、香りも大変美味しそうではある。

だが、だまされるわけには行かない。

これも昨夜の惨劇と同じ悲劇を巻き起こす代物に間違いないのだ。
(だけど、やっぱり美味しそう……いや、ダメだ！ これを食べたら最低でも明日の昼までは動けなくなる)

そんな葛藤をし、なかなかスープに口をつけようとしないうタクミに、

「タクミ？ 食べて……くれないの……？」

不安いっぱいといった潤んだ目で、クックが見つめてきた。

そんな視線に、タクミはなんだか自分がすごい酷いことをしているような罪悪感に駆られてしまう。

しかも先ほどから、ぐうぐうとお腹が空腹を訴えてきている。

「タクミ……」

なおも見つめ続けるクック。

罪悪感と空腹に攻められ続けたタクミは——ついに折れた。

「い、いただきます！」

意を決して、具の魚の切り身を口に運ぶ。

そしてそのままモグモグと噛み砕く。

「んっ！ マ……マズ……くない？ あ、あれ？」

かなり失礼な事をつぶやきながら、目をしばたかせる。

死ぬに近い覚悟を決めていただけに拍子抜けしてしまったのだ。

馬鹿な。ありえない。

今度は湯気を立てているスープを口に注ぎ込む。

「あ、ばか」

「熱うっ！ で、でもこれもマズくないい！」

やはり失礼な言葉を叫ぶタクミ。

だが、マズくないのだ。

決して、美味しいわけでもないが、マズくも無い。

いふなれば、普通なのだ。

「あ、あれー？ おかしいなあ」

もしかしたら昨日の村人の舌がおかしいだけだったのだろうか？

そんな事を考えたが、すぐに振り払う。

昨日店主が作ったあのゲロ魚料理を自分を含めて、皆美味しいと言ったのだ。

つまり、村人達の舌がおかしいわけではなく、純粹に腕が上がっているということである。

「普通だ！ 普通だよ、クック！」

「……あんた今、どれだけ失礼な言葉を口走っているのか分かってるの？ まあ、いいけど……」

もしかもしや食べるタクミを見て、不平を漏らしながらもクックはすこし嬉しそうな顔をした。

「でも、何で急に食べれる代物を作れるようになったの？」

おかわり、とばかりにお碗を差し出しつつ、タクミは問いかける。「……ここは文句を言うべきかしら？」

不満な顔を浮かべながらクックは言葉を続ける。

「別に私の腕が上がったわけじゃないわ。昨日はあの料理が美味いと思って出しただけ」

「？ どういうこと？」

「私はね、美味しいと感じる味の範囲がフツーの人よりちょっと広いの」

「んーと……つまり、皆がマズイと思って、クックにとっては美味しいと感じることがあるってこと？」

「正解」

「でもなんで、そんな風になったの？」

タクミの問いかけに、クックはすこしだけ困ったように眉根をよせた。

なみなみとスープを注いだお碗を返しつつ、クックは話を続ける。

「私の母は昔、高名な料理人だったの」

「え？ ああ、うん」

急に母親の話が出てきて一瞬戸惑ったが、とりあえず返事をしておく。

おそらく母親に関係があるのだろう。

「私が生まれる前の話なんだけ、それは腕がよかつたらしくてね。母の作った料理を食べれば死人も蘇るとまで言われたほどだったらしいわ」

「それは……すごいね……」

「なんでも、私と同じ年の頃に世界を漫遊して腕を磨いたそうよ。特にナカツク二国での裏料理会とかいう悪の料理人たちとの戦いでは何度も挫折を味わい、何度も立ち上がって腕を確実に上げていったと聞いてるわ」

「裏料理会……ナカツク二にはそんな集団がいるのか」

「ええ。もつとも母がつぶしちやったみたいだけどね。そうそう、裏料理会といえ、変わった戦いがあつてね」

そう言つて楽しそうに話を続けるクツク。

よつぽど母親の事が好きなのだろう。

タクミはそう思いながら、クツクの話にただただ笑い、感動した。そんなクツクの母親の武勇伝を一时间ほど聞かされると、二人の間に奇妙な沈黙が生まれた。

「……………」

「……………」

「……………ねえ、クツク」

「な、なに？」

「どこで……脱線した？」

力なくつぶやくタクミ。

そんなタクミのつぶやきに、クツクは苦笑いをしながら答えを口にする。

「えっと、裏料理会のくだりから？」

「一時間前の話からじゃないかあああああああつ！」

澄んだ星空の下、絶叫が川原に、いや森中にこだました。

食事を摂りおえた二人は、後片付けと寢床作りを開始した。

「結局のところね。母が新しい料理に挑戦するために、変な食材に手を出したことに原因があったりするのよ」

鍋を洗うクツクの言葉に、寢床作りをしていたタクミは聞き返す。

「変な食材？」

「名前は知らないんだけど、全体的に紫色だったらしいわ。それを味見してから……母の味覚が狂い始めたみたい」

「よくそんな怪しげな色の物を……。って、狂ったのはお母さん？クツクじゃなくて？」

「だからー、私はまだ生まれていなかったの。ちなみに父と結婚したのはこの頃よ」

すこし照れくさそうに話すクツク。

まあ、肉親の付き合っただのそういった話をするのは気恥ずかしい物なのだろう。

そう思いつつ、石をどけ終わったタクミは、剥き出しになった地面のうえにシートを広げた。

「最初は本当に微妙な狂いだったらしいんだけどね……その微妙な狂いを調整するうちに味付けもどんどん狂っていったのよ。私が生まれた頃には味覚は完全に狂い、しかも昔の美味しい味付けに戻す事も出来なくなっちゃってしまっただけ」

「なるほど……でも、クツクの味覚についてはどうなの？」

「味覚が狂っても子供には自分の手料理を食べさせたかったらしくね。父もそんな母親心に強く言えなかったみたいで、父と一日交代で料理を作ることになったんだって」

「ははあ、つまり物心つく前から『マズイ』と『美味しい』を交互に食べ続けた事によって、『マズイ』と『美味しい』の境界線が曖昧になっちゃったってこと？」

「そういうこと。……と、こっちは終わり、そっちはどう？」

綺麗に洗い終わった鍋を抱え、タクミの元へもどるクツク。

タクミの方もちょうど終わり、一息つくこうとするところだった。

「ん、こつちも。でもさー、味覚が変……ていうかちょっと変わってるのになんで料理人なんて目指したの？」

焚き火が消えないように薪を加えながら問いかける。

限りなく味覚音痴に近い事を知っていながら料理人を目指しているなんて、おかしな話なのだ。

「それはね……ある旅人のおかげなの」

クツクの声色が少し変わったのが分かった。

「旅人？」

「ええ、二年程前の事だったかしら。道で倒れていたらしい男性を、父がつれて帰ってきたの。何日も食べていなかったらしくてね、何か食べさせようって事になったんだけど、父もクタクタに疲れきっていたし母は出かけていたから、私が見よう見真似で食事を作ってあげたの。そしたら、その人ガツガツ食べてくれたのよ」

「へえ。そのときは失敗しなかったんだ？」

「ううん、これが大失敗だったらしくて……同じものを食べた父の話によると、相当マズかったんだって」

クツクは体を揺らしながら笑った。

「でもね……それでもその人はすごい感謝してくれてね。二、三日姿を消したかと思うと、ふらっと戻ってきて私に二本の包丁を手渡して、また旅に出たの」

「なぜ、包丁……ていうか、もしかしてその包丁ってクツクが腰にかけてるやつ？」

「そう、これ。『自分に出来る最大限のお礼』とか『初めて作ったがなかなかの出来だ』とか言ってたわね。ああ、今思えばあの旅人も鍛冶師だったのかもしれないわね」

「だろうね」

「去り際の旅人の嬉しそうな顔が目には焼きついてね。それで、もつとそういう顔が見たいと思って、私はブルターニュ王室騎士団養成所をやめて料理人になる道を選んだの」

「へえ、結構まともな理由だったんだ」

「うん。ま、母が料理人だったっていうのもあるけどね」

「なるほど……ブルターニュ王室騎士団んっ!？」

すっかり、スルーしそうになった単語にタクミは驚いた。

王室騎士団といえば、王家を守るその国最強の騎士団である。

しかもブルターニュといえば、北西の海に位置するジャパングと似た島・ブリタン島を支配する騎士国家だ。

ジャパングが鍛冶師でナカック二国が料理人なら、ブルターニュは世界最強とも誉れ高い騎士で有名である。

つまり、ブルターニュ王室騎士団とは最強中の最強の騎士の集団なのだ。

その最強の騎士団の養成所に身を置いていたとクックは、さらっと言つてのけた。

「何を驚いてるの？ 剣に天賦の才があったからこそ、たった二年であれほどの華麗な包丁捌きが出来たんだからね」

「僕その華麗な包丁捌きちよっとしか見てないんだよね……というか嘘くさすぎる……」

突拍子も無い言葉に、タクミはぶつぶつとひとりごとを言う。

そんなタクミにクックは声を掛ける。

「タクミ」

「……そもそもブルターニュ人は——お、おおっ！ なに？」

「今度はタクミの番」

「はい？」

「タクミの話が聞きたい。そうね……旅の目的について話してもらおうかしら」

そう言いながら、横になり、自前の毛布に包まった。

顔だけをひよこんとだすその姿は、まるで小動物のように可愛らしかったが、タクミはそれをおくびにも出さず、

「寝るんじゃないの？」

「子守唄代わりみたいなものよ。……ダメ？」

「うっ……」

顔の下半分を毛布で隠し、小動物のような可愛らしい無垢な瞳でじっと見つめられ、タクミの頬がかあつと赤くなった。

「どうやら、自分はこういう仕草に弱いらしい。」

「い、いいけど……ていうか、釣りの時に話したじゃないか」

「旅に出た理由はね。何を探しているかまでは聞いていないわ。今朝あんた『なにか変わったことはなかった？』って修理しながら村人に尋ねてたわね。それとやっぱり関係があるの？」

「やっぱり、今朝の視線は君か」

タクミは肩を落としてうめいた。

昼間ストーリーキング宣言されてから『もしかしたら』とは思っていたが、どうやら村でタクミを見つめていた視線の犯人はクックらしい。

「そういうことよ。あ、やっぱり言っちゃいけないことなの？」

「いや、別にそういうわけじゃない。僕たちジャパング鍛冶師はね、《妖刀》を探しているんだ」

「《妖刀》？」

聞きなれない単語に、クックは首をかしげた。

マナを宿し魔法のような力を発現できる魔剣や聖剣なら知っている。

だが《妖刀》というものは生まれてはじめて聞いたのだ。

「魔剣……とは違うの？」

「いや、魔剣だよ。ただし、ジャパング最低の鍛冶師一族が、最高の技術で打った人類に害をなす邪悪な魔剣さ」

「最低なのに最高の技術って、矛盾してるじゃない」

タクミは首を振った。

「人格……ていうか刀に対する思想が最低だったんだ。クックは、ジャパング史上最高の鍛冶師って誰か知ってる？」

「マサムネでしょ？ 私の国でもマサムネ作の刀が、たまに市場にありえない金額で出回ってるわ」

「マサムネのことを知ってるなら話は早い。じゃあ、あそこから話

そう」

そういつてタクミは、最低鍛冶師一族始まりの男の話をし始めた。

かつてジャパングに将来を期待される一人の天才鍛冶師がいた。

その鍛冶師は、ジャパング最高の名工と誉れ高い鍛冶師・マサムネの元で日々修行に励んだ。

最高の名工を師に持つ、天才鍛冶師。

ジャパング中の鍛冶師が、そのフリーズに憧れ、同時に期待を寄せた。

しかしある日、師と口論になった彼は、マサムネの元を去った。

口論の原因は、彼の打った刀だった。

——ただ切れる刀。

それだけ求め、それを実現した刀を、師は否定したのだ。

そして師の元を去った彼は、ある日魔剣と出会った。

ただ氷を出すというだけの魔剣としてはありふれたものだったが、彼はある考えに到った。

——切れるだけが駄目なら、なにか能力を付けばいいではないか。

師の言いたかった事はそんなことではなかった。

だが、このとき彼を誰も止めようとはしなかった。

彼には魔精加工を使う才能が無かったのだ。

つまりそれは魔剣を作るのに必要な技術・魔精鍛造を行うことが出来ないことを意味していた。

しかし彼は、師の元で培った知識や経験、そして自らの才能を最大限に発揮し、ついに魔性加工を一切使わず魔剣を生み出したのだ。

「それが《妖刀》？」

「そう。でも、当時はまだ《妖刀》とは呼ばれてなくてね。後に、

その恐るべき切れ味と特殊な能力から《妖刀》って忌み嫌われるようになったんだ」

「なるほど。でもジャパングに帰っていないということは、まだその《妖刀》って奴は見つけてないのね？」

言われてタクミは苦笑し、

「いや、見つけることには――」

「ストップ」

右手で制され、タクミは少し顔をしかめた。

が、森を凝視するクツクの真剣な顔に、タクミも何かを感じ取る。耳を澄ませてみると、ガサガサと音を立てているのが聞こえた。

（オオカミかな……？）

荷物に手を伸ばし、中から黒皮の手袋と立方体の鉄塊を取り出す。

「？」

不思議そうなクツクの顔がチラリと見えた。

まあ、急に鉄塊なんて取り出したら首をかしげるのも当然のことだろう。

クツクの様子に笑いを堪えながら、手袋を手につけると、タクミは立ち上がり、クツクに「そこで待って」と小声で声を掛ける。

しかし、クツクは首を軽く振ると、「私も行く」と言ってベルトを腰に巻き、立ち上がった。

ベルトに取り付けられた包丁を見て、タクミは思い出した。

（そういえば、一本は護身用って言ってたな）

正直、包丁で戦うなんて料理人としてどうかと思うのだが、口には出さない。

森に注意を払いつつ、クツクに問いかける。

（オオカミ？）

（違うわ）

パタパタと手を振って否定すると、声を張り上げた。

「いいかげん、出てきたらどうかしら？」

それと同時に、ぬっと二つの影が立ち上がった。

一つは細身の男で、もう一つは芝生のように茂ったヒゲが特徴的な男だった。

二人とも服装こそ違うが、同じバンダナを巻いている。

別に確信は無かったのだが、タクミは二人の雰囲気から盗賊だと悟った。

「なんで気づかれたんスカねえ」

「おめえが、音立てすぎなんだよ」

お互いを小突きあいながらガサガサと茂みを掻き分ける二人。

そんな二人に気取られないように後ろを見やり、呟いた。

「クツク、下がって」

「『下がって』も何も……最初っからあんたの後ろにいるわよ？」

「そ、そうだったね」

かくん、と肩を落とすと盗賊たちに向き直る。

盗賊たちは剣やナイフを持っていないようで、代りに棍棒を握り締めていた。

（これならイケる……か）

安堵しつつ、手に鉄塊を持ったまま盗賊たちに向かって歩き始めた。

「念のために確認するけど、実は『ドキッ！オトコ二人のハイキング！』の途中で道に迷った哀れな二人組——というわけじゃないよね？ もしそうだったら、ちゃんと道まで案内しますけど？」

「んー、ちよつと違うな。『ドキッ！オトコ二人のハンティング！』の最中な優秀なハンターだな。もちろん、得物はボウズとお嬢ちゃん」

そう言うのと、二人組はガラガラと下卑た笑いを浮かべ、体を揺らした。

タクミは呆れながら、さらに問いかける。

「つまり、『金目の物を置いていけ』的なアレ？」

「なんだ、わかってるじゃねえか。とゆーわけで……」

ヒゲ面がゆっくりと、棍棒をタクミに向かって突きつける。

「金目の物を」

「魔精加工」

「置いてぎよふっ!？」

ヒゲ面は珍妙な声を上げたかと思うと、首を凄い勢いで仰け反らせ、そのまま白目を剥いて倒れてしまった。

握った鉄塊を魔精加工で棒にして、その伸びる勢いを利用して顎を突いたのだ。

「な、なんだあっ!？」

細身の男が、悲鳴を上げた。

タクミは、ショートソードぐらいの長さになった鉄棒を構え、軽く地面を蹴った。

瞬く間に間合いをつめられ、細身の男はぎよっと目をまるめる。

慌てて棍棒を振るうが、タクミは鉄棒でいとも簡単に受け流すと、そのまま突進して男の体突き飛ばした。

なすすべも無く地面に転がる細身の男。

それでも男は、必死に棍棒を振り回す。

そんな適当な攻撃が当たるわけも無く、あっさりとタクミに蹴飛ばされ、棍棒はごろごろと転がっていった。

「はい、王手」

そう言つて、タクミは男の鳩尾を踏み抜いく。

一瞬、変な声を上げると、男はそのまま気絶してしまった。

「やるじゃない」

焚き火のそばから離れず、完全に傍観者になっていたクツクが、感心したように声を上げた。

「鍛冶師にしてはいい動きね。これもやっぱりジャパング鍛冶師では標準なの？」

「さすがにそれはないよ。母親代わりの人がたまたま剣術家だったからね、父さんがいないときは木刀を握らされてただけ。付け焼刃もいいところの腕だよ」

「ちよつと剣に心得のある鍛冶師つてところかしら——避けなさい

っ！」

「え？」

思わず聞き返す。

が、クックから答えが返ってくる前に、背後の茂みから答えが現れた。

ひゅっ。

上方から風を切る音が聞こえた。

タクミは振り返らず、とりあえず右に跳んでその一撃を回避する。僅かに遅れて、タクミの横を銀色の物体が通り過ぎた。

（剣——！）

向きを変えながら着地すると、タクミは鉄棒を構え直す。

先ほどまでタクミがいた場所にレザーメイルに身を固めた男が、ショートソードを突き立てていた。

「にげんじゃねえよ」

男は軽く舌打ちすると、大の字になって横たわる二人組に目を向けた。

おそらく、二人組のリーダー的な存在なのだろう。

「ったく……勝手に行動するなって言ってるのに。これ、ボウズがやったのか？」

声を掛けられ、タクミはビクリと体を震わせた。

別に、睨まれたわけでもない。

本当にただ、普通に世間話をするかのように声を抱えられただけ。それでも、タクミの目には微かな恐怖の色が見て取れた。

「と思ったが、こんなヘタレにやムリか」

男が侮蔑の目を向ける。

それも仕方の無いことだろう。

タクミが握り締めた鉄棒は、ゆらゆらと、いやカタカタと小刻みに上下している。

明かりが焚き火の炎しかないので表情が見えないが、タクミの顔は蒼白になっていた。

だがそれでも、タクミはぎゅっと鉄棒を握り締める。

「ヘタレなんかじゃ——ないっ！」

そう叫ぶやいなや、タクミは鉄棒を振り上げ突進した。

「バカッ！」

クツクの叱責が聞こえた。

それでも構わず、鉄棒を男の脳天めがけて振り下ろす。

が、竦みきつたタクミの一撃にキレは無く、たやすく男の剣には
じき返され、鉄棒はグルグルまわりながら飛んでいってしまった。

一撃を入れるどころか、逆に鳩尾に強烈な蹴りを入れられ、タク
ミは悲鳴を上げながら転倒してしまう。

すぐさま苦悶の表情で起き上がろうとする。

しかし、

「王手、だったか？」

男が冷淡に笑いながら、タクミの喉元に切っ先を突きつけた。

瞬間。

タクミの目が泳ぎ始めたかと思うと、ガタガタと体を振るわせ始
めた。

その震え方は、『震える』という生易しいものではなく、『痙攣』
と言っても過言ではないほどだ。

それは、とても異常な震え方だった。

「な、なんだ……ビビリすぎだろ」

あまりの震え方に、気持ち悪そうに顔をゆがめる。

と――

「黙りなさい」

静かな、そして怒気を孕んだ声が男の鼓膜を揺らしたと思うと、
目の前が赤くなった。

ぎい いんっ！

鈍い金属音と震動が走ったかと思うと、剣を握った右手が孤を描
いて後ろに跳ね上がる。

突然のことに男は体勢を崩し、後ろに向かって数歩たたらを踏む。

顔をあげると、包丁を持った炎のように赤い少女がこっちを睨みつけていた。

「まじかよ」

男はうめいた。

さっきまであの少女は、焚き火のそばで立っていたはずだ。

ここから焚き火までは、短く見ても一〇メートル以上は慣れている。

つまり彼女は、一瞬で一〇メートルの距離を移動し、男の剣を弾いたのだ。

クツクは、冷や汗をかく男に包丁を向けつつ、未だ震えているタクミの肩に手を添えた。

「タクミ、大丈夫？」

「……………」

つとめて優しく声を掛けるが、タクミは黙り込んでいる。

あまりのタクミの変貌振りに、クツクは眉根を寄せる。

だが、今は深く考えている暇は無い。

「すぐ終わらせるから、待ってなさい。ね？」

そうささやくと、剣を構える男に疾走する。

まずは、この状況から片付けなければならない。

「ちいっ！」

クツクの尋常じゃないスピードに、男は慌てて後ろに跳躍する。

が、距離は伸びるところか、逆にぴったりとクツクは横に張り付いてきていた。

ふぉんっ！

焚き火の炎に照らされ、包丁は赤く輝きながら男に襲い掛かる。

剣を盾にしてその刃をかるうじて受け止めるも、少女のものとは思えない鋭く重い一撃に、男の体が吹っ飛ばされた。

そして――

「っ！」

声無き声が、男ではなく、クツクの口から漏れた。

バックステップでタクミの元へと戻ると、首根っこをつかんでさらに後ろに跳躍する。

「きよっ！」

タクミが変な声を上げているが、クックは無視する。

三人から間合いを取らなければならない。

そう、三人からだ。

「ててて……腹いてえッス」

「俺なんか、頭グルグルして気持ち悪いぜ……」

タクミがノした二人が顎や腹を押さえながら、復活していたのだ。これでは、さすがにタクミのそばから離れるわけには行かない。

状況が好転したとわかった途端レザーメールの男が、にやりと口元をゆがませた。

「これで、三対二——」

座り込むタクミにチラリ視線を向けると、鼻で笑うように続ける。

「いや、三対一か」

「そう、みたいね……」

そう答えると、ため息をついた。

しかし、それはこの状況に絶望したため息ではなかった。

（あんまり卑怯臭いことしたくないのに……でもまあ、しかたないわね）

今は、タクミのことが心配なのだ。

幸い川原もあるし、大丈夫だろう。

「とりあえず、ボウズはもうちょい痛めつけるとしてだ。お嬢ちゃんはどうする？」

「もちろん、美味しくいただくッス」

「当然だな。もちろん、一番はアニキに譲るぜ」

実はクックが余裕だということに気づかず、三人組は額を突き合わせ、この後のことについて話し合っていた。

「盗賊つてのは、下品な奴らばっかねえ……」

そう呆れたようにつぶやくと、腰を沈め包丁を正眼に構えた。

ふーっと長くゆっくりと肺の空気を吐き出しつつ、意識を集中させる。

あまり人間相手に使わないので慣れていないのだ。

「じゃあ、俺が一番手ってこと……で？」

下卑た笑いを浮かべていた三人の表情が固まった。

三人の目には、赤い少女——ではなく、緋色に輝く包丁が映っていた。

その輝きは、長時間火に突っ込まれていたのかと思ってしまうほどだ。

「手加減だけはしてあげる」

そう言つと、クックはその赤銅に染まる刃を、まるで居合い抜きでもするかのように腰にすえ、軽く息を吸った。

危機感を感じた、レザーメイルの男が慌てて地面を蹴り、クックに飛びつく！

だが、間合いが遠すぎた。

クックは、息を吐き出すと同時に、だんっ！　と思いつきり一歩を踏み込み、

「炎よ！」

鋭く、凜とした声を響かせ、包丁を振るった。

そして——紅蓮の炎が男達を包んだ。

火を消そうと川に飛び込んだ盗賊たちが流されるのを見届けると、クックはしゃがみ、タクミの顔を覗き込んだ。

「もう大丈夫よ」

そう優しくささやくが、タクミは裸で雪山に放り込まれたのように震え続けていた。

（一体どうしたって言うのよ！）

盗賊におびえたにしても、タクミのおびえ方は尋常じゃない。

それに、彼は二人の盗賊をおびえることなく倒している。

「変わったとすれば、三人目……」
事実だが、それも腑に落ちない。

たしかに、最初の二人に比べれば体格もがっしりとしていたし、威圧感は多少あっただろう。

でも、それだけなのだ。

それだけでここまで、おびえるとは考えにくい。

「もう大丈夫だから、落ち着いて」

頬を撫でながらも一度優しくささやく。

と、そこでクックは気づいた。

一見、タクミの目は焦点があつて無いように見えるが、ただ一点を見つめている。

タクミの視線の先を追ってみると、そこには黒く煤けた、あのレザーメールの盗賊の剣が転がっていた。

それは、二人の盗賊に無くて、レザーメールの盗賊にはあつた物。

——だって僕、刃物は扱えないし。

昼間、タクミが言ったことを思い出す。

「まさか……ね」

あることに閃いたクックは、おもむろに立ち上がり、その剣を拾い上げ――

その切っ先をタクミに向けた。

「ひっ……!!」

小さく悲鳴を上げる。

その様子を見て、クックは言葉を漏らした。

「うそ……でしょ……?」

まさかとは、思ったがどうやら正解だったらしい。

だが、それは鍛冶師としてはありえない——そして、余りにも決定的な欠点。

搾り出すかのように、クックはその事実を口にした。

「まさか……刃物が怖いのか……?」

第9話：饅頭怖い

「落ち着いた？」

「うん……」

力なく答えると、差し出された湯気の立ち上るコップを受け取った。

確かに落ち着いてはいるが、その姿は普段とは違い、未だ弱々しいものであった。

「もう寝なさい。多少は気分が晴れると思うわ」

「でも……見張り」

「今のあんたに見張りはムリ。今晚は私が見張りをするわ。だから、今はただ眠りなさい」

それでも、もごもごと何かを言おうとするタクミだったが、ぱつと毛布を投げつけられ、しぶしぶ毛布に包まった。

「どーしても、眠くなったら叩き起こしてあげるし、明日は私の荷物も持ってもらうから気にしないでいいのよ」

「わかった」

うなづくタクミ。

なんで君の荷物まで持たなきゃいけないんだよ、という突っ込みを期待していたクツクは、

（明日の朝までに、戻るかしら……）

と胸中でつぶき、ため息をついた。

会話が途切れた。

パチパチと穏やかに燃える焚き火の音、風に揺られ木々のざわめく音、水の流れる音、そしてなんだかわからない鳥の鳴き声など、様々な音が二人を包み込んだ。

静寂というより騒がしい。

だが、これぐらいの騒がしさが眠気を誘うにはちょうどいいだろう。

クックがそんなことを思っていると、タクミが口を開いた。

「笑わないの？」

「なんで？」

「だって……僕は鍛冶師なのに刃物が怖いんだよ？」

「そんなこと言ったら、私だって料理人の癖に味覚崩壊してるわよ」
その言葉に、タクミはクスリと笑った。

が、すぐにもとの暗い表情に戻ってしまふ。

「あ……ごめん……」

「今だけは許してあげるわ。だから笑いたくなったら、笑えばいいし、ツツコミなくなったら、ツツコミなさい」

「ん……よくわからないけど、わかった」

小さく頷くタクミ。

なんだか従順な子犬みたいだった。

（こ、これはこれで、アリよね）
と、苦笑する。

「だいたい、誰にだって怖いものはあるもんよ。私だって料理人なのに、食材のクマは怖いし」

「いや、クマは誰でも——」

「甘いものだって怖いし」

「ん？ 甘いもの？」

「あとは、金貨とか怖いわね」

「『饅頭怖い』かつ」

思わずズビシッ！ とツツコミを入れてしまふ。

「……………」

「……………」

「……………ぷっ」

「……………くっくっ……………あははは」

一瞬沈黙が訪れたが、すぐに顔を合わせてどちらともなく笑い出した。

「そっ、その意気よ」

「そ、そうかな？ それにしても、『饅頭怖い』なんてよく知ってるね」

「ほら、さっき言ってた旅人が話してくれたの。ジャパング人って変わってるわよねー、『怖い』って言ったものを何でもプレゼントしてくれるんでしょ？」

「い、いや、それはちがう」

（とゆるーくマ欲しいのか）

とクツクの欲しいものに軽い戦慄を覚える。

「ホントのところ、怖いものはやっぱり先生ね」

「クツクがいた養成所の？」

「ん、信じる気になった？」

「まあ、さ、さっきのこともあるしね」

すこし、声を震わせながら答えた。

震えがとまらず動けなかったが、クツクの動きはちゃんと見ていたのだ。

だが、王室騎士団というのはさすがに信じてはいない。

「ちゃんと見てたみたいね。まあ、先生は養成所の教官であり、騎士団の隊長でもあったわ」

「隊長って……そんな暇あるの？」

「本当なら無いわ。でも、先生ったら面倒な仕事はぜーんぶ副隊長に押し付けてるし、チマチマした小さな仕事は候補生たちに押し付けてたわね」

「それって、隊長として大丈夫なの？」

「ちなみに、今タクミが言ったことと同じようなことを呟いた私の隣の席のガブリエル君は、次の日から王都から姿を消したわ」

「いや、いくらなんでもそれは」

嘘だろう？

そう言おうとしたタクミだったが、夜空を遠い目で見るクツクの横顔に、タラリと冷や汗が流れているのが見え、口をつぐんだ。

「フィクションだったら、どれだけ救われたかしらね……」

「そっか」

「そうよ」

そう言って二人はまた笑った。

そうして夜はどんどん更けていく。

タクミはいつの間にか寝てしまった。

だが、その寝顔はとても安らかで、恐怖などは一切なかった。

そんなタクミの子供のような寝顔を見て、クックがクスクス笑っていたのは、彼女だけしか知らない。

幕間 2

「あー、くそっ！」

空になった酒瓶を地面にたたきつける。

キリカと名乗る鍛冶師の青年が工房に籠って、既に七日が過ぎたその間、盗賊たちといえば、入口の広間ともいえないような空間に集められると、「絶対に騒ぎを起こすな」と脅され、盗賊家業が一切出来ない状態になっていた。

逃げればいいと思う人もいるかもしれないが、それは出来ない。

「こんな恐ろしいもんつけやがて……」

そう忌々し気に、首元で光る銀色の首輪を引っかいた。

『一定期間俺から離れると、その首輪がお前の喉を貫く』
キリカの言葉を思い出す。

こんなものがあるせいで、首領は逃げ出す事ができなかったのだ。この首輪、実際にはただの鉄の首輪である。

キリカが言った効果など無いし、魔精加工は物質に触れていないと行使できない。

つまり完全な自由の身なのだが、鍛冶師のことなど良くわかっていない首領は逃げ出そうとはしなかった。

そんなことは露知らず、首領はイラつき、とにかく物に当たり散らしていた。

「お、おちついてくださいよお……」

「うるせえっ！、俺あここの首領だぜっ？ それがなんで鍛冶師なんかに舐められなきゃいけないんだ！」

険のこもった目で手下達を睨みつける。

と、一人の男が辟易したように、口を開いた。

「なにが首領だよ。雑用は全部俺達に任せて、てめえは酒飲んでるだけじゃねえか。ここが襲われたときなんて、へっぴり腰で向かっていってパンチ一発でダウン。——もう誰もあんたを首領なんて認

めてねえよ」

「お、おいっ」

慌てて隣の男が小突いた。

だが、それでも男は口を閉じない。

「なんだよ。お前だってそう思ってるだろ？ あんな役に立たない男なんて——」

男の言葉は中断された。

顔を真っ赤にした首領が、男の顔を思いっきり蹴り付けたからだ。
「ああん？ 俺がなんだって？ そーいや、あの鍛冶師つれてきたのは、てめえだったな？ てめえのせいでこんな事になってるんだよっ——」

執拗に蹴り続ける。

そんな首領の姿を、手下達は怯えた目ではなく、汚いものを見る様な不快感のこもった目で睨んでいた。

「なんの騒ぎだい？」

不意に、静かで低い声が部屋に響いた。

首領を含め、全員が声のした通路の方に視線をむける。

すると、暗い通路から黒服の青年がニヤリと笑いながら、ゆっくりと姿を現した。

「もしかしてケンカか？ それはいけない」

そう言って、何がおかしいのか青年はケタケタと笑った。

その青年がキリカだということに全員が気づくまで、数秒かった。

髪の色がブラウンからプラチナブロンド——いや、完全な白髪になっっていたからだ。

短期間に一気に魔精鍛造を行ったための反動のような物だが、そんなことを知らない一堂は呆然とした。

そんななかり力は、

「悪い。どうやらだいたいぶストレスが溜まっていたみたいだな。じゃあ、ストレスを解消させてやろう」

そう言つて、再び通路に消えたかと思うと、数分も経たぬうちに八本の刀を抱えて姿を現し、盗賊たちに一本一本手渡した。

「これは俺がこの一週間で完成させたばかりの刀だ。無論、ただの刀ではない」

「どういふことだ……ですか？」

「抜いてみればわかる」

不敵な笑みを浮かべるキリ力の言葉に、男たちは顔を見合わせ、戸惑いながらも鞘から刀を引き抜いた。

サーベルにも似た形状のその刀身は、黒く光り、すらりとまっすぐ伸びる波紋が特徴的で、かがり火に照らされなんとも怪しく輝いていた。

「なんだ……？」

一人の男が声を漏らす。

今までの苛立ちとかさういったものはすっかり消えうせ、なんだかい気分になってきた。

それに、体も軽い。

男は試しに、刀を軽く振るつた。

「おおうつ？」

生まれた遠心力に体勢を崩し、その場で転倒してしまう。

頬を赤くしながら身を起こすと、他の者も同様に刀を振ったり、その場でジャンプしてみたりと、体の違和感を感じているようだった。

その様子をみて、キリ力は満足そうにうなずいた。

「わかったようだな。今君たちは、力を手に入れた。並みの騎士よりちょっと上ぐらいのな」

「力を……？」

「そうだ。だが——」

刹那、キリ力が腰の刀を引き抜いた。

素早く振り返り、キンツという音が響いたかと思うと、

「く、くそっ」

という、首領のか細い声が聞こえた。

続いて、黒い刀身が首領の足元に落ちるのが見えた。

いつの間にかキリカの背後にまわりこんでいたらしい。

首領の刀を切り落としたキリカは、首領の喉元に切っ先を突きつける、首だけをこちらに向けた。

「こういうバカな考えは起こさない事。俺の刀は君たちのものとは違うし、俺自身も君たちより強い。——わかった？」

ギラリと睨みつける。

刺し殺しかねないその鋭い眼光に、盗賊たちは無言でコクコクと首を振った。

「それでいい」

短くつぶやき刀を納めると、一同に向き直った。

と、首領と口論していた男が手を上げた。

「なんだ？」

「この刀やあんたの刀がすげえってのはわかったけど……俺たちにこんなもん渡して、何がしたいんだ？」

男が言つと、キリカは呆れたように肩をすくめ、さも当然のように言った。

「言っただろ？ ストレス解消させてやるって。今から近くの村を襲って暴れて来てくれないか？」

第10話：納豆と勘違い

自然の中で迎える朝とは心地の良いものである。

——ガンガンッ。

小鳥たちがさえずり、パタパタと心地のいい音を立てながら飛び立つ。

——ガンガンガンッ。

だから、先ほどから聞こえてるけたたましい音は、自分の幻聴なのだとタクミは結論づけた。

——ガンガンガンガンガンガンガンッ！

「だあああ！　うるさいよ！」

さすがに耐え切れなくなり、飛び起きる。

そしてタクミのか顔が凍りつく。

自らの失言に気づいたのだ。

「へえ……、徹夜で見張りしただけじゃなく、起こしてあげた私に、あんたそういうこと言うんだ……」

視線の先のクック（目の下に凄いくまがある）が微笑んだ。

見た目だけなら『微笑んだ』という表現がピッタリの笑顔だったが、そこに感情面を入れると、『微笑んだ』とはいえない、獰猛な笑みに見えた。

「ごめんなさい……。あ、あと、ありがとう」

「わかればいいのよ、わかれば」

ふん、と鼻を鳴らしいつもの表情に戻すと、タオルを差し出した。シートを敷いたとはいえ、多少は砂がつく。

これで拭き取れ、という意味なのだろう。

クックの心配りに感謝しながら、タオルを受け取り顔を擦る。

濡れたタオルが、ホコリっぽさだけでなく眠気を拭い去ってくれる。

「ん、ありがと。濡れタオルなんて気が利くね」

素直に感謝の言葉を述べる。

が、クツクはタクミの言葉にきよとした顔をする。

「え？ 濡れタオル？」

「うん。適度に湿ってて気持ちいいね」

ゴシゴシと頬をこする。

クツクは、じつとタオルを見つめたかと思うと、徐々に顔を赤く染めていった。

「——っ、ち、ちがう！ あんたに渡すのは、こっち！」

「わぷっ！」

手から濡れタオルを奪い取られ、代わりに乾いたタオルを顔面に叩きつけられる。

何事かと思い、顔からタオルをはがすと、クツクが顔を真っ赤にしながら明後日の方を向いていた。

「どうかした？」

「……別に、なんでもないわ」

口を尖らせる。

急に機嫌を悪くしたクツクに呆れながらも、手を伸ばしタオルの返還を要求した。

「えっと、僕としてはこっちのタオルより、そっちの濡れタオルの方がいいんだけど……なんかいい匂いしたし」

途端。

クツクはくわつと目を見開きいたかと思うと、首を一八〇度近く回し、物凄く上ずった声を上げた。

「に、にに、匂いを嗅いだの！？」

「嗅いだというか、勝手に鼻に入ってきたというか……」

「~~~~っ！」

大量の唐辛子でも頬張ったかのように顔を赤くするクツク。

その様子に、タクミはより一層いぶかしんだ。

「それがどうかしたの？」

「……………」

クックは答えない。

「臭いがどうかしたの？」

嘆息しながら、もう一度聞いてみる。

「これは……いたタオルなの」

「うん？」

今度は答えてくれたが、よく聞こえない。

そしてクックは、すうっと大きく息を吸い――

「これは、私の身体を拭いたタオルなのっ！」

頭の中が真っ白になった。

――クックの身体を拭いた。

ということとは、その髪や服とは正反対の白くて細い腕や足、程よく膨らんだ胸などを拭いたという事であり、つまり濡れタオルのほのかに漂う甘い香りは――

その事を理解したタクミの脳は一気に茹で上がり、顔は茹でた力二のように真っ赤に染まっていく。

「それは、つまり、その」

「言わないでよ！　そして忘れなさいっ！」

より一層顔を赤らめ、叫ぶクック。

このあと三〇分ほど、二人を気まずい沈黙が包んだのだった。

「んー、朝一で歩く森つてのも気持ちいいわねー」

「そう……だね……」

タクミは力なく相槌をうった。

森の道を歩き始めてまだ一時間も経っていないかったが、その顔はげっそりとやつれており、まるで屍鬼のように足取りも重い。

しかし、タクミとは対照的に、クックの足取りは軽い。

それもそのはず。

クックは手ぶらなのに対し、タクミは、黒い鉄鍋とガチャガチャ

音を立てる調理器具を背負い、右手に自分の荷物、左手にはクックの荷物を持っていた。

きちんと整備されて無い道を、この状態で歩けば、疲れるのは至極当然の結果ともいえるだろう。

しかし、タクミがげっそりとしている理由は、それだけではなかった。

「なに、もうへばったの？ そんなにきつい道のりじゃなかった？」

「道のりは別に……うっ、きつくなかったんだけど……朝、ごはんが……うぶっ」

「そんなに食べたっけ？ ふふっ、どうやらタクミの舌はすこしずつ私の料理に」

「あ………うん。そう、だね。いや……おいしかった……」

「そう……またマズかった……ってことね」

棒読みな台詞に、全てを悟ったクックは肩を落とした。

濡れタオルの一件のあと何とか立ち直った二人は、朝食の準備に取り掛かった。

このとき、まだ頭が冷め切っていなかったタクミは完全に失念していたのである。

ニコニコと結婚して間もない奥様のように笑いながら差し出されるお碗を、ぎこちない動きで受け取ると、中身を一気に流し込んだ。そして――倒れたのである。

「そう……クックは悪くないんだ……忘れていた僕が悪いんだ……」

「あれかしら？ それは私へのあてつけか何かかしら？」

横でのろのろ歩くタクミに、冷やかな目線を投げつける。

（まあ、そうなんだけどね）

と胸中で同意しつつも、それは胸にしまっておく。

それと同時に、タクミの胸から一つの疑問が飛び出してきた。

「ねえ、クック」

「なによ」

「大体の料理なら美味しく食べられるんだよね？」

「ええ。あ、もちろんゲテモノは除くわよ」

「なるほど。じゃあ、ゲテモノを除いた上で、マズくて食べられない料理って何？」

素朴な疑問に、クックは歩みを緩め、難しい顔をする。

タクミの疑問ももっともだ。

今朝食べた料理はタクミの人生で初めてと言ってもいいほどのマズさだったし、食べてはいないが先日酒場で出た料理はそれ以上と言っても過言では無いだろう。

だが、そんな料理をクックは「美味しい」となんでもない表情で言うのだ。

ではどんな料理がマズい料理なのか？

そうタクミが思うのは仕方ないことだった。

しばらく考えを巡らせていたクックは、思い出したかのように手を打った。

「あつ、一つだけあるわ。小さい頃に一度だけ食べて、窓から放り投げた記憶があるわね」

「へえ！ 限りなく味音痴にちかいクックがそこまでマズいと感じたものがあるんだ！ で、一体何？」

「納豆」

「はい？」

クックの口から出た言葉に、タクミは一瞬訳がわからなくなった。なぜなら納豆は——タクミの好物なのだから！

「あれをはじめて見た時は驚嘆したわー。完全に腐ってるじゃない？ 口に入れたら入れたで、ネバネバネチヨネチヨするし、吐く息は臭くなるし……正直あれほどマズいものはこの世に存在するのだろうかと思っただわね」

「ちよつとまで！ 確かにあれはジャパング人でも好き嫌いが分かれるものだけど……それじゃあ、納豆が『ザ・世界マズい物』ナンバーワンみたいじゃないか！ というか、あれは発酵しているだけで腐っているわけじゃない！」

「いや、でも、口に入れたら吐き気が」

「しないよ！　いつつも美味しく頂いているよ、僕は！」

「え……タクミ……あんた、私以上に味覚に障害があるんじゃないの？」

「なんだよ！　その哀れみの目は！　僕だってクツクの料理ほどマズ——アレな料理は食べた事無いよ！」

「ちよつと！　それは聞き捨てならないわね！　それじゃあ、まるで私の料理が『ザ・世界マズい物』ナンバーワンみたいじゃない！　こら、こつち向きなさい！　ちよつと！」

「そこまでは言つてな……　ちょ、落ち着いてっ！　そんなに揺すられたら——」

ガクガクと揺さぶられ、タクミの顔はみるみる青ざめていく。

危険を察知したクツクは、胸倉から手を離すと慌てて飛びのいた。

「吐くなら、向こうで吐きなさい」

「……だ、だれのせいだと……うぷっ」

顔を蒼白にするタクミ。

それを見て、さすがのクツクも「そんなにマズかったかしら」と

肩を落とした。

その様子に、慌ててタクミはフォローした。

「さすがに、吐くほどマズくはなかったよ。でも、この量の荷物を一人で運ぶのはさすがに……」

「きのう『わかった』って言っただじゃない」

「そりや言っただけど……まさか全部持たされるとは思ってもしなかったよ」

「全部じゃないわよ。大事な物はちゃんと自分で持つて——っと、ごめんなさい」

腰にかけた包丁に手をかけるも、タクミが刃物恐怖症であることを思い出し、すぐに手を離した。

こういう繊細なところはちゃんと気にかけてくれるらしい。

（荷物とか押し付けたりしなければ、すごくいい娘なんだけどなあ）

とタクミは苦笑しながら、

「包丁は大丈夫だよ。僕が怖いのは刀剣だからね」

「そ、そうなの？」

「うん。ちょっと前までは包丁もダメだったけど、さすがに生きるのに困っちゃうからね。なんとか克服した」

そう言つてタクミは、にっと笑った。

そのすこしきこちない笑いに、「だから気にしなくて良いよ」という彼の心遣いをクックは感じた。

（やっぱり専属にするなら、こういう私のメンタル面にも気を配ってくれるタクミがピッタリね。刃物恐怖症のことはあるけど……まあ、包丁が大丈夫になったんだから、なんとかなるわ）

と計算すると、小さくガッツポーズをとった。

そんなクックの思惑など知らないタクミは、昨日の夜のことを思い出した。

「包丁と言えば……クックって魔法が使えるの？」

いまだ考え事をしているクックに問いかける。

「なに？ あんた、私が荷物ほとんど持たせたからって、魔女よばわりするの？」

ギリリと殺意のこもった目を向けられ、タクミはあわてて首を振り、弁明した。

「ち、ちがうよ！ ほら、昨日あいつら追っ払うときに、炎をだしてただろ？ そ、それで魔じ——魔法使いなのかなーって思っただけ」

昨日、彼女は魔法を使ったとは思えない芸当をやったのけた。

クックのことを魔法使いだと思うのは当然ともいえるだろう。

だがタクミの問いかけに、クックはなぜか少し得意げな顔をした。「さすがに魔法なんて使えないわよ。昨日の炎の秘密は………これよっ！」

腰の包丁を、クックは指差した。

それは先日『護身用兼火起こし用』と言っていた包丁だ。

長く黒い柄を握り、ゆつくりと鞘から引き抜く。

——クツクのための包丁。

思わずそう感じた。

抜き放たれたその刃は緋色に染まり、ゆらゆらと波打つ刃文がまるで燃え盛る火炎のようにも見える。

紅蓮の包丁。

たしかに、赤ずくめの彼女にはピッタリの包丁だろう。

と、包丁が急に淡く光り始めた。

その輝きの原因を、タクミはよく知っていた。

「これは……マナ？」

思わず、つぶやいた。

この光は、マナが発する光。

しかも、光を発するということは——おそらく魔剣クラスのマナを保有している。

そして、

「炎よっ」

不意にクツクが叫んだ。

途端、ボツと音を立てて、こぶし大の大きさの小さな炎が、その刃先に灯った。

昨日と違い、随分と小さいが、まさしくそれはマナが生み出す炎である。

「ふふーん。すごいでしょ？」

自慢げに笑うクツク。

だが、タクミは呆れてため息をついた。

しかしそれは、クツクに対してではない。

この包丁の製作者に対してだ。

「なんという能力の無駄遣い……」

包丁にマナを込めて切れ味を上げる、という事は確かにある。

しかしそれは、ただ魔精加工を施すだけなので、マナの量も微弱で時間が経てばなくなってしまう。

強力で高密度のマナを完全に閉じ込めるには、魔精鍛造という恐ろしく手間のかかる手法が必要になる。

無論、魔精鍛造自体出来る者が少ないし、包丁にそんな手間を掛けることはまずない。

だがクツクの包丁は、明らかに魔精鍛造でつくられているのだ。ちなみに、包丁のはずなのに、刃は潰され、切れ味が完全に殺されていたりした。

「最初から潰されてたのよねー。ま、その包丁で食材切ることなんてないから、全然気にしてわ。逆に切れない分、人間相手にも仕えるから便利なのよね」

「こんな物騒な包丁、人間相手に使ってるの？」

少し青ざめる。

いきなり包丁から炎が出たら、大抵の人間はパニックになってあつさりやられるだろう。

「火起こし以外には、能力を使うことはあんまりないわ。ちよつと卑怯臭いんだもん。もちろん、卑怯な手を使う奴には容赦なく使うわ——消えて」

炎を消し、包丁を鞘に戻す。

「やつぱり、正々堂々って言うのが一番よね」

「騎士道ってやつ？」

「そうね。ま、養成所時代の名残りよ」

「なるほど……………つと、まぶしっ」

突如降り注いだ太陽の暖かで刺激的な光に、タクミは思わず顔をしかめた。

今まで薄暗い森の道を歩いていただけに、目がチカチカする。

隣を歩くクツクも同様で、目を細め必死に太陽の方を見ないようにしているのが横目で見えた。

「きつついわ……………でも、やつと森を抜けたわね」

「正確には、まだ抜けてないよ。出入り口だからちよつと木が少ないだけだよ」

「わかってるわよ。……………で、あとのくらい？」

「三〇分もあれば抜けるかな。そのあと、今晚泊まる予定の村までは二時間ぐらい歩くけどね」

タクミは、地図も見ずに即答する。

クックは怪訝な表情をした。

「なんでわかるのよ」

「半年ぐらい前から村に、正確には村の向こうの街に行く予定だったからね。しっかりと下調べをしておいたんだ——あ、そうだ」

立ち止まり、クックへと向き直ると、いつも以上に真剣な顔をする。

どうしても言うておかなければならぬ事があるのだ。

（これだけは彼女に言うておかなければ）

そう意気込むタクミは、クックの細い肩を無意識のうちにつかんでしまう。

「えっ……………」

真剣な顔をしたタクミに肩をつかまれ、クックの口から声が漏れた。

一日一緒に過ごしたが、こんな風に面と向かったことはない。

というより、そもそも同じ年の男に肩をつかまれるなど初めてだ。これでは、まるで告白みたいではないか。

そして、クックはあることに思い至る。

よく考えれば、自分もタクミもいい年頃の男女。

それに自分は絶世とまでは行かないまでも、そこそいい女だという自覚はある。

そんな自分と、二人っきりで一晩明かしたのだ。

ああ、自分はなんて無防備な事を！

下手したら襲われていたかもしれないじゃない。

おそらく自分が天使のような顔で眠りこけている間（寝ていません）、欲望と理性が戦争をしていたに違いない。

しかし、何とか乗り切ったものの今朝の濡れタオルの一件でタク

ミの劣情は限界値をむかえたのだろう。

おそらくこれから、

「クック。実はお金が足りないんだ。だから宿は二人一部屋でいいかな？」

「金が無いなら、仕方あるまいわね」

といった具合になるのだろう。

そして、一本の蝋燭だけが明かりの薄暗い、狭く質素な部屋で、
「いやあ、店のマスターの料理もよかったけど、今日のクックの料理は最高だったね」

「そ、そう。満足してくれたようで何より」

「もう毎日でも食べていたいよ。だけど……」

ブラウンの瞳が、クックを見つめる。

「な、なに？」

「今夜は君を食べたいかな……」

「ば、ばっ。腰に、手を回すさないで……」

そのまま、タクミに押し倒される。

「クック……」

「タクミ……」

そして二人は――

「――ク！クック！」

「はっ！」

大声で呼ばれ、クックは妄想の世界から帰還した。

「どうしたの？」

「い、いや。なんでもない」

この一瞬で思い浮かべた妄想に赤面する。

タクミはそんな事やらないだろうし、そんな状況になったら断れば済む話なのだ。

いや、でも、もしそんな事になったら断れるだろうか？

タクミは性格も悪くないし、嫌いじゃない。

なにより、結構タイプの顔だ。

（もし迫られたら………ダメ、断りきれぬ自信が無い………！）

「おーい」

「ひゃっ！ な、なによ？」

再び妄想の世界に突入していたのを、タクミが引き戻す。

呆けたかと思えば赤面したりするクックに、タクミは深い溜息をついた。

「はあ……今からとても大事な話を話すんだから、ちゃんと真剣に聞いてくれないと困るよ」

「だ、だだ、大事な話！？」

『大事な話』と言う単語に、アレなことばかりが浮かんているクックは過剰に反応した。

そんな反応に首をかしげながらも、タクミは言葉を続ける。

「そう、大事な話」

「ちよ、ちよと待って、心の準備が――」

「は？」

「はー、ふー、はー………よ、よし！ いいわ！ かかってきなさい！」

「よくわからないけど……まあ、いいか。じゃあ言うよ」

その言葉に無言で頷くクック。

クックを見据えるタクミの目には、何か決意のようなものが浮かんでいるようにも見える。

「ごくり。」

クックの喉が鳴った。

さらにトクトクと心臓の鼓動まで早まり、体中が熱くなる。

そして、たっぷりと間を置いて、タクミの口が開かれた。

「いいかい、クック。村についても絶対に料理勝負を申し込んではいけないよ。前の村と違って比較的近くに街があるんだから、下手したら牢獄行きも――」

「そっちかああああああっ！」

そう叫び、人間相手にはまず使わないと言っていた包丁の炎を放

つ
た。

第11話：笑う鍛冶師

手下達が出て行くと、アジトには首領とキリ力だけが残っていた。
「あんた一体何がしたいんだ？」

「なんのことだい？」

工房に戻ろうとしていたキリ力は歩みを止め、首領へ向き直る。
発した言葉の通り、『わからない』といった顔に、首領は拳をめぐり込ませたくなった。

「あんた、一週間前は『騒ぎを起こされたら困る』って言ってたじやねえか！ それなのに……『村を襲え』って言うのはどういうことだっ！？」

叫ぶ首領の顔は、少し青ざめていた。

盗賊稼業をやっていると、人を襲ったり、必要があれば殺したりはした。

だが、いくらなんでも村を襲ったりはしなかった。

村を襲うということの危険性を理解していたからだ。

「『騒ぎを起こされたら困る』……？ ああ、そういえばそんなこと言っただけ」

キリ力は思い出したかのようにつぶやいた。

村を襲えば、下手をすれば騎士団が討伐に来る。

それを避けるために、自分は気をつけていたはずだった。

だが、今はむしろ騎士団に来て欲しいとさえ思っている。

（そうすれば……強いやつが手に入り、もっともって大胆な研究もできる）

騎士団にいるような人間なら、多少危険な失敗作を渡しても生き残る事が出来るだろう。

それに――

（それに、手に入らないなら入らないで、強いやつを切り刻めるじゃないか）

そう考えただけで、キリカの胸は歓喜に満たされていく。
しかし直に首を振り、

（俺は何を考えている……っ！）

頭に浮かんだ思考を振り払う。

自分がやりたいのは人殺しではない。

夢をかなえたいだけなのだ。

そこで、ふと、腰に刺した《妖刀》に目を落とした。

《妖刀》と呼ばれる由縁、それは人の心を妖惑するところからきているのだろう。

だからこの刀を手に入れるために人まで殺したに違いない。

自分も《妖刀》の餌食となりつつある。

別にそれでも構わない、とキリ力は思った。
ただ、

「あの八本は失敗作だ」

それだけが心残り。

この《妖刀》を手にしたとき、不思議な高揚感と、体の軽さを感じた。

それが《妖刀》の能力だと思ったのだ。

だからこそ渡した刀には、内包したマナが気持ちを高揚させ身体能力を上げる効果を付与させた。

だが、それは違った。

《妖刀》の能力とは、妖惑し、そして――

「おい！ さつきから何ぶつぶつ言ってるんだよっ」

キリカの胸中など知らない首領が、迂闊にも声を掛けてしまった。

その声に、キリ力はピクリと反応を示すと、

「ああ、そうか。そういうことか」

そうつぶやき、首領の首を跳ね飛ばした。

首を失った首領の体から、噴水のように鮮血が飛び出し、深紅の雨となってキリカの白い髪を染めていく。

そんな降り注ぐ血の雨の中、キリ力は楽しそうに笑った。

「わかった！　これが《妖刀》の能力！　次は……次は必ず成功させるっ！」

そして盗賊どもが帰ってきたら、不良品ごと始末しよう。

そう決めると、キリカはもう一度刀を作るため、工房へと戻っていった。

残されたのは血溜まりに沈む、首領だったものだけだった。

第12話：黒い刃

村についた途端、悲鳴が聞こえた。

続いて、怒鳴り声や泣き叫ぶ声、そして物が壊れる音——とにかく色々な声や音が聞こえた。

明らかな異常事態。

「タクミは隠れてなさい」

何が起こっているかを把握したクツクは、タクミに短く命令した。タクミもクツクと同じ結論に到ったようで、顔面を蒼白にしていなずき、近くの小屋の物陰に身を隠した。

それを見届けたクツクは、緋色の包丁を抜き放つと、声がしたほうへ全力で駆け出した。

「やっぱり……」

微かに漂うその匂いを確かめるかのように鼻を鳴らす。

村特有の土や家畜の匂い。

その中に微かに鉄の——いや、血の匂いが混じっている。

おそらくこの村は襲われているのだらう。

クツクはそう思いながら、悲鳴が聞こえた角を曲がる。

「——っ！」

思わず息をのむ。

立ち並ぶ民家が、皆一様にボロボロになっていた。

風化していたというわけではない。

壁面や扉は何か鋭いもので切りつけられた痕があり、木板の窓も

叩き割られていた。

しかし、クツクが驚いたのはそれだけではなかった。

人が倒れていたのだ。

それも、一人や二人ではない。

十数人——おそらく村の半数以上の人たちが血まみれになって倒れている。

呻いているところを見ると、まだ生きてはいるようだが、なにぶん遠目なので致命傷なのか判断がつかない。

と、クックがその凄惨な光景に呆然と立ち尽くしていると、男が二人、ボロボロの木扉を蹴り開け、姿をあらわした。クックはその姿に見覚えがあつた。

訂正。

その頭に巻かれたバンダナに見覚えがあつた。

昨晚遭遇した、盗賊たちと同じ黄色いバンダナだ。

黄色いバンダナを巻いた二人組みは、クックに気づかず、

「ダメだ。やっぱこんな村じゃ大したもんなんてねえな」

「だな。家三つで、金貨二枚と銅貨十枚なんて随分しけてるぜ。――

おい、もっとちゃんとした金目のもんはねえのかっ？」

そう言つて、足元でうずくまる女性の髪を掴み、強引に持ち上げる。

傷の痛みからか、それとも男におびえているのか、女性は泣きじやくり、男の問いかけに得ることが出来なかつた。

そんな女の態度に、男が舌打ちをしたかと思うと、握っていた黒い刀身の刀を振り上げた。

「やめなさいっ！」

体を震わせる程の大声を上げると、クックは地面を蹴り、男たちに突進する。

ようやくクックに気づいた男達は、火矢の如き速さで間合いをつめてくる彼女に驚くしぐさも見せず、振り上げた黒刀をクックに向かって振り下ろした。

クックも自らの進行を妨害しようと伸びる黒い影を迎撃――いや、叩き折るべく、緋色の包丁を切り上げる。

直後、黒と赤の軌跡がぶつかり、火花を散らした。

「なに!?」

驚愕の声は、クックと男、二人から漏れ出た。

二つの刃が、お互いの一撃を受け止めていたのである。

つばぜり合いになれば、つばの無い包丁を使っている自分が不利になると判断し、クックは一旦後ろに飛びのく。

「なんなのよ……」

キツと相手を睨みつける。

切れ味では劣る得物を使っていたとはいえ、まさか盗賊ごときにつばぜり合いに持ち込まれそうになるとは思いもしなかった。

少し悔しくて、包丁を握り締める。

それは、相手も同様だったようで、額に青筋を浮かせギリギリと歯軋りをしていた。

「小娘のクセに……」

そうつぶやいたかと思うと、今度は男の方から向かってきた。

しかも、もう一人のほうも一緒にである。

すぐさま、動揺を振り払うと、クックは包丁を構え直し、地面を蹴る。

ひゅっ！

迫る刃を、今度は受け止めようとはせず、刀身の横っ面を軽く叩き軌道を変えさせる。

「ちいっ！」

もう一方の男がワントンポ送れて刃を走らせる。

クックは速度を保ちながら、身をひねってその一撃をかわすと、そのまま体をクルリと回転させ、男達の背後に回り、包丁を峰の方に持ち替えた。

殺してしまわないようにだ。

そして、まず一人を無力化すべく、後から襲い掛かってきた男の背中めがけて、思いつき包丁を叩きつける。

が、

「甘えっ！！」

背中にその緋色の峰が食い込む前に、黒い影が現れ、その行く手をふさがれてしまう。

一瞬呆気にとられるクック。

その隙に男は振り向き、ひゅんっ！と音を響かせながら突きを放つ。

慌てて包丁を盾にし、威力を殺すべくバックステップで後ろに下がる。

ぎいんっ！という金属音と同時に衝撃が走った。

それでも体勢を崩さなかったクツクは、もう一度後方に跳び、間合いを取った。

この二人、盗賊にしては攻撃は速くて重く、動きも良い。

確かに、盗賊の中には剣士のような腕を持った人間がたまにはいる。

だが、冷静になって考えてみると、この二人の動きは訓練を積んだ剣士や騎士といった風でもなく、

（なんというか、力任せって感じなのよね……）

心の中で首をひねる。

クツクが感じた通り、この二人の動きは良いのだが、ただ動きが速いくて、力が強いだけ。

訓練して手に入れた身体能力というより、ある日いきなり身体能力が上がったという感じがするのだ。

「あんたら、ホントに盗賊？」

包丁を構えながら、問いかける。

だが、男達は答えるどころか、顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけるだけ。

クツクのような女の子を仕留められないので、相当いらだっているのだろう。

（まあ、言わないなら言わないでいいわ。今はそんなことより——）
チラリと、周りに目を配らせる。

その目には、身じろぎながら横たわる人たちが映し出される。

（この人たちの手当てが優先——！）

そう意気込むと、間合いを詰めるべく全力で走り出す。

懐にもぐりこむと、一気に包丁を切り上げる。

相手もクツクの動きを読んでいたようで、タイミングを合わせ渾身の力を込めて黒刀を振り下ろした。

それは、最初の一撃と同じ光景。

もし、違ったとするならば、お互い慢心することなく、ぶつかり合ったということ。

そして、クツクが包丁の能力を使ったということだろう。

二つの刃が交差した瞬間——黒刀が折れた。

否、折れたのではない。

そして切り飛ばされたわけでもない。
いふなれば、切り溶かされたのだ。

「「な——ッ!?」」

あまりのことに、二人の男は驚愕の声を漏らし、一瞬固まった。
無論、その隙を逃すクツクではない。

すぐさま方向を変え、自分の隙をつこうと迫っていた男の黒刀も同様に切り溶かし、その間の抜けた横っ面に回し蹴りを叩き込む。

「く、くそっ!」

「逃がさないわよっ!」

仲間を置いて逃げ出そうとする男の背中にとび蹴りをかます。
バランスを崩した男はそのまま転倒し、ごろごろ転がったかと思うと、

「ぎよむっ!」

壁に頭をぶつけて昏倒してしまう。

男が沈黙するのを見届けたクツクは、ふうつと息を吐き出し、肩の力を抜いた。

「まさか、奥の手その二ひきょうなてを使うことになるとはね……」

そういいながら自分の包丁に目を落とす。

この包丁はマナを制御、イメージすれば炎を出さずに、その熱量だけを刃に宿らせることが出来る。

見た目はいつも通りのまま瞬時に鉄をも溶かす熱量を発現することが出来るので、一対一や一対二ならばほぼ無敵の能力なのだが、

卑怯すぎるという事と、制御が難しいという理由で、この能力は、二回ぐらいしか使ったことが無かった。

さすがに今回は村人達の手当てが最優先なので、この能力を使っただのだ。

「こういうことに抵抗を感じる辺り…… まだまだ私も料理人になりきれてないわね」

クックは肩をすくめた。

と、そのときだった。

クックの顔に再び緊張の色が浮かんた。

「まさか——二人だけじゃない？」

いやな予感を感じつつ、後ろを振り向く。

そして、その目に映ったのは—— ひょっこりと民家から姿を現す、黒刀を持った五人の男の姿だった。

「ああ、もうっ！ 一体なんなのよ！」

そう天に向かって叫びながら、再び包丁を抜き放ち、クックは駆け出した。

第13話：僕が殺した

結論から言うと、先に倒した二人と全く同じ方法で、クックは五人の男を倒した。

これ以上敵が現れないのを確かめると、すぐさまタクミを呼びに行き、二人で村人達の手当てに当たった。

幸いなことに、村人たちの命に別状は無かった。

出血の割りには傷は浅く、致命傷となるような怪我は無かったからだ。

そして今、二人は村人達の好意により――

なぜか、二人一部屋の宿に無料で泊めてもらっていた。

「いつまで落ち込んでるのよ」

向かいのベッドで寝転ぶタクミに、クックは呆れたように声を掛けた。

クックが戦っていた間、ずっと物陰に隠れていたことを後悔しているらしく、毛布に包まり顔を枕にうずめている。

「昨日も言っただけ、怖いものは誰にでもあるものよ。昨日の今日で刃物恐怖症が治るなんて思っただけだし、戦わなかった分あんたは村人の手当てを私以上に頑張ったじゃない」

そうフォローするも、タクミからの反応は返ってこない。

思っていた以上に重症らしい。

その時、ふとあることに気づいた。

「タクミ、一つ聞かせて。――あんた、何でここにいるの？」
ピクッ。

クックの言葉に、タクミが反応を示した。

「僕は……《妖刀》を探してるんだ……」

枕に顔を沈めたまま答えるタクミ。

「そんなこと知ってるわよ！ でもあんたの言ってることっていろ

いろおかしいじゃない！ あんた自分が『大馬鹿野郎だ』って言うてたわよね？ でもね、いくら『大馬鹿野郎』でも剣を見ただけで動けなくなるような刃物恐怖症のあんたが、『妖刀』とかいう刃物の為にこんなところまで来るわけ無いじゃない！」

クックは一気にまくし立てた。

その剣幕に、タクミも顔をあげ、身を起こす。

少し逡巡するように目をゆらゆらと彷徨わせてから、

「僕は……国の命令とは関係なく『妖刀』を探さなきゃいけないんだ」

そう静かに言った。

「どういうこと？」

「……………」

目を瞑り、再び口を閉ざすタクミ。

だが「これで話はお終い」という意思表示ではない。

おそらく、迷っているのだ。

「本当に話しているのだろうか？」や「話すべきだろう」といったことを、頭の中にいる何人もの自分が会議を開いているのだろう。

——無理に話さなくてもいい。

そう言おうとクックが口を開いた。

が、その言葉が口を飛び出す前に、タクミの脳内会議での議決が終わったようで、タクミは右手でクックを制した。

そして、ゆっくりと目を開き、決意に満ちた瞳でクックを見据えると、

「僕はね、人を殺したんだ」

そう言って、あの日の出来事を話し始めた。

旅に出てすぐ、僕は旅のサーカス団と出会ってね。
そのときに起こった事件にちよつとだけ関わった。

そしたら、団員の一人にえらく気に入られて、君みたいに「お前を私たちの仲間にしたい！ 安心しろ、お前が『うん』というまでストーリーキングしてやる！」って言うてついてきたんだ。

不満顔しないでよ、本当の事なんだから。
でね。

そいつが本当に君みたいなやつで、とにかく剣術に秀でていたんだ。

曲芸が得意だから身についたらしいんだけど、そいつ——相方と一緒に旅することになって、いろいろあった。

《妖刀》にこそ出会う事は無かったけど、悪さをする魔剣士とか魔法使いとかと戦う事もあった。

それでも僕たちの旅は順調だった。

だけど、僕は気づいてなかったんだ。

相方がいたから僕の旅は順調だったということにね。

そして、半年前。

ナカツクニの西部の街を訪れたとき、再び相方が居たサーカス団にあつたんだ。

ところがそのサーカス団に全然見物客が来てなくてね。

話を聞いてみると、花形スターだった相方が抜けてから客足が遠のいていったらしいんだよ。

だから僕たちは一旦別れる事にした。

相方曰く、「五ヶ月もあれば、代わりのスターを育てられる」との事で、とりあえず半年後に、明日行く街で落ち合う約束をしたんだ。

ただ——今思えば、僕はそのサーカスで大道具にでもなればよかったんだと思う。

相方と別れてから一週間後。

立ち寄った街で、僕は《妖刀》の手がかりを掴んだ。

その街は、夜になると辻斬りが出るって噂で持ちきりで、僕は早速《妖刀》探しを開始した。

ナカツクニの東部——比較的ジャパングが近いという事もあって、自警団のお偉いさんがジャパング鍛冶師の事情を知っていたから、夜でも街を自由に歩ける許可をもらえたんだ。

もちろん、監視を一人つけることを条件にね。

とりあえず僕は聞き込み始めた。

何件も情報が集まりそうな場所を当たり、最後に寄った孤児院で、僕は四つぐらい下の兄妹と出会った。

妹の方があんまりにも泣きじゃくっていたから、僕は「どうかしたか？」って二人に声を掛けた。

話を聞いてみると、両親の形見のペンダントを曲げてちゃったから泣いていることがわかった。

だから僕は、魔精加工で治してあげた。

するとその兄妹は眼を丸くして、「お兄ちゃん錬金術師いー？」って聞いてきたよ。

僕は自分が鍛冶師であることと、旅の目的を話した。

話してしまったんだ。

そしてその夜、自警団の人と街を見回りしてる最中、孤児院を抜け出してきた兄妹を見つけた。

問いただしてみると「ペンダントのお礼に見回り手伝ってあげる」と兄妹は言った。

危ないから帰りなさい、と言っても二人は頑として譲ってくれなかった。

仕方なく僕は「じゃあ、軽く見回したら戻る。それでいい？」と答えてしまった。

本当だったら、一直線に孤児院に連れ戻すべになのにも関わらずだよ？

たぶん、相方と旅をしていた頃と同じ感覚だったんだろうね。

魔剣や魔女を相手にして無事だったんだから、この二人も守れるだろう。

相方の活躍があつた結果なのにも関わらず、僕は自分が強いと思ひ込んでしまつていたんだ。

そして、その数分後。

僕たちは《妖刀》使いに襲われて——その兄妹は殺された。

最初に自警団員の腕が切り飛ばされた瞬間、僕は恐怖で固まつてしまつた。

だけどそいつは、転げまわる自警団員や、硬直する僕には目もくれず、腰を抜かしている兄妹に迫り、一振りで首を跳ね飛ばした。それだけじゃない。

そいつは崩れ落ちる兄妹の体を、切り刻んで遊び始めたんだ。

そこで僕は我に返つて、転がる自警団の腕から剣を薙り取ると、悲鳴とも雄たけびとも取れない声を上げて、そいつに向かつていった。

そこまできて、まだ僕は自分の強さを信じ込んでいたんだよ。

魔精加工で強化すれば、何合かは持つだろう。

そう思いながら振り下ろした剣は、一合も持たず、根元から切り飛ばされた。

その瞬間僕は自分が勘違いしていた事を知り、四つん這いになつて、そいつから逃げ出そうとした。

そいつの目に滑稽に映つたのか、すぐには殺そうとせず、そいつは薄皮一枚を剥ぐように僕を斬りつけていったんだ。

ちよつとでも気が変われば、殺されるかもしれない。

そんな考えばかりが頭の中を駆け巡り、僕は怖くてたまらなかつた。

そしてそいつが「飽きた」と言つて《妖刀》を振り上げたとき、僕や自警団員の悲鳴を聞いて十数人もの自警団員が駆けつけてきたんだ。

そいつは「水をさされた」そうつぶやいて、路地に逃げ去り、街

からも姿を消した。

民家でこっそり見ていた人や、一緒に居た自警団員の証言もあり、「そんな化け物じゃ仕方が無い」と言っつて、責める人はいなかったよ。

兄妹が居た孤児院の院長さんも何も言わなかった。

誰もが僕に「仕方ない。兄妹に運がなかった」と声を掛けた。

確かに、二人の命を奪ったのはその《妖刀》使い。だけど。

僕がちゃんと説得して、二人を守るべきだった。

——僕の勘違いが、慢心が、二人を殺したんだ。

「その日以来、僕は刃物が——刀剣が怖くて仕方なくなった。それと同時に、何が何でもその《妖刀》を見つけ出したくなったんだ……」

全てを話して、肩の力を抜き深いため息をつくタクミ。

と、今まで彼の話を黙って聞いていたクックが口を開いた。

「……一ついいかしら？」

「うん」

「確かに、あんたの慢心が起こした悲劇かもしれない。それに、私はタクミが悪くはないとは言わないわ」

「……………」

ぐっの音も出ないとはこの事だろう。

たぶん彼女は自分を責める。

タクミはそう思った。

だが、

「でもね、あんただけが悪いわけじゃない。あんたはちゃんとその兄妹に危険を教えたし、自警団の人止めるべきだった。だから……」

…」

ゆつくりとタクミの頬に手を這わせる。

「だから、責任を背負ったり罰を受けたりするなら、自分の分だけにしときなさい」

「にッ！」

ぎゅつと頬を引つ張られた。

結構な力で。

「は、はにふるんはよっ」

「あんたの罰なんてそんなもんよ」

ふふふ、といたずらっぽく笑いながら手を離れた。

ジンジンと走る痛みに、顔をしかめ頬をさするタクミ。

ただ、そのしかめっ面には先ほどまでの悲壮的な色は浮かんでおらず、すこし晴れやかな面持ちだった。

（これなら大丈夫ね）

そう感じたクツクはベットから飛び降りた。

「どうしたの？」

「いや、さすがに屋根がある場所で若い男女が一夜を過ごすのはマズイでしょ？ もう一部屋用意できないかお願いしてみるわ」

「……そっか。それもそうだね」

「なに？ あんた私と一緒にいたいなの？」

からかうようなクツクの言葉。

実際「うん」といわれたら、顔を赤くする事になるのは自分なのだが、タクミはたぶん首を縦には振らないだろうし、暗い雰囲気飛ばすためにあえてその言葉を口にしたのだ。

「うん…… 今晩は一緒に…… 寝て欲しいかな」

言葉のボディブローがクツクを襲った。

『一緒にいて欲しい』ではなく『一緒に寝て欲しい』。

タクミの言葉が頭の中で何度も反響する。

（だって——それって——！）

言葉の意味を勘違いしたクツクは、頬を染めた。

「あ、あんた、なに言つて——っ！」

「ち、ちがうよ！　そういう意味じゃない！　一緒にいて欲しいって意味だよ！」

慌てて訂正するタクミ。

だがクツクの意識は既にピンク色の方面に向かっているようで目を白黒させている。

「クツク？　おい、クツク」

ペシペシ。

「——はっ！　タ、タクミの気持ちは嬉しいけど、出会って間もないし」

「いや、だから違うって」

半眼を向ける。

タクミのしぐさに、クツクは自分の勘違いだという事に気づき、こほんと咳払いをすると、

「わ、わかってるわよ！　それに——どっちにしてもダメ。ついでにあの男達を尋問しなくちゃいけないからね」

トーンを下げて、冷静さを装った。

「なんか変だったのよね。刀なんて盗賊っぽくない武器持ってたし刀という単語に、タクミはピクンと眉を跳ねあげた。

「それに、動きも普通の盗賊って感じじゃなかったわね。でもその割には刀失った途端逃げそうとするし……とにかく変なやつらなのよ」

「僕も尋問に付き合う」

急にタクミが立ち上がった。

何の前触れもなく立ち上がったので、クツクはぼかんとした。

「たぶん——《妖刀》が関わってる」

「え？　そりゃ、違和感のある刀だったけど——いくらなんでも七本も《妖刀》があるわけ」

「わかってるよ。ほぼ確実に、その刀は《妖刀》じゃない。たぶん、《妖刀》を模した真っ赤な偽物だと思う」

「だったら《妖刀》は関わってないじゃない」
クックが異を唱える。

仮にタクミの言っている事が正しいなら、《妖刀》は今回の件とは全く関係ないということになるのだ。

だが、タクミは首を横に振った。

「よく考えてみて。刀自体持つてることが少しおかしいのに、全員が全員、《妖刀もどき》を持つてるなんて、明らかに異常事態だよ」
「言われてみれば……」

「たぶん、あの盗賊たちの背後には魔精加工が出来る鍛冶師がいる。それも《妖刀》を持った、ね……」

拳を握り締める。

おそらく、そいつはジャパング鍛冶師じゃない。

ジャパング鍛冶師なら、《妖刀》を持てばどうなるかわかっていくからだ。

「とにかく、聞いてみるしかない。もし僕の予想どおりだったら」
「ごくりとつばを飲み込むと、天井を見上げ、その言葉を口にした。

「朝一で街に行って相方を連れてこよう。あいつなら……《妖刀》相手でも大丈夫だ」

今度はあの時のようなことを起こすわけにはいかないのだ。
と――

「タクミ」

クックが静かに声を掛けた。

「ん？ なにクツ――」

タクミは言葉を続けられなかった。

クックの白い手が、タクミの頬を思いつきり引っぱいたからだ。その衝撃に、タクミはベットに倒れこんだ。

慌てて身を起こすと、クックの目には失望の色がありありと浮かんでいた。

「ごめん。あなたの罰——さっきのじゃ軽すぎたわ」

ふいつと顔を背けると、クツクはツカツカとドアへと向かっていく。

「あなたは来なくていい。なんで叩かれたか考えなさい。もし、わからないようだったら……私はあなたなんて要らない。あなたのストーカーやめるわ」

そう言つて、部屋を出て行った。

あとには、呆然と扉を見つめるタクミの影だけがランプに照らし出されていた。

第14話：クツクの決意

暗く狭い小屋の中。

そこには盗賊の一人と赤髪の少女クツクが荒い造りの椅子に腰かけ、クツクの横には白い包帯を胸元からちらつかせる青年が一人立っていた。

「これ、どうしたの？」

クツクに黒い刀身を突きつけられ、ぐるぐる巻きにされた盗賊の一人はビクリと体を震わせた。

「答えなさいっ！」

バンッ！

クツクは苛立ち、机を思いっきり叩いた。

（タクミのやつ……私の言ったこと全然わかって無いじゃない！）

その言葉が口から飛び出しそうになる。

ギリギリと歯軋りをするクツクに、見張りをしていた青年が困ったように声を掛けてきた。

「あの……そんなに怒りむき出しにすると、答えられるものも答えられないというか」

「ああん？　なんか言った!？」

「いや……なんでも無いです……」

鋭い赤眼に睨まれ、青年はしゅんとして腕に巻かれた包帯をいじり始めた。

その様子を見て、関係ない青年に当り散らしてしまったことに後悔の念が押し寄せた。

慌てて謝ろうとするが、クツクが口を開くより先に、盗賊の口が開かれた。

「貰ったんだよ……」

「貰った？　誰に？」

「仲間がつれてきた変な男だよ。……いきなりやってきて俺たち

ボコって『俺が新しいボスだ』って言って……すぐにアジトの奥に引っ込んだんだ」

「そいつって鍛冶師じゃない？」

男がぱつと顔をあげた。

どうやらタクミの言っていたとおりらしい。

「お嬢ちゃんの言うとおりだ。でもそいつホントに変な男なんだっ。一週間前に『絶対に騒ぎを起こすな』って言ったかと思えば、今日の朝には『これを持って好きなだけ暴れて来い』なんて言うんだぜ？」

「なるほどね……でもそいつそんなに強いのか？ あんたたちそこそこ強かったじゃない」

その言葉に男はかぶりを振った。

「……自分で言うのもなんだが、俺たちは盗賊団としちゃあ下の中つてところだ。さっきの強さは、お嬢ちゃんの持つてる刀のおかげさ」

「刀のおかげ？」

途端、男は喜々として語りだした。

「とにかくすげえんだっ。持った途端、気持ちがフワフワしてな！ それと同時に、なんだか体も軽くなるんだ。試しに走ってみると、すっげえ速く走れて、全然疲れねえんだぜ！ 刀の切れ味もハンパじゃねえし。ほら、嬢ちゃんが俺たちと遭遇した場所の民家の壁。木の壁だったけど、大きな刀痕があっただろ？ あれ俺がやったんだぜ！ 普段なら壁に刺さって抜けなくなるだけなのに！ それでな——」

「もう黙りなさい」
「じっ。」

頭を殴られ、男は机に突っ伏して昏倒した。

「どうやらこの刀……持った人間の気持ちを高揚させるみたいね。それこそ怪しげな薬みたいに」

「お姉ちゃんは持つてて大丈夫なの？」

青年の心配そうな声に、

「大丈夫よ。おそらく効果があるのは刀として機能している間だけだと思うわ。この男も、もうしばらくすれば効果が抜けるんじゃないかしら」

不機嫌そうに言うと、手に持った黒刀の刀身を青年に手渡す。

コートのポケットから赤い紐を取り出し、おろしていた長い髪をきゅっと後ろで結ぶと、クックは小屋を出た。

外はすでに日が落ちて、冷たい闇とばら撒かれたガラス屑のような星の光が空を覆っていた。

（本当ならタクミにやらせるべきなんだけどね）

星空を見上げながらひとりごちる。

相手は十中八九、《妖刀》だろう。

刃物恐怖症を差し引いても、今のタクミをぶつけるわけにはいかない。

それに街へ応援を呼びに行っても、手続きやら裏付け調査やらで、本格的に動いてくれるまでには二、三日はかかるだろう。

街まで行って、帰ってくることも考えれば、一日近くかかってしまふ。

そうすれば逃げられるかもしれない。

（だから、《妖刀》は私が仕留める！）

ぎゅっと拳を固める。

逃がせば、その鍛冶師は他の土地でも同じ事をやるだろう。

そんなことは、自分の中にある養成所時代に叩き込まれた騎士道や正義感がゆるさない。

それにもしそんなことになれば、またタクミは必要以上の罪悪感を感じるだろう。

そう思い、クックは盗賊団のアジトがある山へと向かって走り出し、闇の中へ消えていった。

15話： 背負わなければいけないこと（前書き）

引っ越しやらなんやらで、ごたごたしてました。
ホントすいません

15話： 背負わなければいけないこと

クックが山へと向かい始めた頃。

タクミはベッドに寝転がり、ぼうつと天井を見上げていた。

「なんで叩かれたか考えなさい、か」

未だジンジンと痛む頬をさする。

何故叩かれたのか、タクミには全くわからなかった。

——あんたのストーカーやめるわ。

その言葉を言われた瞬間、頭を鈍器で殴られたかのような襲った。

自分からストーカー宣言しておいて、何を言っているんだ。

そんな考えが浮かぶより先に、

——いやだっ！

そう叫びそうになった。

二日間だけとはいえ、彼女との旅は楽しかった。

どこか飄々としているかと思えば、墓穴を掘って顔を赤くする彼

女。

自分勝手なやつかと思えば、他人をいたわる優しい一面を持つ彼

女。

料理ベタなクセに、めげずに突き進む一途な彼女。

そんなクックとふれあい、もう少しだけ一緒に旅を試みたいと

思った。

だからこそ、彼女に危険な目にあってほしくない。

相方なら《妖刀》相手でも——

「あ……そうか」

タクミは気づいた。

彼女の言葉をちゃんと受け止めていなかった。

——だから、責任を背負ったり罰を受けたりするなら、自分の分だけにしときなさい。

クックはそう言ったのだ。

自分はその言葉を、まるで免罪符を受け取るかのように聞いた。だがそれは、決して免罪の言葉ではない。

言葉のとおり、自分の分は自分で背負わなければいけないのだ。そんなことにも気づかず、自分のやらなければならぬことを相手に背負わせようとした。

「なんだ…… ホントに大馬鹿野郎じゃないか……」

自分の馬鹿さ加減に、失笑する。

クックが怒るのも当然。

言われたそばから、話を聞いていない発言をすれば誰だって怒る。つまり彼女は、こう言いたかったのだらう。

——人の話をちゃんと聞きなさい！

「そうとわかれば……っ！」

自らの頬を、パンパンツと思いつきたたいて気合を入れる。

やることはわかった。

まずは、彼女に謝る。

死ぬほど謝る。

そしたら、

「《妖刀》退治っ！……は、まだ無理かな。でも——」
できることはまだある。

そう意気込み、両手に手袋を装着すると、早足にドアのほうへと向かっていく。

と——

トントン。

今まさにドアを開けようとした瞬間、小気味のいいリズムでノックがされた。

タイミングの良さにすこし驚きながら、ドアを開ける。

そこには、胸元から包帯をちらつかせる、自分より少し年上の青年が立っていた。

「えっと、どなたでしょうか？」

「あ、あのっ。赤いお姉さんのお連れの方ですよねっ？ あ、す、

すいません！ 自分は、クリスっていいですっ」

青年は声をうわずらせながら、用件と自己紹介を言う順番を間違えてしまう。

相当あわてているのが見て取れる。

「赤いお姉さん……ってやっぱりクツクのことですよ。彼女が何か？」

「そ、それが、その……なんと言っているか……」

青年はきよろきよろと視線を漂わせ、もごもご何かを言おうとしていた。

本当に言っているのか？ と悩んでいるようだ。

しばらく悩んだ青年は、

「そのクツクさんが……尋問をおこないまして……」

ためらいながら小屋での話と、彼女が山のほうへ走っていったことを告げた。

「あの馬鹿っ！」

そう叫ぶやいなや、タクミは鉄塊入りの袋を腰に取り付けると、勢いよく部屋を飛び出した。

ガンガンとけたたましくブーツの音を響かせながら階段を駆け下りると、宿屋の店主が驚いたような顔をしていた。

「すぐに戻りますっ！」

投げやりに言い、暗い外へと出る。

山の方角を確認し、土がむき出しになった道を全力で駆け出す。

青年の話によると、彼女が小屋を出たのは二〇分ほど前。

全力で走れば追いつけるかもしれない——彼女が歩いていれば、追いつける可能性はかなり低い。

それでも、タクミは走った。

謝罪の言葉以外にも、彼女に言ってやりたいことが二つも出来たのだ。

絶対に言ってやる。

「だから、
だから、
無事でいてくれっ！」

16話：キリカとクック

赤と黒。

二つの色が耳障りな金属音をたてて交差する。

「やるな！ 料理人っ！」

「そっちこそっ！ 鍛冶師のおにーさんっ！」

言葉を交わし、もう一度刃を交わす。

お互いの力は拮抗しているようで、交わった二つの刃は、ギリギリと小刻みに震えながら停止する。

「ふんっ！」

グツと刃を押し出すと、二人は一旦距離をとるべく後ろに跳んだ。間合いを取ったクックは、ふうっと軽く息を吐くと頬を伝う汗を拭った。

身震いしそうな夜空の下。

風は冷たいというのに、体は火照って仕方ない。

アジトへと着いたクックは、ちょうど外に出てきた白髪の男と遭遇した。

腰に二本の刀を差した白髪の男。

その男が着ている真っ黒な皮の服を見た瞬間、クックはすぐにこの男が件の鍛冶師だという結論に到った。

名乗りを上げると早々に戦闘へと移行した二人は、既に二〇分以上も斬り合いを続けていたのだった。

「なかなかの腕ね。鍛冶師にしておくのはもったいないわ」

「その言葉そっくり返してやる」

そういつてキリカは楽しそうに笑う。

思わぬ実験台と出会えた。

そのうれしさに、体を震わせる。

一方クックは、キリカの持つ黒い刀に目を向ける。

あの盗賊たちの持っていた刀と似ているが、雰囲気や強度が別格

だった。

おそらく、あれが《妖刀》だろう。

「ところで——その黒い刀を見るに、あの盗賊たちに変な刀渡したのはおにーさん、ってことであってるかしら？」

「変な刀……まあ、そうだな。あいつらがここに来ないで、お嬢さんがここにいるということは……」

「もちろん。私が叩き潰してやったわ」

「なるほど……腕も獲物も、いいものを持っているみたいだ。本当にいい実験台になるよ、お嬢さんは」

満足そうにつぶやくと、キリ力は黒刀を中段に構えた。

その立ち姿は、本当に鍛冶師かと疑ってしまうほどに、きれいな型だった。

「これは——私も、本当に本気でいったほうがいいよね」

クツクの中でスイッチが入った。

同時に、纏う雰囲気もガラリと変える。

途端に、その場から『女の子』というものが消え去った。

「へえ……別人みたいだ。カッコイイな」

その言葉に、ピクリと眉を吊り上げる。

——なんていうか、格好良かった？

タクミも似たようなことを言われた。

別に、意識してやっているわけではない。

本気を出そうとすると、いつもこうなってしまうだけなのだ。

悪い癖なのかもしれない。

クツクはそう苦笑しながら、

「お褒めに預かり光栄だ。では、その刀——格好良く切り捨ててやるわ」

「できるんだったらなっ！」

そう言いあうと、地を蹴り、二人は間合いを詰める。

そして、僅かに早く自分の間合いに達したキリ力が《妖刀》を振り上げ、クツクの肩口めがけて振り下ろした。

すかさずクックも、その刀身を断つべく、緋色の半円を描き薙ぎ払う。

二つの刃が激突し、甲高い金属音と盛大な火花を撒き散らす。

（くっ——硬いっ！）

がっちりと受け止められ、クックは内心舌打ちをした。

最初から包丁の能力を開放しているにもかかわらず、この刀は斬り溶かすことが出来ない。

だが、ところどころ刃に溶けた跡があるのを見るに、効いていないわけではないようだった。

「ならばっ！」

叫び、力強く踏み込むと刀を弾く。

（だったら、出力を上げればいいだけの話！）

振りかぶり、包丁の熱量を一気に上昇させる。

「ちいっ！」

ゆらゆらと陽炎を纏いはじめた包丁を見て舌打ちするキリカ。

体勢を立て直し、刀を全力で切り上げる。

再び激突する、二つの刃。

だが赤と黒の二つの色が交差した瞬間、聞こえてきたのは甲高い刃音ではなかった。

聞こえてきたのは、ジュアッ！ という鉄を溶解させる音と、ランと金属が地面に落ちる音。

そして——

「卑怯——も——の……っ！」

クックの小さな呻き声だった。

苦悶の表情を浮かべる彼女の右腕には、黒い刀身が深々と突き刺さり、そこから赤黒い血が刀身をつたい、足元に血溜まりを作っていた。

出来上がった血溜まりの中には、クックが溶かし斬った黒い刃が

沈んでいる。

そう、確かに斬り溶かした。

その証拠に、キリカの右手に収まっているのは、途中から刃を失った刀がある。

だが、突き出された左手には、キリカが腰に掛けていたはずの刀が納まっており、それがクツクの腕を貫いたのだ。

「卑怯？」

キリカはあざ笑うように、クツクの言葉に反応した。

「俺は最初からこの《妖刀》を腰につけていた。それはつまり、《妖刀》を武器として使うということだ。だから卑怯じゃあない。――そうだろ？」

そう言って、勢いよく刀を引き抜く。

激痛が走り、ぼたぼたと血がとめどなくあふれ出す。

よろよろと後ずさり、搾り出すように

「《妖刀》……？ そっちが本物……」

「お嬢さんが折った、いや溶かしたのを《妖刀》だと言った覚えはないぞ」

「たしかに……ね……」

乾いた笑いを浮かべたクツクは、数歩後ろに下がったかと思うと、がくんと膝を突いてしまった。

集中力が切れたのか、口調も普段の女性的なものに戻っている。

「どっちにしても、一本折れたらもう一本を使うのは当たり前。私も抜けてるわね……」

肩を上下させながらつぶやく。

蒼白になった顔には脂汗がたらたらと流しており、呼吸も乱れ、腕の激痛だけでなく頭痛までしてくる。

精密な制御の為にかった負荷が、一時的に頭を襲っているのだ。キリカは弱々しいクツクを見下ろしているだけだった。

「――どういふつもり？」

クツクは問いかける

止めを刺されるものだと思っていただけに、少々驚いたのだ。

「よくよく思えば、『妖刀』自体の性能をお嬢さんのような強い人間で試した事がなくてね。だからお嬢さんの体力が回復するのを待ってるんだ」

折れた剣を放り投げながら、キリカは笑顔で告げた。

「人の効き腕を貰いておいて、よく言うわ……」

つくり笑いをするも、内心では戦慄に駆られていた。

キリカの笑いは、普通の笑いだった。

だがそれは、こんな血が流れるような状況でなければという条件がつく。

まるで仲のいい友人と酒の席で冗談を言い合っているかのような笑いは、この殺伐とした雰囲気の中では狂氣的で不気味な笑いにしか取れない。

それに、キリカの様子が変わっていた。

立ち振る舞いが別人のようだった。

緊張に包まれた斬り合いの時以上に、今のキリカには隙が無い。

狼狽するクツクに笑顔を向け、

「でも、足は狙って無いから動けるだろ？ 三分だけ待ってあげるから止血して、息をととのえな。そしたら、戦闘再開だ」

すこし楽しそうに告げ、数メートルほど距離を取ると、その場にしゃがみこんだ。

微笑みながら、ぬらぬらと血で光る『妖刀』を綺麗に拭き始める。その余裕シャクシャクといった感じのキリカの姿に、舌打ちをしながらクツクはコートの袖を包丁で切り取った。

傷の上にクルクルと器用に巻きつけると、思いっきり引っ張り止血を試みる。

途端に、突き抜けるような激痛が走った。

「う……く……っ！」

口から勝手に声が漏れる。

だがちゃんと圧迫しなければ血は止まってくれない。

齒を食いしばり激痛に耐える。

しかし、三分で止まるはずも無く、包帯代わりの袖も元から赤いのでどれだけ血が流れているかは、月明かりだけではわからない。

そして

「さて、三分だ。はじめようか」

立ち上がると、《妖刀》を右手に左手にと持ち替え、楽しそうにキリ力は言った。

クツクは無言で頷き、左手に包丁を持ち、半身で構える。

両手で構えたいところだが、痛みを訴える右腕ははつきり言つて邪魔になるだけ。

それなら左手だけで戦つた方がまだ勝ち目があると踏んだのだ。

「そうだつ。一つハンをあげよう」

「ハンデ？」

「ああ。お嬢さんが五合——いや、三合もつたら見逃してあげる、つていうのはどうだい？」

「それはいいわね。ちなみに、三合以内にあんたを倒した場合と、ダメだった場合はどうなるのかしら？」

「もちろん、俺を倒せたならお嬢さんが勝者。俺を好きにしていよいよ。ダメだった場合は——死ぬだけ」

あつけらかと答える。

その顔は「なに当たり前のこと聞いているんだ？」とでも言いたげだった。

一瞬、ビクリとしたクツクだったが、首を振り思案する。

（左手しか使えない現状、まともにぶつかって勝つのは難しい……。

つまり——）

破格の条件。

たった三合もたせるだけで、この場から退けるのだ。

しかし、同時に胸の中から否定の言葉が湧き出てくる。

こいつはここで倒さなければいけない相手なのだ。

倒しておかなければ逃げられる。

なにより、敵に背中を見せる行為自体に強い抵抗感があった。

こんなときになっても、騎士団のクセが出てきてしまう。

一〇秒ほど悩むと、クツクは覚悟を決めた。

「その条件……のまないわ」

《妖刀》がどれほどの物かは知らない。

能力も知らない。

それでも逃げたくは無い。

ここで逃げたら、必ずそれは心の傷となる。

だからこそ――

「正々堂々、あんたに勝つ」

そう言っただけは駆け出した。

17話：理由

キリカが提案した三合など、すでに遙か昔に終わっていた。
だが、構わずクツクは止まらず包丁を振り回す。

刃が交わるたびに、体は流され、一步後退する。

刃が交わるたびに、左手はしびれ、手に力が入らなくなる。

刃が交わるたびに、赤い火花を散らし、緋色の刃が欠けていく。
徐々に窮地に追いやられるクツク。

それでも、クツクは包丁を振り続ける。

「いい……実にいいよ、料理人っ！」

戦い続ける彼女の姿勢に、キリカは破顔一笑した。
本当に、いい敵だ。

（このお嬢さんさえいれば、新作のいい相手になるかもしれない）
キリカはそう思った。

そんなムキリカとは反対に、クツクは焦りを隠せない。

（なんなのよっ！？ 動きが……動きが違いすぎるっ！）

キリカの動きは、先ほどとは別次元の動きをしていた。

先ほどまでの動きは、ちよつと運動神経のいい騎士見習いといった感じだった。

だが、今のキリカは、それこそどこかの大きな街の騎士団にいても不思議ではない動きをしている。

防御する事に専念していなければ確実にやられていた事だろう。

「戦いの最中に考え事かっ！」

僅かに生まれたクツクの胸元の隙に、黒い斬撃が襲い掛かる。

その一撃を身をひねってかわす。

すると僅かにキリカに隙が生まれた。

攻撃のチャンスを見つけたクツクは、包丁を横になぎ、腕を狙う。
だが、キリカは尋常じゃない反射神経と速度で、振り下ろされた

《妖刀》を斜めに切り上げ、包丁を弾き返す。

攻撃も鋭ければ、防御も鋭い。

並みの剣士であれば、今のクツクの一撃で腕を折られるか切られるかで、終わっていただろう。

「なんなのよっ！」

底知れないキリカの腕に、苛立つクツク。

一旦距離をとろうと飛びのくも、それを読んでいたのかキリカも同時に前に向かって跳躍する。

一瞬間に浮いた二人は、剣をぶつけ合う。

すると、位置的にも体格的にも腕力的にも劣るクツクは、そのまま地面に叩きつけられた。

無意識のうちにごろごろ転がると、ヒュッという風を切る音と、ザクツという地面に刃が突き刺さる音が耳に入り込んだ。

そのまま転がりながら起き上がり、クツクをなぎ払うべく迫る刃を、渾身の力を込めて受け止めた。

完全に攻撃の主導権を握られてしまった。

それも、まともな戦闘訓練を積んだ騎士や剣士などではなく、鍛冶師相手に。

クツクはその事実にはショックを受けていた。

（このままじゃ、確実に負ける！）

そう思いグツと《妖刀》を押し返すと、しゃがんだままキリカの足元めがけて足払いを掛ける。

しかしクツクのブーツが届く前にはキリカは大きく後ろに跳び、足は宙を切った。

間合いを取ったキリカは、《妖刀》を肩に置くと、

「やっぱり、いい腕だ。どうだ？ 俺の仕事を手伝わないか？」
そう笑顔で言った。

立ち上がったクツクは、キリカめがけ突進すると、大声で叫ぶ。

「お断りよっ！」

切り上げた刃が弾かれた。

「お嬢さんは料理人なんだろう？ 俺を手伝えば、お嬢さんの専属鍛

冶師になつてやるぞ！」

「残念！ 専属はもう決めてあるのっ！」
刃が欠けた。

「そいつは、俺より腕があるのか？」

「そんなの——」

黒い刃が頬を掠めた。

「そんなの、わかんないわよ！」

思いつきり踏み込む。

「会ったのは最近だし——ッ！ 魔精加工も数えるほどしか見たこと無い——ッ！」

刃物恐怖症は伏せた。

「軽いツンデレ入ってるし——ッ！ 人が気にしてる料理のことも言ってくる——ッ！」

鋭い一撃に、後ろにごろごろ転がった。

「……くッ！ ちょっと可愛い娘ぶれば、簡単にだまされるし——ッ！ 急にヘタれたり、人の話を聞いてなかったりする——ッ！」

飛び起き、迫る刃を弾く。

「そんな奴のどこがいい？」

軽く後ろに飛ぶと、キリ力は呆れたように問いかけた。

その問いかけに、肩で息をするクツクは力強く答える。

「なんだかんだ言つて、タクミはちよつと優しくて、地味に可愛くて、そして何より——からかいがいのある面白い奴なのよ！」

グツと腰を沈め、足に力を込める。

「だからっ！ 私は、タクミを私の専属にしたいのッ！ 一緒に旅をしたいっ！」

溜め込んだ力を解放して、思いつきり地面を蹴り、放たれた矢のごとくキリカとの間合いを詰める。

そして、刃を交えた瞬間。

クツクは大地にひれ伏した。

「今まで手を抜いてたわね……」

力なく身を起こしながら、クツクは恨めしい目でキリ力を睨んだ。先ほどの一撃は今までのそれを遙かに上回る速度と威力だった。

渾身の力で振り下ろした刃は、最大の威力を発揮する位置に到達する前に、切り上げられた《妖刀》にいとも簡単に弾き返され、泳いだ上体に拳を叩き込まれたのだ。

「当たり前だ。パートナーになれるかも知れん奴を殺してしまつては意味が無いだろ」

既に興味が失せたのか、作り物のような無感情な目で見下ろし、切っ先を喉元に突きつけた。

「《妖刀》なんて狙わず、最初から殺すつもりで臨んだら違つて結末を迎えたかもな」

「知らないの？ 騎士や役人以外が勝手に殺人を犯すと捕まっちゃうのよ」

敗者独特の笑いを浮かべながら、クツクは言った。

「ああ、そういえばそうだったな。忘れていたよ」

「あんたも捕まるのよ」

「俺は捕まらない。殺して殺して——最後には死ぬ。それだけだ」
静かに、そして抑揚の無い声でつぶやいく。

クツクは眉をひそめた。

「あんた……私に何か手伝わせたかつたんじゃないの？」

ふと胸に浮かんだ疑問を投げかけると、キリ力は目を丸くした。忘れていた物を思い出したかのような顔を見ると、

「俺は……《妖刀》を超える魔剣を作りたいかつた……。そうだ、だから俺は《妖刀》を……」

ゆらゆらと目が泳ぎ始める。

「人が作つた最高の魔剣、《妖刀》。俺は、それを超えたかつた！ それなのにっ！ 俺は人をつ！」

ぼたぼたと双眸から涙があふれ出る。

たった一週間の間に起こつた、いや起こした出来事。

その全てがキリカの心を切りつけていく。

《妖刀》を超えるためには、まず解析しなければいけない。
だから、奪って殺した。

《妖刀》の試作品が出来た。

だから、試しに村を襲わせた。

研究に協力的じゃない奴がいた。

だから、邪魔と判断して殺した。

殺す必要も、襲わせる必要も無かった。

そんなつもりも無かったはず。

「俺は――」

「《妖刀》に魅せられていたんだよ」

キリカとはちがう、ちよつと高めの男の子の声が聞こえた。

刹那、

「ガッ!？」

キリカの体がたたきつけられるように横に吹っ飛んだ。

太い柱のような物が、横から彼の体を物凄い勢いで突いたのだ。

「クック! 斬れっ!」

さらに声が聞こえたかと思うと、袋のような物がクックに向かって飛んでくるのが見えた。

その物体から聞こえる微かな音に、中身がなんなのかを思いつくと、包丁を掴み言われたとおりに真っ二つに薙ぐ。

溶鉱炉のような熱を纏わせてだ。

ジュアアアアアアッ!

中から溢れた水が包丁の熱によって、真っ白な蒸気が発生し、視界を真っ白にする。

熱気に顔をしかめながら慌てて立ち上がると、ワンテンポ遅れて現れた真っ黒な少年が手を握った。

「ほら、走って!」

「ま、まってよ!」

手を握ぎられたまま、クックとその少年は走り出した。

蒸気のせいで視界は良くないが、前を走る少年の正体はわかって
いた。

自分の白い手を握る、黒皮の手袋。
うつすらと見える、黒い背中。

前に進むたびに、ワッシャワッシャと上下する黒髪。

そして、蒸気を突き抜け、その姿がはつきりと目に映った。

「タクミ……！」

思わず声がうわずる。

それに、じわじわと視界が悪くなってくる。

すぐに自分が泣いていることに気づいた。

グシグシと目を擦る。

なんとなく気づかれたくなかったのだ。

と、

「ごめん、クック……」

振り向かず、タクミは言った。

「僕は……君の話をちゃんと聞いてなかった。ホントにごめん
もう一度彼は謝った。

心なしか、背中もうなだれてるように見える。

「気づいたならいいのよ。だからそんなに——」

落ち込まないで。

そう言おうと思ったが、

「よかった。じゃあ、これで僕の件は終わりだね。僕の件は」

「え？」

山道を走りながら、クルリと首だけをこちらに向けたタクミの顔
は笑っていた。

だが、クックにはわかった。

笑ってなどいない。怒っているのだと。

「僕はちゃんと、『妖刀』は危ないってことを話したはずだよ」

「そ、そうだったわね。うん。話して——」

「じゃあ、君も僕に言う事があるよね？ ね？」

有無を言わせぬ迫力のある笑み。

これこそが『クツクに言ってやりたい事』の一つだった。

——自分だって人の話をきいていなかったじゃないか。

タクミはそう言っているのだ。

その笑みと、タクミの言い分が正しい事もあって、クツクは素直に頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「よろしい」

満足そうにうなずいたタクミは、前を向くと道を外れて森の中へと引つ張った。

ちよつとだけ頼もしい。

そう思いながらも、クツクはなんだかタクミに怒られたままではイヤだった。

だから、ちよつとだけ反撃する事にした。

「ひ、一つだけいいかしら？」

「いいよ」

きよろきよろと周囲を見回しながら答える。

「どうせだったら——」

一瞬迷った。

今から言おうとしている事は、口にすれば自分もただではすまない。

でも、それでもなんとなく言ってやりたかった。

だから、たつぷりと間をおいて、クツクはその言葉を口にした。

「どうせだったら、お姫様抱っこで助けて欲しかったわ」

その言葉に、二人は赤面した。

18話：頑張ってみるよ

「なんで、自分も恥ずかしい事をいうかな」

太めの木の陰に隠れると、呆れながらタクミはささやいた。

「いいじゃない。女の子の憧れみたいなものよ」

「ふっー女の子は、こんな山奥に戦いに来て、こんな怪我しないけどね」

再び顔を赤くしたクツクを半眼を向ける。

クツクはとにかくボロボロだった。

右腕はちぎったコートの袖を包帯代わりにして止血を施してるし、それもどうやら止まっていけない。

裾も靴もとにかく砂と泥にまみれて、鮮やかなはずの深紅のコートはみすばらしくなってしまうている。

よく見ると、頬や手のひらにも小さな傷がいくつもついていた。

タクミの視線に気づいたクツクは、苦笑しながら右腕を上げ、

「この程度なんとも無い……とはいえないわね」

「見せて。……なんてめちゃくちなな巻き方を……養成所で習わなかったの？」

手袋を脱ぐと、手際よく処置をし始める。

だが、その手は微かに震えているのが見て取れた。

「やっぱり、刃物恐怖症は治ってないみたいね」

「あ、当たり前だろ。一時間やそこらで治るなら、苦労しないよ」

「そうね……でもね、タクミ」

左手を、そつと震える手に重ねた。

驚いてタクミは顔を上げると、クツクがじつとこちらを見つめてきていた。

その顔はとても優しく、暖かい微笑みを浮かべていた。

「あんたは、ちょっとだけ前に進んだ。ちょっとだけ強くなったのよ」

「そういうこと」

クックは顔をあげた。

「じゃあ、この包丁をぶつけければ」

「その包丁じゃ無理」

ぴしゃりと言い放つタクミ。

「な、なんでよっ！」

「そんなボロボロの包丁じゃ強度が足りないし——クック！」
「きゃっ」

木の枝を踏む音を耳にし、クックを抱き寄せた。

おそらくキリ力が来たのだろう。

戦慄すると同時に、安堵した。

村には行かず、こちらをターゲットにしてくれたらしい。

タクミは、胸元で顔を真っ赤にしているクックにささやいた。

「どっちにしても、ここは逃げるしかない」

「そんなの……だめよ」

「どうして？ まさか、負けたままじゃ悔しい、なんて言うつもりじゃないよね？」

クックは小さく首を振った。

「たしかに、それもあるわ……でもね。やっぱり今はあんたにとって転機なのよ」

「転機……」

「どうせここで逃げれば、あんたは自分を責める。だったら戦えばいいの。負ければ死んでお終い。勝てばあんたは強くなれる。シンブルでいいじゃない」

そういうクックのその額には、腕の傷がうずくのか、無数の脂汗が光っていた。

それでも彼女は、ニツコリと笑った。

「それに勝ち目が無いわけじゃないわ。ほら、見てクックの指差すほうを追った。」

十数メートルほど先にキリ力が動いているのが見えた。

キリカは、左手に携えた《妖刀》をぶんぶんと振り回し、

「どこだっ！ しつかり殺してやるから出て来い！」

絶対に出て行きたくなるようなことを叫んでいた。

「ね？」

「いや、ね？ と言われても……」

「気づかないの？ あいつの右腕動いてないのよ？」

「——！」

言われてタクミは、はっとした。

もう一度、キリカのほうに目を移すと、たしかに右腕がぶらぶらと振り子のように力なく垂れ下がっている。

「たぶん、あんたの一撃で腕が折れたか、肩が外れたか……とにかく右腕が使えなくなっただのよ。これなら………まだ勝ち目はある」ぎゅっと包丁を握り締め、タクミを見据えた。

燃え滾る赤い炎のように輝く双眸には、彼女の闘志がありありと浮かんでいた。

「あんたがなんと言おうと私は戦う。だから逃げたいならあんた一人で逃げなさい。でも——」

そこでクツクは笑った。

再びニンマリと意地の悪い笑いだ。

タクミはすごくいやな予感がした。

そして、その予感は見事に的中することになった。

「でも、私一人じゃ勝てないかもねー。ああ、このままじゃ私殺されちゃうわ！ 誰か一緒に戦ってくれる人——おもに鍛冶師さんはいないかしら？」

タクミの目から一切視線を外さず、芝居がかった口調で言ったその言葉は、タクミの良心をチクチクと攻撃してきた。

タクミがこういうのを断るのが苦手という事を知っているから出た言葉だ。

つまり

——一緒に頑張ろうねっ！ タクミっ！

ということなのだろう。

（ホントいい性格してるよ……）

呆れてため息が漏れる。

だが、同時に彼女には感謝していた。

たぶん彼女がこういう性格でなければ、自分は逃げただろう。

そして、また自分を責める。

やり方はともあれ、彼女は僕を前へと押してくれる。

ここで踏み出さなければ、いつ踏み出すというのか。

前に進まない限り、いつまで経っても自分の罪は重いままだ。

だから――

「わかった。頑張ってみるよ」

胸の中のクツクが、今度こそ屈託のない笑顔を見せた。

その笑顔にすこしだけ見惚れながら、タクミは勝てるかもしれない方法を探した。

19話：力押し

「いくわよ」

「うん」

二人は飛び出した。

そしてキリカに背を向けるように走る。

「待てっ！」

枝を踏む音に気づいたキリカが、すぐに二人の背中を追いかける。キリカが追いかけてくるのを感じたタクミは横を走るクックに、

「いいかい？ チャンスは一回だ。それ以上は――」

「わかつてるわ。必ず一回でしとめるっ！」

力強く答えると、クックはぎゅっと包丁を握り締めた。

刃こぼれしてボロボロになったその刀身が、すこしずつ熱を帯び始め、ゆっくりと紅い輝きを増していく。

それを見届けると、タクミもすぐさま懷から拳太の鉄塊を取り出し魔精加工を開始する。

逃げながら、しかもこんな緊張感のある状態での魔精加工は初めてだったが、驚異的な集中力でショートソードほどの長さの鉄パイプを作り出す。

さすがに量が少ないので、中身がスカスカの見せ掛けだけの物だが無いよりマシだ。

だが、

「刃物……しかも《妖刀》と戦うのかー」

そう考えた瞬間、心臓がバクバクと鼓動を加速させる。

一緒に戦うと決めたが、やはり怖いものは怖い。

そんなタクミの恐怖心を感じたのか、

「落ち着きなさい。あんたの仕事は私が仕事をした後。しかも、あんたの仕事があるかどうかも怪しいんだから、どーんと構えてればいいの」

そう言つて、親指を立てた。

不思議と少しだけ恐怖がなくなった気がした。

そして二人、いや三人は森を飛び出し――再びアジト入口へとキリ力をおびき出した。

「観念したかい？」

肩で息をするキリ力は静かに言った。

「まさか。広いほうが戦いやすいじゃない」

すこし挑発的な笑みを見せながら、クツクは答えると包丁を構えた。

タクミもそれに習つて鉄パイプを構える。

が、

「なるほど。そいつがお嬢さんの言つてた鍛冶師か。た、たしかにお嬢さんの言うとおりヘタレだ」

クククツと殺しきれない笑いが、キリ力の口から漏れ出す。

キリ力の言うとおり、タクミはガクガクと足やら手やらを小刻みに震わせ、恐怖を隠しきれていなかった。

「う、うるさい！ 確かにクツクの言つた通り今の僕はヘタレだけど……余計なお世話だっ！」

「そーよ。余計なお世話よ」

タクミと一緒に非難するクツク。

目の前の敵であるキリ力と、包丁のmana制御に集中する。

大切なのはタイミング。

ほかの事に気を取られて、一度しかないチャンス逃すわけにはいかない。

manaの制御に意識を向ける。

毎度の事ながらこの精密なコントロール、というかイメージは疲れる作業だった。

しかも今日は何度も能力を使っているので頭が痛くて仕方がない。そんなクツクに気づいたキリ力は、

「なんだ？ 顔が青いぞ。体調が悪いのかい？」

そうせせら笑うと、ゆっくりと体を沈めた。

いい加減カタをつけようということだ。

（まずいな）

（まずいわね）

顔には出さず、二人は内心焦った。

まだこちらの準備が完了していない。

今踏み込まれたら、勝てる可能性はゼロ。

絶対に負けてしまうだろう。

慌ててタクミは、

「あ、あんた、その服どうしたんだ？」

そんなことを口にした。

そのあまりに唐突な言葉に、クックとキリカはいぶかしんだ。

だが、すぐさまクックは彼が時間稼ぎをしようとしていることに

気づいた。

あまりにも、雑な手段だった……。

タクミは言葉を続ける。

「黒の皮服は僕みたいだなジャパング鍛冶師の仕事服だ。あんたは見たところジャパング人じゃない。それなのに、黒服を着ているなんておかしいじゃないか」

「いや……ただ、黒い服が好きただけだが……というか、仕事服に気にしているのはジャパング鍛冶師だけだと思うぞ？」

困ったようにつぶやいたキリカの言葉に、「そ、そうですか」とタクミの時間稼ぎは失敗に終わった。

「タクミ……」

横からクックの声がした。

その声には、時間稼ぎに見事に失敗したタクミに失望する色はなく、むしろ希望の色が混じっていた。

チラリと視線を向けると、クックはパチッとウィンクする。

——準備完了。

その合図だ。

合図に気づいているのかいないのか、キリカは呆れたようにため息を吐くと、

「もう行くぞ」

そう言つて、こちらに向かつて疾走した。

その視線の先に捉えているのはタクミ。

まずは、一番簡単に倒せて、能力を発揮されては面倒なタクミを倒してしまおうというつもりようだ。

驚嘆すべきスピードで接近するキリカ。

あと五メートルほどでタクミに届く。

その瞬間だった。

黒服の少年だけを映していたはずのブラウンの瞳に、紅い、真紅の人影が映りこんだかと思うと、

「炎よっ！」

凜とした声と同時に、暗い闇を照らす紅蓮の光が、視界いっぱいに広がった。

クックが《妖刀》を侮っていたように、キリカもクックの包丁を侮っていた。

熱を操れるとは思っていたが、まさか炎まで出すとは思っていなかったのだ。

「な、に——ッ!?」

慌ててその場に踏ん張るも、勢いを殺しきれず、半身を炎の壁へと突っ込ませてしまう。

幸か不幸か、焼かれたのは折れた右腕だが、それでも自分の肌が焼かれる痛みと苦悶の表情を浮かべた。

それでも体勢を立て直す。

が、さらに予想外の展開がキリカを襲った。

炎の壁が盛り上がったかと思うと、その中から、炎を纏った人影が飛び出してきた。

否、炎を纏っていたのではない。

真紅の髪と真紅の瞳、そして真紅のコートを纏ったクックがまるで火の玉のように現れたのだ。

驚愕の顔を浮かべるキリ力を見て、クックは最初の策が成功したと確信した。

炎の壁を作り出し、キリ力の突進を防ぐだけでなく、相手を混乱させる。

さらに、前方だけに壁を作ること、前方からの攻撃の可能性を無くし左右に注意を向けさせることで、正面の隙を生み出させるというのがクックとタクミの最初の策だった。

マナの制御で自分自身へのダメージを軽減させるとはいえ、この策はクックにとっても危険だ、とタクミは言った。

だが、これぐらいの事をしなければ勝つのは無理だとクックはタクミの反対を押し切り、その結果、この策は見事に成功した。

「そして、これで決めるっ！」

懐にもぐりこんだクックは叫ぶと、包丁を思いつき握り締めた。この一撃は精密なマナの制御など必要ない。ちよつと出力を制御するだけでいい。

奇策もいらない。

ただ包丁の能力を引き出して、今自分に出せる渾身の力でぶつかるだけ。

ただの力押し。

それが二つ目の策だった。

そして包丁が、ウウウウンツと低い音をたてながら紅く輝き始めた。

そして、

「はああああっ！」

燃え盛る火炎よりも輝きを放つ包丁を全力で切り上げた。

「やられたよ。まさか、こんな手段で来るとは思ってた」

そう言うキリカの手には相変わらず《妖刀》が収まっており、紅く輝き続ける包丁とがっちりと刃を交えていた。

つまり、力比べはキリカに軍配が上がったのだ。

「くっ……タクミっ！」

もし、二つ目の策で《妖刀》を溶かせないようなら、二人で出した「クックがそのまま《妖刀》を押さえ、タクミがキリカを叩く」という最後の策が実行される手筈だった。

だが、タクミが来る気配が一向に無い。

「そいつなら、後ろで立ちすくんでるぞ」

キリカの言葉に、チラリと視線を後ろに向けた。

たしかに、タクミは鉄パイプを力タカタと小刻みに揺らしながら、ただ呆然と立っているだけだった。

そんなタクミの様子に、クックは落胆するわけでもなく、「ああ、やっぱりね」と納得した。

実際、タクミが向かってこれる確率なんて一割も無いと推測していた。

《妖刀》がいるとわかっていながらここまで助けに来てくれただけでも上出来だったのだ。

だからこそ、二つ目の策で勝負を決めようと思っていた。

「仕方ないわね……」

タクミには話していなかった奥の手がある。

クックは力いっぱい包丁を押し上げると、ただ力を出すという事だけに集中する。

マナの制御なんて考えない。

包丁に存在する全てのマナを放出するイメージを思い浮かべると、途端に刃の輝きが増した。

「お、お前……っ!？」

先ほどまで余裕いっぱいだったキリカの声色に、焦りが見え始めた。

輝きが増すということは、同時に熱量も増していくという事。

そのことに気づくと、キリカは力を込めて包丁を弾き返した。
ピシッ……

辺りで鳴き続ける虫たちよりも小さな音が、聞こえた。

「ごめんね」

小さくつぶやくと、クツクはもう一度包丁を振るった。

20話：剣舞

最後の最後で動けない自分に嫌気がさした。

行かなくちゃ！

そう思う。

そう思うのだが、足は根を張ったように地面から離れてはくれない。

さっきクツクを助けた時は、確かに動いてくれた。

だが、今はさっきとは違い、《妖刀》に立ち向かわなければならぬのだ。

あの日、自分のメツキのプライドを剥がし、痛みと絶望感を刻み付けた《妖刀》にだ。

考えただけで、足は動いてはくれない。

否、前には動いてくれない。

——わかった。頑張ってみるよ。

自分は彼女とそう約束したはずなのにっ！

「くそっ……動いてくれよっ……」

震える手足を睨みつける。

クツクが待っているのだ。

苦々しい表情で、クツクに視線を向ける。

クツクの包丁が弾かれるのが見えた。

その瞬間、宝石のように綺麗な紅い眼と視線が合った。

「——ッ！」

タクミは、息をのんだ。

彼女の眼は失望に染まっているだろうと、思っていた。

だが、違ったのだ。

彼女の眼は相変わらず澄んでいて、動けないタクミを非難しているわけではなかった。

——わかってる。あんたは気に病む必要は無い。

声にこそ出しては無いなかったが、クツクの眼はそう言っているように見えた。

そして彼女は口を堅く結ぶと、右足で踏ん張り、無理やり体勢を直して、光の軌跡を描いて包丁を振り下ろした。

包丁の輝き方は今までの比ではなく、それこそ手の中に収まる松明と言っても過言ではない。

おそらく、包丁の能力を制御もせずに全開にしたのだろう。

それなら《妖刀》に勝てるかもしれない。

だが、

「だめだ……そんなことしたら……」

これから起こるであろう当然の結末を予想し、タクミは呆然とつぶやいた。

たぶん彼女もその結末をわかつていたはず。

それでもその結末を選んだのは——自分のせいに他ならなかった。

次の瞬間、タクミは知らず知らずのうちに一步を踏み出していた。

熱い。

体が火照る。

その包丁から放たれる熱に耐えながら、ぐいぐいと全身の筋力と、体重をかけて、《妖刀》を押しまくる。

「くそっ！」

退けば斬られると感じたのか、キリカは舌打ちをすると、クツクと同様に力を込めて、このつばぜり合いを制そうとする。

ピシッ……

またその小さな音が聞こえた。

キリカがやりと口をゆがめるのが見えた。

クツクもキリカもその音の正体がわかっていた。

包丁から、小さな星屑にも似た光が零れ落ちた。

それも一つや二つではなく、ポロポロと光る雪のように地面に落ちていく。

自らの熱量に耐え切れなくなった刀身が、壊れ始めているのだ。

「ごめんね」

泣き出しそうな声でつぶやいた。

旅に出るきつかけにもなった緋色の包丁。

ピンチになればこの包丁でいつも切り抜けてきた。

彼女にとってこの包丁は、この数年間にもおよぶ旅の唯一のパートナーだったのだ。

そのパートナーが今、その役目を終えようとしている。

無論、こうなる事はわかっていた。

だからこのことはタクミには話していない。

変なところで優しい彼なら、止めると思っていたからだ。

「いまさら謝っても遅いっ！」

なにか勘違いしているらしい目の前のキリ力は、さらに力を込めて《妖刀》でぐいぐいと押してくる。

それと同時に、少し大きめの光がボロツと零れだした。

だがクツクは、包丁の能力を抑えようとはせず、負けずと力を込めて押し戻そうとする。

ここまできたらあとは崩れていくだけ。

ならば、せめて有終の美とかいうやつを飾ってやるのが持ち主としての責任なのだ、とクツクは決意した。

力を込めるたびに輝きは増し、熱量も上昇していく。

熱は柄まで伝わり、クツクの白い手を焼き付けていった。

それでも力を込め続ける。

どれだけ光の雫を落とし続けても、力を込め続けた。

そして――ポタリと黒い雫が地面に垂れ落ちた。

その雫は、紛れもなく《妖刀》から生まれた物。

それは、《妖刀》が包丁の熱量に耐え切れなくなってきたところ

とを示していた。

「これで勝負はわからないわね！」

見え始めた勝利への光に、クツクは声を張り上げた。

勢い良く《妖刀》を弾き返すと、体を震わせながら叫びとも雄叫びとも取れない声を上げた。

「くうううううあああああああつ！！！」

力も、気合も、叫びも。

とにかく自分の中にあるもの全てをぶつけるように、包丁を振るう。

「ぐうううううううううつ！！！」

無論キリカも迫る斬撃をことごとく弾いていく。

角度を変え、タイミングを変え、立ち位置を変え――

二人は激しいダンスを踊るようにクルクルとまわりながら刃を振るい続けた。

刃を振るうたびに生まれる残像が、透明な空気というキャンバスに赤と黒の線を描く。

作品とも言っても過言ではない二人の剣舞は、ちょうど二〇合目に到達した瞬間に崩壊した。

「ぐつ……！」

包丁を弾いた瞬間、キリカが僅かに後ろに体勢を崩したのだ。

瞬きするよりも短い僅かな時間。

その一瞬の隙を、クツクは見逃さなかった。

「もらったわ！」

だんっ！　と一步踏み込み、《妖刀》めがけて力の限り包丁を振り下ろす。

その時、時間が引き延ばされるような感覚を覚えた。

輝く包丁がゆっくりと《妖刀》へと向かっていくのが見える。

キリカの顔が徐々に焦りの色に染っていくのが見える。

とにかく何もかもがスローモーションだった。

いや、一つだけ違うものがあつた。

「ダメだ、離せッ！」

それはキリカのものとは違う、少し高めの少年の声だった。

そしてその声がクツクの耳に届き、包丁が《妖刀》と刃を交える
その瞬間。

目を焼くような光を発し、包丁が爆音を立てて爆ぜた。

21話：魔精加工

「く……くくく……」

爆音と熱風、そして突如発せられた閃光にめまいを覚えた。

だがその中で、キリ力は声を殺して笑った。

勝ったとわかった瞬間、こみ上げる笑いを堪えきれなくなったのだ。

最後の一撃には肝を冷やした。

下手をしたらこの手に収まっている《妖刀》は確実に斬り溶かされてしまっただろう。

刀身が耐え切れずに爆発する、などという事が起こらなければの話だが。

未だぼんやりと視界が晴れぬ中、紅いものがゆらゆらと揺れているのが微かに映った。

クツクの髪だ。

徐々に紅い輪郭が浮かび上がってくる。

「ちいつ！ しぶとい女……だ……？」

《妖刀》を構えなおしたクツクだったが、目の前の紅い影が、ぐらりと後ろに倒れるのを目にして、すぐに呆けた声を出した。

どうやら最後の氣力を振り絞っていただけらしい。

だが、キリ力は氣を抜こうとはしなかった。

一晩の間にこの少女とは二度も戦っている。

これで終わりになるとは限らないのだ。

戦うこと自体に異論は無い。

しかし《妖刀》ばかり狙ってくるクツクとの退屈な戦いはもうこめんだ、とキリ力は思った。

だから再戦を挑まれないように殺してしまおう。

そう短絡的に結論を出すと、ゆっくりと《妖刀》を振り上げ、
「これでお終いだな」

すこし鬱陶しそうに言葉を発し、風を切りながら《妖刀》を振り下ろした。

漆黒の刀身はぼやけた世界に吸い込まれ、一瞬遅れて手に衝撃が伝わる。

ぎいんっ！ という金属音と同時にだ。

キリカは目を見張った。

いつの間にか、黒い影が目の前に浮かび上がっている。

すぐに目の前の影が、タクミだとわかった。

そして世界が輪郭を取り戻す。

やはり影の正体はタクミだった。

カタカタと歯を鳴らし、今にもなきそうな顔をしている。

そしてもう一つ、ある事実をそのブラウンの瞳がしっかりと捕らえると、キリカは驚愕した。

「うそ……だろ……？」

わなわなと肩を震わせ、その事実を否定するように首を振る。

それは到底ありえないことだった。

その恐るべき切れ味から『《妖刀》』とまで言われ恐れられる魔剣。

その《妖刀》の一撃が、クツクの体を切断する前に——細い鉄パイプによって防がれていたのだ。

鉄パイプを握る手がガタガタと震えた。

力を込めているからと言うのもあるが、やはり一番の理由は恐怖だった。

ここまで来ても、恐怖は拭い去れない。

自分は今《妖刀》と戦っている。

そう考えると、逃げ出したい衝動に駆られそうになる。

それでもタクミは、逃げ出そうとはしなかった。

自分が今逃げ出せば、確実にクツクは殺される。

それだけは、嫌だった。

「ま、魔精加工ッ——！」

瞬間。

鉄パイプの先がウネウネとヘビのようにうねり始め、《妖刀》の刃に鉄のツタとなり絡みついた。

これで《妖刀》は前にも後ろにも動かすことが出来ない。

しかしキリ力は動じず、冷ややかな視線をこちらに向けてきた。

「バカか。お嬢さんの包丁ならともかく、魔精加工を施した程度の鉄なんて……敵じゃねえ！」

鼻で笑い、ツタごとタクミを両断しようと力を込める。

が、すぐに表情は一変した。

「なんでだ！？　なんでそんなもので……！？」

驚愕するキリ力。

《妖刀》はツタごと少し上下するだけで、切れる気配が一向になかった。

しかも異常はそれだけではなかった。

キリ力の体が、急に重くなり、《妖刀》を握る手にも上手く力が入らないのだ。

目を白黒させるキリ力に、タクミは引きつった笑みを見せた。

「あ、あんた魔剣を持つのは、初めてだろ？」

「どういうことだ……！」

「一定量のマナをぶつけられると、マナが反発して一時的に普通の刀剣と同じになっちゃうんだよ。と、とうぜん《妖刀》の恩恵も受けられないっ！　そして——」

鉄パイプから右手を離すと、そっと《妖刀》の刀身を握った。

クツクの包丁を受け続けたその刀身は、手袋越しにも焼きゴテを押し付けられたかのような熱さを伝えてくる。

それでもタクミは引きつった笑みを見せ続け、

「そしてただの刀剣なら、魔精加工が通るっ！」

叫び、マナを流し込んだ。

途端に黒い刀身が波打ち始める。

このまま一気にただの鉄球にしてしまおうと、黒いヘビのようになつた刀身にマナを送り続ける。

しかし、《妖刀》に対する恐怖心のせいか、それとも徐々に能力を取り戻しつつあるのか、《妖刀》は波打っただけでそれ以上の変化を見せてくれない。

「させるかつ！」

タクミの意図を察知したキリカも、柄越しに刀身に向けて魔精加工を施した。

同時に《妖刀》のうねりも、穏やかになり、ゆつくりと美しい曲線を取り戻し始める。

回復する《妖刀》のマナと、キリカから送られるマナ。

そのマナの総量は、今のコンディションで自分が出せるマナの量を超えていた。

もう、勝ち目はなくなったのだ。

「残念だったなあ！ お前達二人は、どっちも決定打にかけていたようだ！ アハハハハハハハハ！」

血走つた目を向け、甲高い声でキリカは笑つた。

その笑いに、キリカが完全に《妖刀》に精神を犯された事を痛感し、あの日の凄惨な出来事が脳裏に浮かび上がった。

自分は死ぬ。

クックも死ぬ。

それも、普通じゃない殺され方だ。

そう考えた瞬間、タクミの手から力が抜けた。

そのときだった。

「あきらめて——るんじゃっ——ない——わよ」

途切れ途切れの、鈴を転がすような可愛らしい声が耳に届き、右手が包み込まれた。

「へえ……目え覚ましたんだ？」

キリ力は下方にいる声の主を見つめた。

つられて、タクミを目線を下げると、自分の手をしっかりと握る白い手と、こちらを見上げる赤い髪の少女……クックが目映った。いつも燃えるように美しかったその髪は、砂にまみれ輝きを失い、先のほうが焦げてしまっていた。

クックは、キリ力の言葉などさらりと無視して、ただひたすらにタクミの目だけを見つめていた。

「こんな大それたこと出来たんだから、最後までやりなさいよ」

その言葉に、タクミはぎょつとして、クックの手の中に納まる自分の右手を凝視した。

彼女の言うとおり、自分は《妖刀》を握っている。
刃物恐怖症の自分だ。

《妖刀》はからめとったし相手は右腕が使えないのだから、顔面を殴るなり腹を蹴るなり、無力化する方法はいくつでもある。
最初に決めた手筈でも、タクミは『《妖刀》ではなくキリ力本人を狙う』そうになっていた。

それでも無意識に『《妖刀》へと立ち向かう』という行為、魔精加工を選んだ。

（あ……そうか……）

わかった。

僕は無意識で、魔精加工を選んだんじゃない。

自分の意思で、魔精加工を選んだんだ。

いつも背中を押してくれるクックに感謝していた。

大切な包丁が壊れるとわかっていても、《妖刀》に立ち向かったクックが羨ましかった。

彼女に言った『頑張ってみるよ』という約束ともいえるか定かではない言葉を守りたくなったのだ。

「——だからこそっ！」

ぐいっと顔をあげ、目の前のキリ力をしっかりと見据える。

だからそ——僕は——

「コイツに立ち向かったんだ！」

体を震わせるほどの大声で叫び、《妖刀》を強く握り締める。形を取り戻しつつあった黒い刀身が、のたうちまわるヘビのように動き始めた。

「なんだとっ!？」

顔色を変えるキリ力。

必死にマナを流し込み元の形状を取り戻そうするも、うねりは止まらない。

「なにが『だからこそ』なのかわからないけど……その意気よっ!」
彼女の手がぎゅっと力強く、自分の右手を握るのが伝わった。

鍛冶師ではないクツクが力を込めたところで、流し込めるマナの量はタクミ一人分。

それでも、なぜだか不思議と彼女の手からマナが流れ込むような感覚を覚えた。

同時に、うねりが激しくなる。

「や、やめろっ……やめろやめろやめろやめろ!」

うねり続ける刀身を愕然と眺めながら、キリ力はただひたすらに首をふり、「やめろ」という言葉を繰り返し続ける。

それでも変形は加速し続け、とぐろを巻き、次第に球状へと変化していった。

より一層の力とマナを込めて、叫んだ。

「うわあああああああああつ!」

「やめろおおおおおおおつ!」

タクミとキリ力。

二人の叫びが静かな山にこだました。

そして——

「僕の……僕たちの……勝ちだ……」

ゴトン、と音を立てて、黒い鉄球が地面に落ちた。

キリ力は刃を失った鞘だけを握り、タクミの左手には鉄のツタだ

けが取り残されていた。

「これで、おわりだ」

静かに、そして力強く言うと、タクミは右手を振り上げキリカの顎めがけて拳を放った。

拳が顎へと吸い込まれる瞬間。

キリ力は笑っていた。

今までの狂氣的な笑顔ではなく、安堵するような笑みだ。

——ありがとう。助かった。

そんな風に口が動き、キリ力は仰け反り、大地に倒れこんだ。
タクミはそれを見届けると、

「別にあんたを助けたわけじゃない。僕は……クックと、僕自身を助けたんだ」

そう呟き、立ち上がろうとするクックに手を差し伸べる。

その日、やっとタクミは前へと進む事が出来たのだった。

第22話（前書き）

すいません。

また、かなりの期間を開けてしまいました。

第22話

「あんだといい、キリカといい…鍛冶師って強いわよねー。ジャパングって実は結構な軍事力があるんじゃないの？」

白いシーツの掛かったベットに腰掛るクックは、不思議そうに問いかけた。

純白なシーツとは正反対の彼女の髪は、こげた部分をそいだせいか気持ち短くなってしまったようだった。

「二日も眠って、さらには三日ぶりに顔を合わせた第一声がそれ？」

「だって気になってたんだもん」

ぷうっと頬を膨らませるクックに、タクミは小さくため息をついた。

あの後、ボロボロになった二人と昏倒しているキリカを、自警団の人たちが村へとつれて帰ってくれた。

ちょうど村に戻った自警団の人たちがクリスに事情を聞いたらしい。

村へ戻ると、キリカは牢屋代わりの小屋へ、クックは診療所へと運び込まれた。

キリカは一日、クックに至っては二日もの間眠り続け、タクミはその間ちよつとした用事を済ませるために村を離れていた。

タクミがいない間に、キリカは軽い尋問を受けた後街へと連行され、クックは暇そうにベッドの上で天井のシミを数える作業に興じていたという具合だった。

そして実に三日ぶりに診療所を訪れたタクミに掛けられた言葉はそんな、微妙な言葉だったのだ。

もつと何か別の言葉を掛けられると思っていただけに、肩透かしを食らったような気分になる。

「あのね……。前にも言ったけど、僕はちよつと剣術をかじってるだけ。それに、キリカに関しては、たぶん剣術に関してはシロート

もいいところだよ」

「はあ？ 何言ってるのよ。シロートが私と同等に戦えるわけ無いじゃない。あれは大きな街の騎士団にいても不思議じゃない強さだったわ」

「そりゃあそうだよ。それが《妖刀》の最大の特徴なんだから」

そう答えると、タクミはそばにあった椅子に腰掛けた。

「例えばさ。クックが剣で木を両断したからと言って、そこらへんの剣も握った事の無い人に同じことができると思う？」

「余程剣の才能が無い限り無理ね」

クックは間髪いれずに即答した。

剣で斬るということは、意外に難しく、それなりに技術がいる。

どれだけ切れる剣でも、使う人間が素人なら二束三文で売ってる中古の剣と変わらない切れ味になってしまうのだ。

「そう。だからムラマサはそこに目をつけたんだ」

「というと？」

「ムラマサの作品は、マサムネの元を去る頃には他の追随を許さないほどの切れ味をほこっていた。それでも切れ味を追求し続けたムラマサは、人間自体の腕を上げる事を思いついたんだ。どんな素人でも、刀を握っただけで達人になり、達人が握ればそれこそ神がかった領域まで押し上げる。ムラマサはそれを思いつき、完成させたんだ」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよっ！」

右手を上げて、クックは慌てて口を制した。

タクミの言った事が余りにも非現実的なことだったからだ。

「『腕を上げる』う？ そんなことできるわけ……」

「どうかな？ 君は先日、キリカ以外にも異様な身体能力を持つ盗賊たちとも戦ったじゃないか」

「う……そ、それは……そうだけど……」

「まあ、あれは『腕を上げる』じゃなくて『身体能力を上げる』っていう、ちよつと能力が違う物だったみたいだけどね」

ぎしりと背もたれに身を預けると、タクミは少し難しい顔をした。「実際のところね。先日君が戦った刀――仮に《妖刀もどき》とすると、《妖刀もどき》みたいな刀は結構ジャパングに出回ってるんだ。でも、《妖刀》のような『腕を上げる』能力を持った刀は《妖刀》以外には一切無い。つまり、製法が一切わかって無いんだ。数年前に途絶えたムラマサの家系以外にはね」

「製法って……《妖刀》だって魔剣なんだから、作り方なんて一緒にでしょ？」

身を乗り出すクック。

彼女の言うとおり、《妖刀》は魔剣だ。

だが、

「クック。魔剣っていうのはね、魔精加工が出来て、さらには魔精鍛造っていう技術を持って作られるんだ。これは絶対と言ってもいい」

「知ってる。あんたに教えてもらった」

「そうだね。ちなみに森の中でムラマサの話をした時に僕は言ったよね。『ムラマサは魔精加工の才能が無かった』って」

タクミの言うとおりだ。

そう納得すると同時に、すぐに疑問が湧き上がる。

それならなぜ、タクミは《妖刀》の事を「魔剣だよ」といったのか。

そんな事が顔に出ていたのか、タクミが疑問に答えた。

「《妖刀》の事を魔剣だと認識し始めたのは、二代目の作品からなんだ。二代目には魔精加工の才能があったらしいからね。それ以降はずっと魔精加工の使える人間ばかりだったし、初代の作品自体も数本しかない事から、『《妖刀》イコール魔剣の一種』という図式が出来上がった。まあ、キリカの《妖刀》はムラマサの中でも、『強度を上げる』っていうことに魔剣の特性を置いた作品だったから、魔剣と言っていていいかちょっと怪しいけどね」

「なるほど……なんにしても、魔剣としての特性はあくまでもオマ

ケってわけね」

「その通り。だからこそ、初代の頃から受け継がれる『腕を上げる』という能力が謎に包まれてるんだ。一説によると、『妖刀』を持つ人間は例外なく殺人衝動を覚えることから、『有名な人斬りの魂を詰め込んだんじゃないか』って言われてる」

「魂を？」

「定かではないけどね。確かに歴史に名の残る人斬りなら、腕もそれなりにあるだろうし、『人や物を斬る』っていう抵抗感も取り払えるから、腕が上がるってことかもしれないよ。だからキリ力も強かったし、人を斬る事を楽しんでたんだと思う」

「キリ力、ね」

クツクが少し、考え込むようなしぐさを見せた。

尋問を行った自警団員の話だと、彼は元々小さな村で鍛冶師をしており、真面目でそれなりに才能のある人物だったらしい。

ところがある日、旅人が彼に東洋の魔剣《妖刀》について話してしまった。

魔精鍛造もでき、いずれは後世に名の残る魔剣を作りたいかった彼は、『妖刀』探しの旅に出て——そして《妖刀》を見つけ、二人に敗れた。

『ありがとう。助かった』

倒れる直前に言った。

それに、戦いの最中に泣いていたし、人を殺した事を悔やんでいた。

たぶん彼も、心のどこかで必死に戦っていたのかもしれない。

既に街へと連行された今となっては、確かめようも無いことだが。

「どっちにしても……なんともぶっ飛んだ話ね……」

「僕もそう思う」

そう言って二人は頷きあった。

その時。

——コンコン。

診療室の扉が叩かれ、返事をする前にヒョコツと金髪の青年が顔を出した。

「あ、まだお取り込み中でしたか？」

「ううん。ちょうど終わったところよ。……クルス、だっけ？」

「ちがうよクック。グリスだよ」

「……クリスです……」

肩を落とすクリスだったが、すぐさま立ち直り部屋の中へと入ってきた。

クックの前に立ち止まると、手に持っていた包みをクックへと差し出す。

「お姉さんに言われてたもの探してみたけど……むりでした。代わりに、うちの村で用意できる一番上等なものを持ってきました」

「あー、やっぱり……まあいいわ。ありがとね、クリス」

少し残念そうな顔を見せながらも、クックは包みを受け取り、感謝の言葉を口にした。

さっそく包みを広げ始めるクック。

白い布に包まれたそれが気になり、タクミは何も言わずにじっと眺めていた。

一分も経たない間に、その中身があらわとなる。

包みの中身は二つだった。

一つは、ところどころ傷の目立つ真紅のコートだった。

キリカとの戦闘で攻撃を受けたり、止血の為に破つたりとボロボロになってしまったため街までの応急処置として軽く直してもらっていたのだ。

そして、もう一つは包丁だった。

黒光りする刃。

白木の柄。

紛れも無い包丁だ。

「へえ……意外にいい包丁じゃない。ふっーだけど」

「さすがに『魔剣みたいな包丁』なんて注文無理ですよ。でも、ジヤパングから輸入したものですから、かなり上等なものだと村長も言っていましたよ」

「護身用の包丁が欲しかったんだけど……でもいいわ。ありがたく頂戴しておくわ」

まんざらでもないといった風に言うと、クツクはニコニコしながら包丁を眺めていた。

なんだかんだ言って、普通の包丁でも良いものを貰うと嬉しいらしい。

その証拠に、自慢したいのか、タクミの眼前に包丁を突きつける。「見てタクミっ！ 結構いいもの貰っちゃった〜！」

「わかった！ わかったから、目の前で振り回すのはやめてっ！ 刃物恐怖症がぶりかえすっ！」

テンションが上がったクツクと、青ざめたタクミの声が診療所に響き渡る。

このとき、クリスだけはタクミが何かを後ろに隠したのを苦笑いしながら目撃していた。

エピソード

昼下がり。

街へと続く街道を、赤と黒の人影が逃げるように走っていた。クックとタクミである。

「なんで君は僕の言うことを聞いてくれないんだっ!？」

「だって包丁の切れ味とか、試してみたくなっただもん」

「だからって料理勝負なんて災害を撒き散らす必要は無いだろ!」

「わ、私の料理がついに災害レベルまで……」

後ろを走るクックががつくりとうなだれたのが気配でわかった。

二人の会話の通り、新しい包丁を手に入れたクックは、早速村一番の腕を持つという村長の娘さんに挑んだ。

本人曰く、「なんだかいけそうな気がした」とのことで、意気揚々と開始された料理勝負は、審査員が最初の料理を食べるなり気絶するという惨事を巻き起こして、二品目はおろか、娘さんの料理が出される前に幕を下ろすことになった。

クリスが引きつった笑みを浮かべて包丁を取り上げた光景は今でもタクミの目にしっかりと焼きついている。

しばらく走って、二人は腰を掛けるのにちょうどいい岩を見つけ、一旦休憩をとることにした。

「ううう……一度渡した物を取り上げるなんてちょっと酷いと思わない?」

「むしろキリカと一緒に、役人に突き出されなかったただけかもしれませんけど……」

「それは……そうだけど」

不服そうに呟くと、クックは天を仰いだ。

見上げた雲ひとつない空は、青く澄み渡っていた。クックは思いつきり叫びたい衝動に駆られた。

「ちくしょおー!」

思いつきり叫ぶ。

隣に座るタクミが、ビクンと体を震わせた。

「なんにも収穫なかったー!」

叫びの通り収穫がなかった。

面白い食材も無かったし、包丁までも失ってしまったのだ。

その上、折角もらったと思った包丁も取り上げられてしまった（自業自得だが）。

「せめて……せめて新しい包丁が欲しいイイイー!」

この空と同じように凜として澄んだその叫びは、木霊するわけもなく、そのまま溶け込むように消えていった。

完全に叫びが吸い込まれていくのを感じると、軽く息切れしながら頭を下げ、

「はぁ……はぁ……ふふつ、言つてやったわ……」

なぜか満足そうだった。

と、

「あるよ」

タクミが言った。

「あるよ。包丁」

「へ?」

背負った荷物を降ろし、タクミは少し鞆をまさぐると、それを取り出した。

クツクに黒い包みを差し出すと、ぷいっとそっぽを向き、

「期待はしないでね」

と小さく言った。

そんなタクミの様子に首をかしげると、少しワクワクしながらその包みを丁寧に開いていく。

そして、その包丁が全貌を見せたとき、クツクは小さく息をのんだ。

「これは……」

宝石でも触るかのように、その緋色に染まる刃に優しくゆっくり

と白い指先を走らせる。

そう、その包丁の刃は銀や黒ではなく、鮮やかかな赤い色をしていたのだ。

クックは紅玉のような目をキラキラと輝かせながら、しばしその包丁を眺めていた。

と、あることに気づいた。

これは、どう見ても普通の包丁ではない。

無論、こんな代物が村で売っているわけも無い。

街まで行けば十年に一度ぐらいの確率で売っているかもしれないが、あいにく村と街を往復するには手続き等を考えると、三日以上は絶対にかかってしまう。

「三日……？」

そういえば、クックは思い出す。

クックが眠っている二日間プラス一日、タクミはどこかに行っていた。

包丁を手に入れたとしたら、確実にその三日の間の事である。

村には売ってない。

村と街往復する時間はギリギリ無い。

だが、包丁を入手している。

もし、この状況でこの包丁を入手する手段があるとすれば――

「あんたが……打ったの……？」

恐る恐る、そっぽを向き続けるタクミに問いかける。

「そうだよ」

タクミは短く答えた。

その声色は、不機嫌なようにも聞こえるし、照れ隠しをする子供の声のようにも聞こえた。

「刃物扱えるようになったの？」

「包丁ぐらいならなんとかね。あの包丁が壊れたのは僕のせいでもあるし……どうせだから、もうちょっとだけ頑張ってみたんだ。……

……まあ、かなり出来はわるけど、ね」

その言葉に、クックは包丁をじっくりと観察してみた。

確かに赤いとは言っても、少々色がくすんでいるようには見え
し、刃も指でなぞれば少々でこぼこしているような気がする。

失った包丁に比べたら、たしかに見劣りがする一品だった。

だが、

「ふ——ふふふっ」

クックの口から自然と笑いがこぼれる。

「わ、笑う事ないだらっ？」

非難の声を上げるタクミ。

だが、クックは笑う事をやめようとはしない。

収穫はあったことに気づいたのだ。

タクミのくれた包丁は、確かに不出来で、どちらかといえばクリ
スに取り上げられた包丁のほうが良い品だった。

しかしクックにとつてこの包丁は、クリスの包丁、失った包丁、

そして世界中の包丁よりも素晴らしいものに思えた。

それに、収穫はクックだけでなくタクミにもあった。

今回の一件でタクミは、成長した。

未だに刃物に恐怖を覚えるようだが、『刃物ダメ。ゼツタイ』と
まで言っていたタクミが刃物を作り出せるまでに成長したのだ。

あのヘタレだったタクミがこんなにも成長したのだ。

嬉しくなつて、思わず笑みをこぼしてしまふのは仕方無いこと
だろう。

そう思いながら、口を尖らせるタクミを横目にクックはしばらく
笑い続けた。

「ほらほらっ！ もう街は見えてるんだから頑張んなさいよー」

数キロほど先にある街を背景に、手ぶらのクックは赤い髪をゆっ
さゆっさと揺らせながら満面の笑みで手を振った。

元気良くパタパタと前方を走る彼女のコートの際間からは、コ―

トとは正反対な純白の包帯がチラチラとその姿を見せている。

「くそっ……僕は……なんて過ちを……」

両手に荷物を抱えたタクミは、ぶつぶつと文句を垂れた。

休憩が終わった後、ちよつとした坂道に差し掛かったので「荷物、ちよつと持とうか?」といったところ、全部持たされたのだ。

(今度から気をつけないとね)

ため息をつきながら決意すると、タクミはクックに目を向ける。

結局、彼女と旅を続ける事になった。

なし崩しにそうなったとも言えるし、暗黙の了解でそうなったとも言える。

『一緒に旅をしたいっ!』

あの時、岩に魔精加工を施している最中、キリカと戦う彼女の叫びが聞こえていた。

命の危険にさらされ、「キリカと組む」というだけで助かるにもかかわらず、彼女はタクミを選んだのだ。

タクミはそれが嬉しかった。

前半に「ヘタレ」だとか「だまされやすい」とか色々言われて多少はへこんでいたが、「一緒に旅をしたい」というその言葉が聞けただけでも、料理の事も含めて全部許してしまうような気がしたのだ。

それに、

「僕も君と旅がしたいよ」

彼女がいると、不思議と勇気が出てくる。

勇気が無くても、前へと進む事ができる。

だから、タクミはクックと旅を続ける事にした。

「なんか言った?」

「んーん。何にも言って無いよ」

「嘘つかないのっ。『僕も』って聞こえたんだから! 『僕も』なによ?」

「な、なんでもないって!」

わざわざ戻ってきたクツクが、ほれほれとタクミのわき腹を肘で突いた。

その顔に浮かぶ小悪魔的な笑みを見ると、「全部聞こえてたんじやないのか？」とさえ思えてしまう。

「まあ、いいわ。今日はいいことがあったからこれ以上は聞かないであげる」

「へ、へえ。いいことってなんだい？」

これで話をそらせる。

そう思い、クツクの言葉に乗っかる。

だが、次の瞬間悪寒が走った。

クツクの笑顔が、なんだか得物を捕らえたような笑みに変わったのだ。

「決まってるじゃない」

ニヤニヤと笑いながら彼女は続ける。

「今日はタクミと言う鍛冶師が、私の専属になった日なのよ！」

「ええ！？」

驚きの余り、タクミは荷物を取り落としそうになった。

「なんで、僕が君の専属になってるんだよ！ 承諾した覚えはないぞっ！」

「だって、包丁くれたじゃない。しかもハンドメイドの」

「いや、それはそうだけど……べつにそれは『専属になる』って宣言じゃないよ」

「何言ってるのよ。ブルターニュでは、『鍛冶師が依頼無く料理人に包丁を手渡すことは専属になる証である』っていう暗黙の了解があるのよ！ あれよ、プロポーズに指輪をわたすみたいなものよ！」

「なんだって！」

しまったー！ と叫んで頭を抱えるタクミ。

しかしクツクはにんまりと笑いながら、タクミに気づかれないようにペロリと舌を出した。

（ま、嘘なんだけどねー）

ブルターニュはそもそも騎士国家で、料理人自体が少なく、文化も浅い。

そのため、料理人で有名なナカツクニと違って『暗黙の了解』だとか『しきたり』なんて物は無いといっても過言ではなかった。(やっぱ、からかいがあるわー)

そう思いながらも、ネタバレすべくクツクは口を開いた。

「ふふふっ、冗だ――」

「暗黙の了解なら……しかたない、か。いいよ。専属になろう」
「へ!？」

今度はクツクが驚いた。

まさかこんなにあっさり承諾するとは思ってなかった。

もっと、「いやだ」とか「はめたな!」とか必死に抵抗してくれ
ると予想していたのだ。

「ほ、ほほほ、ほんと!？」

「まあ、冗談なんだけどね」

勢い良く身を乗り出して詰め寄るクツクに、タクミはニヤリと口
に孤を描きながら即答する。

目をしばたたかせるクツク。

そんなクツクの様子に、タクミは身をよじって笑った。

「ぷはっ! あははははははは! ひっかったね! クツクの嘘
なんてバレバレだよ! —— クツク?」

うつむいたクツクが、プルプルと震えている。

(こ、殺される!?)

ここにきて、タクミは少しやりすぎたと言う罪悪感と、その罪悪
感を飲み込む圧倒的な恐怖を感じていた。

じりじりと交代しながら、身構える。

だが、彼女が襲ってくる気配が一向に無い。

そして、

「うそ……つき……」

かすれた声で、クツクは呟いた。

同時にポロポロと、紅玉の様な瞳から、大粒の涙が溢れ出す。

「せ、折角……専属を見つけたと思ったのに……すごく……嬉しかったのに……タクミのうそつき……」

ふえーんと泣き出してしまった。

突然の事に、タクミはどうしていいのかわからなくなる。

まさかあの強いクックが泣くなんて、思ってもいなかったからだ。

「そ、そりゃあ、暗黙の了解は嘘だけど……それで初めて……初めて鍛冶師に『いいよ』って言うてもらえたのにいつ！」

「ご、ごめん。わかった。言っちゃいけない冗談だったね」

「う、うるさい！ こっちこないで！」

ゴシゴシと目を擦りながら、ゆるさないんだから！　と言ってそっぽを向いてしまう。

その後も必死に、謝り、なだめすかそうとするが、機嫌を直してくれる気配が無い。

釣りの時に言っていたが、彼女は何人もの鍛冶師にことごとく断られてきた。

そのことを聞いていたにもかかわらず、それを「冗談だよ」と言うのは、詐欺師の所業とそうかわらないことだろう。

（さすがにマズイ冗談だったかな……）

そう反省するも完全に後の祭りだった。

「その……」

「……つく……な、なによ」

普段以上に目を赤くしたクックが恨めしそうに、睨みつけてくる。

その視線に、胸に杭を打たれたかのような錯覚を覚えながらも、

「その……ちゃんとした専属っていうのはあれなんだけどさ……」

タクミは最大限の譲歩をとることにした。

「修行の期間が終わるまで。その間だけは君の専属、っていうのじやダメ……かな？」

「ふえ？」

「ほら、どうせ一緒に旅はするんだろうし、その間僕はフリーだし

……調理器具のメンテナンスぐらいだったらやるよ」

「ぐすつ……………ほんとに？」

ナイフのように鋭かった目をまんまるにして、不安そうにタクミを見つめた。

そのしぐさは、この少女がつい三日前に死闘を繰り広げたとは思えなくするほど、弱々しく可愛らしいものだった。

「ほんと。だから、ね？」

燃えるような赤い髪を優しく撫で付けてやる。

当たり前の事だが、その髪は炎のような熱さは無く、やさしい木漏れ日のような暖かさを帯びていた。

と、クックが再びうつむいたかと思うと、全身を小刻みに揺らし始めた。

「い……………」

「い？」

漏れ出た声に、タクミは首をかしげる。

そして、次の瞬間。

クックは顔をあげると、

「いいいやっほううう！！ 鍛冶師げつとおおつ！」

太陽のように輝く笑みを浮かべて全身で喜びを表現した。

「言ったわね？ 『君の専属』って！ 今度はちゃんと自分の口から『専属になる』って言ったわね！ やった……やったあああ！

これで私も専属持ちの料理人の仲間入りiiiiiii！」

ガッツポーズをとったり、ジャンプしたり、その場でクルクルまわり始めたり——とにかく無邪気に全力で喜んでいた。

そんなクックの姿をぼーっと見ていたタクミも、我に返るなり彼女を指差し大声で叫んだ。

「だ、だましたな！」

「べつつにいゝ、だましてたわけじゃないしい。ただ涙が出ちゃっただけよ」

「そ、それはそうだけど……！ でも泣き落としなんて卑怯だぞ！

卑怯な事はきらいじゃなかったのか！」

「そりゃあ、決闘とかケン力では嫌いよ。でも、いい加減騎士団の頃のクセを抜かなきゃと思ってるね。それに今回は決闘でもケン力でもない。だったら問題なし！」

ずびしっ！ と親指を突きたてながら爽やかな笑顔を向けてきた。

「い、いや、でも——」

「さあ、いくわよー。もう日が落ちちゃうし、急がないとねー」

反論しようとするタクミから逃げるようにクックは走り出した。
いや、逃げた。

「待つて！ 話は終わって無いぞ！」

「はははは」

「笑ってないで僕の話聞いて！ お願いっ！」

前を走る真紅の背中に声を掛けるも、たただ笑い声だけを返してくる。

しかも結構な速度で走っていくものだから、大量の荷物を抱えながらだとその背中を追いかけるだけでいっぱいになってしまい、会話をするドロコではなくってしまう。

「く、くそっ……クックにあつてから散々だよ、全く」

ぜいぜいと肩で息をしながら、吐き捨てる。

同時に、「だけど」と付け足した。

——『専属になる』と提案するあたり、僕は彼女の事が気に入ってるんだろっなあ。

そう胸中で呟くと、タクミは苦笑いを浮かべながら彼女の背中を追いかけて続けたのだった。

料理ベタ料理人と刃物恐怖症鍛冶師。

専門分野が苦手という共通点を持った変な二人の影が、のどかな街道を走っていった。

エピソード（後書き）

一応、これでクックスミスはおしまいです。

いやしかし、読み返してみるとひどい内容ですね（笑）

機会があれば、いろいろ修正してみようかと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5053o/>

コック×スミス

2011年10月18日12時04分発行